

金子元臣
合著

江見清風

和漢朗詠集新釋

東京 明治書院

明治
43. 8. 4
丙寅

凡例

- 一 本書はその名の示すが如く新釋なり。然れども、なほ明詠集註疏のあらゆるものを参照し、網羅したり。
- 一 註疏中の巨璧を私註とす。集註、諺解の二書は、よくその緊要を得たりと稱すと雖も、畢竟私註を抄録して、舊説を糊塗するにといまる。國字抄以下は論するに足らず。而して、われらが新釋を以てこの私註に比せば、繁簡精粗、もとより同日の論にあらざることを信す。
- 一 本書は、別ちて二巻と爲す。これ公任卿編纂の當時、上下二巻に分たれたるを襲へるなり。この他、書中の題言、本註等、すべて其の舊態を損せざるやうに務めたり。
- 一 新釋は、わかちて、出典、語釋、意釋、考異の四項とせり。
- 一 出典は時に擧げざるものあり。こはその明確を缺けるものなり。
- 一 註釋は、まづ題意を釋き、語釋、意釋の條下に本文の意を釋き、考據正確を期すと雖も、又務めて簡明を主としたり。
- 一 本文の訓讀は、つとめて古訓に従へり。これ本書の舊態を損せざると共に、上世の人

の漢詩文の訓みさまを知らしめむがためなり。
 一 本文は和漢朗詠集註本を底本と爲し諸家の秘本を以て校讐し、その考異は上欄に標記せり、その校讐の諸本は、卷末の附録に詳にしたり。
 一 本書は、その新釋の外、漢句の搜索に使せむが爲に、卷首に字畫索引を掲げたり、いづれの句にまれ、自在に字畫によりて檢出することを得べし。
 一 また卷尾に添へたる雜考數篇は、本集に關するすべての智識を網羅せむとしたるもの、作者列傳は、その詩歌の作者の小照なり。

明治四十三年七月

著者しるす

和漢朗詠集新釋目次

卷上

春

立春	一
早春	六
春興	三
春夜	一八
春日	一九
若菜	三
三月三日	三五
桃	三〇
暮春	三
三月盡	三
閏三月	六
鶯	四〇

夏

霞	四七
雨	四九
梅	三三
紅梅	三三
柳	六〇
花	六〇
落花	七
脚闌	七
款冬	七
藤	九
更衣	八三
首夏	八三
夏夜	八六
端午	八六
納涼	八六
晚夏	八六
花橘	九

蓮	六
郭公	一〇
蟬	一〇
扇	一一
秋	
立秋	一四
早秋	一六
七夕	一七
秋興	一八
秋晚	一九
秋夜	二〇
八月十五夜	二二
月	二四
九月九日	二五
菊	二六
九月盡	二七
女郎花	二八

秋	一〇
蘭	一一
種	一二
前栽	一三
紅葉附落葉	一四
屬	一五
歸屬	一六
蟲	一七
鹿	一八
霧	一九
霧	二〇
擽衣	二一
冬	
初冬	二二
冬夜	二三
歲暮	二四
爐火	二五
霜	二六

卷下 雜

雲	二〇七
水	二〇八
春水	二〇九
微	二一〇
佛名	二一一
風	二一二
晴	二一三
曉	二一四
松	二一五
竹	二一六
草	二一七
鶴	二一八
猿	二一九
管絃	二二〇

文詞附遺文	二二一
酒	二二二
山	二二三
山水	二二四
水附漁夫	二二五
禁中	二二六
古京	二二七
故宮附故宅	二二八
山家	二二九
田家	二三〇
隣家	二三一
山寺	二三二
佛事	二三三
僧	二三四
閑居	二三五
眺望	二三六
餞別	二三七
行旅	二三八
庚申	二三九

帝王兩法皇	三六
丞相兩執政	三五
將軍	三四
刺史	三三
詠史	三二
王昭君	三一
妓女	三〇
遊女	二九
老人	二八
交友	二七
述懷	二六
慶賀	二五
祝	二四
戀	二三

附錄

作者略傳
雜考

字畫索引

一畫	一擊之主鶴喚 一擊之雨空瀟 一點風管 一點燈燈 一點愁眉 二千里外 二月之雪落衣 二月餘花 二星過遂 七尺屏風其徒 七萬里之程 八十三 八月九月 九枝燈盞 九夏三伏之 九品蓮臺之間 一葉舟中 一萬里身 一戴舟身 一葉舟飛 一葉寒燈 一樹之春色 一聲山鳥	三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一
二畫	十月江南 十方佛土之中 十年離別 丁令威之詞 人之送我何日 人如鳥路 人被鶴聲 人間却踏 人間羅網 人間榮耀 人煙一壠 人無更少 入松易亂 又見林園 又是涼風	三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一
三畫	三春雁北飛 三秋而宮闈 三秋岸雲 三壑雲浮 山中景色 山月正圓 山成向背 山似屏風 山岳中掃雲棧 山底探囊 山桃復野桃 山睡甲日 山深感動 山郭遠樹 山復山 山路日暮 山道整理 山腰聽雁 山徑尋表 山館鳴時 山嶼鳴兮宮樹 士女笙歌 乃是陳丞相之	三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一
四畫	少吹和霜 夕殿雙飛 大庭四時 大廈後之梅 大郭山屬 已酉年終 已終未嘗 已辨相思之字 子孫長作 子猷看處 下樓桂棹 千丈波雲 千年之翠滿手 千林往來 千峯馬路 千萬里外 千聲萬聲	三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 九 八 七 六 五 四 三 二 一
五	心期片月 心通上下	三五 三四

竹亭陰合	空	四母之登欲歸	君聞謝	更還留於玉露	阮籍嗜酒
竹竿頭上	一八	四京席門	舍元股角	更無一事	床上卷教
竹院君閉	三	四極顏色	舍自消	更無加草	床燈短脚
竹斑湘浦	三	四樓月落	舍雨積松	更關夜靜	匣中開出
竹籬晚鐘	三		听雨飛泉	材取附己	
羊太傅之早世	三		吟亦寒玉一聲	李夫人去	
老眼早覺	三		坐在爐邊	李延年之辭族	
老眼易迷	三		坐制諸侯	李將軍之在家	
老菊衣蘭	三		巫女廟花	步步初驚	
老鷄心閉	三		扶桑登無影	每朝擊少	
老鷄從來	三		折柳擊新	壯羊期乳	
耳能棄城	三		折梅花而揮頭	見天台山之	
自香開家	三		沙長爲塵之頌	見此爭無	
自知其貴	三		沙頭驚鷺	言下暗生	
自疑街葉	三		沙頭刺印	言翻巧偷	
舟中浪上	三		沈醉佛悅	谷水洗花	
行人征馬路驛	三		淚下流而得	谷靜幾聞	
行行重行行	三		淚難離其多許	身埋胡塞	
行吟古集	三		我之送人多年	車前騎病	
行客塵淚於	三		我王季行	長星早沒	
行宮見月	三		我后一日之澤	邑驛遲歸	
行燭流流	三				
衣濕黃梅	三				

七畫

八畫

和菜裏而吸口	三	孤館宿時	或添孤絲之	林邊容輝	花舞隨風
夜行抄厚	二	官途自此	昇殿是象外	杖策買臣之衣	花滿紫露
夜向殘更	二	定是終身	明月好同	杖策金鈴	花開如雪
夜雨聞鐘	二	宛轉雙蛾	明月映之晚色	武王之弟	芳林拂客
夜雨聞鐘	二	宜將愁字	明々仍在	羨景刺殘	迎春乍變
夜雨聞鐘	二	尙香亦天下之	明々仍在	牧童寒笛	近日那離
夜長無眠	二	岩泉咽兮嶺猿	昔切利天	物色自堪	知汝花中
夜夜聞聲	二	幸逢勇舜	昔年願我	垂釣者不	空夜寂閉
夜登度公之樓	二	庚申夜牛	昔爲京洛	告犯關罪得魚文公	空餘曉曉
夜深四面	二	往事渺茫	昔聚丹鳥	花下忘歸	空階雨滴
夜宿橋浦之波	二	披則秋霜三尺	果則上林苑之	花月一窠	臥見新圖
夜遊人欲	二	抽簪於北山之	東平蒼之雅量	花色如燕菜	金谷醉花之地
夜寒初共	二	拂水柳花	東出西流	花光燭々	金膏一滴
夜露收盡	二	拂簾拾盡	東岸四岸	花每春自而	長生殿裏
夜露華表	二	河海不厭	東顧亦有林塘	花明上苑	長門闈而不開
夜露凝露	二	波頭觸處	松高風有	花亭我醉	長夜君先去
夜露凝于	二	泣孤城百戰之	松寒風破	花登重春	長風浦之暮聲
奇大吹花	二	泣尋沙塞	松影君子之德	花悔歸根	長樂殿聲
始無情於機婦	二	泣實先朝	松樹千年	花船樺入	長樂殿聲
始蘇臺之露	二	忠仁公者	松下陶陶	花問寬友	門柳復岸柳
始蘇臺之露	二	念梅樂之尊	林中花錦	花開合掌	雨打易破
季文子妾	二	放野群牛	林間燈酒	花開香散	雨初白水
孤花露露	二	或垂花下	林驚何處	花飛如錦	雨夜幽人耳
孤帆連水	二	或逐風不返	林驚何處	花新開日	雨濕原靈之極

非唯織色	俗骨不可以踏	後人立嗣於	春風吹鞋	胡馬忽嘶
青山有雲	俄添怨別之聲	洗來寧辨	春風梳山祇之	胡笳未歇
青苔地上	低語良本	洞中綫樹	春風曉剪	胡雁一聲
青苔色紙	則赤黃掃宮人	洞中清淺	春情難聚	胡塞誰能全
青嵐吹兮皓月	則漢女施粉之	洞花欲落	春無春色	皇后之父
青絲慘出	前途程遠	洞裏移家	春過夏開	皇甫謹之送
青蛾正畫	前頭更有	洛水高低	春煙暈暈	相如昔挑
青羅裙帶	南山芝洞	流水不歸	春國黃珠	相思夕上
岸口風來	南枝北枝	流水無心	春樹春枝	看無野馬
岸白雲迷	南朔北雲	洲芳杜若	春歸人寂寞	看野馬
岸竹枝低	南望則有	洲蘆花雨	昨日山中之木	看野馬
岸柳秋風	南樓月下	洋々掃耳	是非老之幸後	看野馬
岸風隨力	南樓說月	恨同伯鸞	昭君若歸	看野馬
岸上卷收	成陽宮之煙	恨唯有紅顏之	昭君村柳	看野馬
秋風短脚	吹中偷說	忽不聞於伶人	染枝染浪	看野馬
	咽霧山驚	思魏文以既	柳色和煙	看野馬
	契松柏之後凋	春入枝條	柳無氣力	看野馬
	城柳宮桃	春王之月漸落	泉聲雨洗	看野馬
	弄箭易迷	春生香火	泉聲遙落	看野馬
	客思唯從	春來運是	珍重紅房	看野馬
	室有師勝	春花面々	背壁燈殘	看野馬
	幽咽風簫管之	春風香水	背燈共憐	看野馬
	幽思不窮	春風桃李	胡角一聲	看野馬
	後會期遠			看野馬

九畫

秋風悵望	香爐峰雪	容觀似男	桓公任之以國
秋風滿秋溪	幽巖似彩	庭上蕭條	梁元音遊
秋庭不掃	故山無主	塵增氣色	棋檟乘戰
秋破南窗之夢	故能成其高	徐君塚上	氣滿如兄
秋聲不到	故能成其深	採故事於漢亭	氣滿風梳
秋景早移	甚於疾風披雲	恐蓬蒿首	泰山不讓土壤
秋燈挑盡		恐蓬蒿里	烟波夜宿
秋露梧桐		浮藻聯翩	烟波惟新
穿紗履穿		海岸孤村	烟消門外
紅花定香		海賦驚中	烟添柳色
紅紫黃落		漫天秋水	烟開翠眉
紅旗風卷		淚洗欲消	烟寒翠眉
紅葉雙乾		浮雲掩而忽昏	烟霞無跡
紅燭空餘		旅店蕭蕭	烟霞遠近
執扇掩來		晉遠威將軍	班女閣中
若生石面		晉驍兵參軍	班姬未卷
范蠡收買勾踐		時舞雙間	珠麗未卷
范蠡扁舟之泊		香巴字而知	茶能散悶
若使榮期		香帶展時	草木扶疏
若遊魚銜鉤而		香窠有卷	草色晴來
若輪鳥纏繳而		桂陽蝶之文辭	草色拘留
貞女映空		桃李不言	草色雪晴
赴征路獨行		桃李深淺	草滋頗潤之卷
		桐葉風涼	荒涼隱月

十畫

荒鷺見露	三〇二	停舟於明月峽	二六	推為忘年之友	四九	曉鶯聲々	七	莫怪紅巾	四二
送老高僧	三〇一	偷旋春風	五	淡水交情	四七	望山嶺月	二七	莫使塵中	三三
送春不用	三〇〇	勸樹教之	三七	深更軒白	八	望長安城之月	三	逐夜光多	一六
進爭未抽	二九九	南山之月垂眉	四〇	深巷無人之處	四九	望礙孤峰之月	三	逐吹潛開	一
豈起紅塵	二九八	南山月落	四八	深淵聞風	四〇	梅含雜舌	五	通夢夜深	一〇
豈種雪片於	二九七	商聲清膺	三三	湖變作瀾之聲	三三	梅花帶雪	五	逢僧談風	三
託一妍以始飛	二九六	唯有羅衣	三二	清冷鸚鵡孟之	三三	梅嶺花排	三〇七	祭征虜之未仕	三
託鍾異代之交	二九五	唯別殘燭	三	清歌數聲	三〇	梧嶺秋風	二〇七	眼思餘算	三
留春不用	二九四	唯將老年淚	三	淮王難題	三	梧嶺影中	一七四	眼贊蜀郡	三
留春春不駐	二九三	唯賦秋風	二二	淮南之宋神仙	三六	梯危斜踏	二五八	眼混五湖之烟	三
病力先衰	二九二	堂有母儀	三三	猶縱亂於舊拍	三	欲以浮生	三	眼盡巴山	三
兼皇驚歎	二九一	寂々閉口	三三	陳孔璋詞	三〇七	欲充今日	二	眼望登臺	三
兼旬之一千餘	二九〇	宿願當招	八	陶朱辭越	三〇	欲謂之水	二	移神者唯開飯	三
秋賦殘燈	二八九	寄情於一座之	三九	陶安公之寓在眼	三	欲謂之平	六	筵歡夜月	三
哀司徒之家雪	二八八	專諸荆卿之	一	陶家兒子	三	欲謂明君之魂	三	第一第二粒	三〇
酒泉郡之民	二八七	將希雨露之恩	一	陸池逢日	三	欲冬曉旋	三	第一傷心	三〇
酒是下若村	二八六	張良一魯之香	三九	晨積瓦溝	三〇	斜月登千巖之	三	第三第四粒	三〇
馬相如賦	二八五	張儉射之	三九	晦跡未掩	三	荷出池心	三	第五粒聲	三〇
題似得群	二八四	庸才不可以舉	三	晚寺僧歸	三	莫以逗留於	三	終年無盡風	三〇
		得與汝同歸	一六	晚涼澄到	三	莫以復息於	三	終運七世之孫	三〇
		恨望悲風	七	曉藥俞開	三	莫空管領	一〇	終竹床底	三〇
		惆悵春歸	七					習其弊色	三〇

十一畫

十二畫

香風宿之雜犯	三〇	鳥擊露曉	二五	寒雲在背	二九	陽春曲調	四七	管籥部部	四〇
昨疑舟流	二九〇	斜陽風	二	寒雲空浦	四八	階底書卷	八	菊爲重陽	一四
詞海鱗舟	二八九	庫車秋暎	三〇	寒園獨臥	四九	嘉黃真波山之	三	華山有馬	一四
過三代而猶沉	二八八	刺見金陵	三	尋勝春暮	三〇	嘉利口之覆	三	寒重杪的	一四
野中老菜	二八七	寒流過	三〇	尋勝勝於魏文	三	羅帶珠麗	四	晴々不消	一〇
野寺訪僧	二八六	蛇驚劍影	三九	碧中散之竹林	三三	班婕妤團雪之	三	盛夏不消雪	一一
野亭風塵	二八五	冷日橫而駐	一六	碧宅迎晴	三	晴後青山	三	等閑驚綠	一一
野草芳菲	二八四			碧廬山雪	二	曾波之眼新嬌	三	筵馬來時	一一
野酌卯時	二八三			彭蠡秋聲	一七	曾非種處	一六	紫草偏奪	一〇
野爐火暖	二八二			強吳滅兮	二六	朝有紅顏	四	紫葢之嶺風疎	一〇
雀能穿屋	二八一			就中腸斷	二	朝候日高	二	紫葢之嶺風疎	一〇
雀季珪之小妹	二八〇			幾行南去之催	三	朝踏落花	七	紫葢白鷗遺迹	一〇
雪中放馬	二七九			幾處花堂夢覺	三	期氣味之克調	三〇	紫葢花下	一〇
雪月花時	二七八			渡口郵船	四	柳三峽	四	紫葢花下	一〇
雪似鷓毛	二八七			波口郵船	四	柳於扁舟逸	四	紫葢花下	一〇
雪盡梁王	二八六			清溪之波疊面	四	柳歌一曲	一	紫葢花下	一〇
雪滿群山	二八五			湖涉復涉涉	三	爲我今朝	三	紫葢花下	一〇
雪點林頭	二八四			湖涉復涉涉	三	爲君事容	三	紫葢花下	一〇
雪覆望山	二八三			湖涉復涉涉	三	爲君事容	三	紫葢花下	一〇
魚遊遊戲	二八二			湖涉復涉涉	三	爲君事容	三	紫葢花下	一〇
鳥下綠蕪	二八一			湖涉復涉涉	三	爲君事容	三	紫葢花下	一〇
鳥老歸時	二八〇			湖涉復涉涉	三	爲君事容	三	紫葢花下	一〇
鳥期入谷	二七九			湖涉復涉涉	三	爲君事容	三	紫葢花下	一〇
鳥踏梅花	二七八			湖涉復涉涉	三	爲君事容	三	紫葢花下	一〇

鏡無定樣	六	黃壤誰知我	四三	煙波憶新	二八	暮沈沈	三三
詞賦無文	六	黃顏續林	一七	煙清門外	三三	暮暮曲	三三
詞賦於人	三三	粧樓未下	四一	煙柳柳色	三五	暮味文章於骨	三六
閉外已知	三三	集范別寓之	三六	煙柳翠眉	三九	暮葉深深	三七
閉外已異	三三	項莊之會鴻門	三九	煙籠無迹	四〇	遊子難行於	三三
閉箱衣帶	七			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
閉居屬於誰人	八			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
閉思看汝	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
閉思有月之時	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
閉思精桐	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
閉思青天	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
離外聞鴻	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
離外范叔	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
離外七百里之	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
離外泥里	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
離外是殘粧	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
離外消碧落	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
離外無人	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
離外遊遊之跡	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
離外紅鏡	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
離外新柳	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三
離外結語	二六			煙籠遠近	四〇	遊於勝地	三三

十三畫

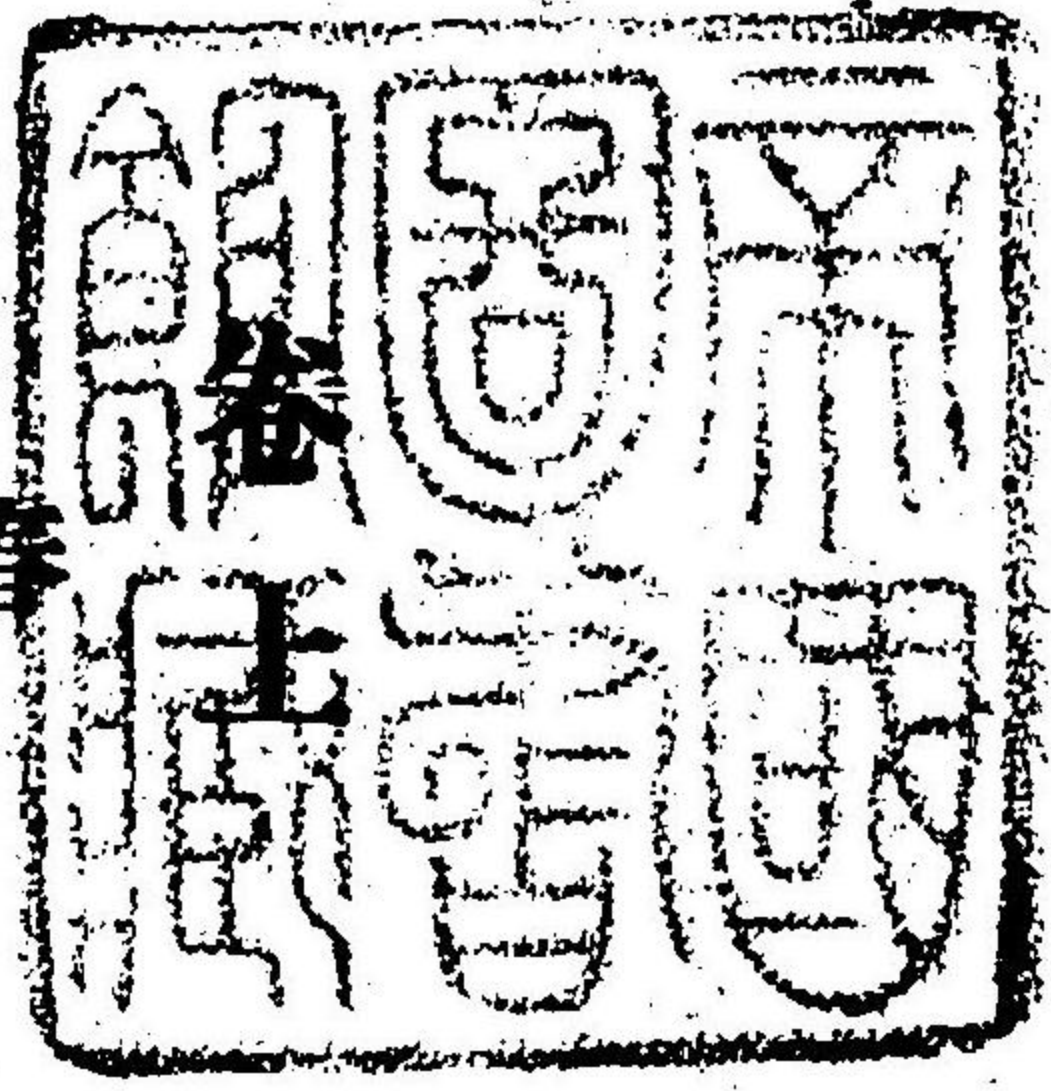
十四畫

鼓鼓於東流之	三九	漸似故人	二七	盡日望雲	三三	劉白若知	三三
僧老眉垂	三九	漸欲拂他	二七	碧玉寒重	三三	影落畫中	三三
願風風不定	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	雁歸萬雁仙之	三三
嘉辰今月	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	離化未必光于	三三
團扇香而共絕	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭心月泛	三三
夢裏身名	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭荷葉動	三三
夢斷燕姬	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
夢非真司徒之	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
夢非真司徒之	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
對來終夜	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
漁父晚船	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
漁舟火影	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
漁主手中	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
漁帝傷曉	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
漁帝龍顏	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
漢宮萬里	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
漢高三尺之劍	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
漢祖之降沛郡	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
漢家之三十六	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三
漢語遺棄之初	三九	漸覺世俗之	二七	碧玉無聲	三三	潭水可算	三三

十五畫

廿一畫	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六
廿二畫	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六
廿三畫	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六
廿四畫	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六
廿五畫	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六
廿六畫	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六
廿七畫	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六	謝靈運於新花 三六
朗詠集新釋索引終			

和漢朗詠集新釋



金子元臣 江見清風 合著

立春

日本歲時記に「立春は正月の節なり。大寒の後十五日、斗柄長に指すを立春といふ。立は始也。元日は正月の日の始也。立春は正月の氣の始なり云々」と見ゆ。大陸曆に於ては、一月一日より三月盡日までを春とし、夏、秋、冬、各三月にして、十二月に至る。これ曆の上に於ける分ちなり。されど、天の氣は、必ずしも然ることを得ず。眞に春の時節に入るは、立春より以後とす。さて、此の如く、立春は曆の上の季節に拘らず、天の季節によるものなれば、必ずしも正月になりてあるにあらず、年によりては、舊年の内に、立春の節となることあり、これ古今和歌集の編纂に「年の内に春立ちける日よめる」といふ所以なり。又、この時代に用ゐられたる曆は、清和天皇の御世に制定せられたる、宣明曆なり。春立ちける日よめる」といふ所以なり。又、この時代に用ゐられたる曆は、清和天皇の御世に制定せられたる、宣明曆なり。

逐吹ヒチカセテ 開ヒナ 不待マタ 芳菲ヨシキ 之候ノトキ 迎春ハダシ 乍變ハナハシ 將希マカ 雨露ツキ 之恩ノチ

○逐吹 莊子論物に「吹萬不同」とあり。莊子因の註に「吹指風而言、萬萬竅也云々」。全唐詩

○原註、内裏の上、淺草本私註、及び菅本に、立春日とあり。
○作者、菅本、内閣本に公乘健、版本私註、集註には、公乘健或紀淑望とあり。

にも、「枯蓬唯逐吹。墜葉不歸林」とあり、皆風の意に用ゐたり。○芳菲之候 芳菲は、草又は花の香の馥郁たるをいふ。又芳草の茂生する貌。楚辭東皇に「芳菲兮兮兮兮」とあるに出づ。博雅に「菲非香也」と見ゆ。○迎春乍變 今まで寒氣に閉ぢられし梅の、立春の節となりて、忽ち生氣を帯ぶるをいふ。○雨露之恩 春來れば、雨露暖にして、草木生長するが故に云へり。白氏文集卷二「雨露長」

集卷二に、「君恩若雨露。君威若雷霆」といふ意をも含めり。
大意 梅は百花の魁を爲すものなれば、今吹き初めたるばかりの春風を慕ひて、人の心付かざるに、早く既に蕾を破りて、桃紅李白の盛春を待たず、一陽來復の氣を迎へて、急に寒木の姿を變じて、漸に花を開かむが爲に、將に雨露の潤膏を希はむとすとなり。なほ裏には、我身位卑く、官賤くして、世に知らるゝことも無かりしは、寒木の春を知らざるが如き有様なりしに、今日この内宴に召されて、一篇の作を獻ることを得たるは、寒木の春に逢へるが如し。されば、この後、ますます、君の御恩を待つこと、雨露の恩を希ふに異ならずといふ意を含めたり。

○内宴 正月廿一日、廿二日、廿三日の内、千日に當る日を選びて、仁壽殿に行はるゝ内々の節會にて、文人ども題を賜はり、詩を作りて、御前に披講し、畢りて、親王公卿に、若菜のあつものを賜ふ。仁壽殿には、延喜の時、梅花を植ふられしこと、兼秘抄に見え、この詩も、梅花を云へれば、其の通りしは梅花なること知るべし。○賦 文選文賦に、「賦、體物而瀏亮」とあり。瀏亮は清朗の意にて、花鳥風月、その他の事のありさまを、能く明に言ひのぶるを云ふ。故に又、賦は布なりとも云へり。

池凍東頭風度解窓梅北面雪封寒

立春日、香、梅、雪、封、寒、
園語文友、寫

釋釋 ○東頭、頭はほとりの義。

大意 禮記月令に、「孟春之月云々、東風解凍」といへるが如く、春は東方を主とするが故に、池の水も、東方は早く春風に當りて解け初むると雖も、北方は日陰なるが故に、殘雪なほ消えやらで、窓前の梅も、未だ綻び初めず、空しく、雪に封せられて、好暖を覺ゆることなしとなり。なほ、裏には、諸文友の官位の昇進ありたるに、わが身のさる事もなき意を含めたり。題に、書懷とあるを思ふべし。

○芸閣 露香の種をいふ。藝家典略に「芸香、辟穢、故藏香、藏香、芸閣」と見え、陳子昂高府君墓誌に、「其風飲仁檢校、秘香、持三寸筆、終入芸香之閣」とあるは、即ち秘香閣を云ふ。わが園書寮に當るべけれど、こゝにては、大學寮をいへるが如し。

年の内に春は來にけり一とせをこそとやいはむことしとやいはむ。元カ

出典 古今集上に「ふる年に春立ちける日よめる」と詞書したり。

釋釋 ○年の内に 今年の内になり。○春は來にけり 「けり」は過去を示す助辭なるが、多くは、事の意外に起れるを驚き思ふが如き趣あり。故に、この一句を俗譯する時は、「立春ニナツタツイ」といふ程の意なり。年内の立春のことは、卷初、立春の條を看よ。

大意 年を越えて立春となるが常の習なるに、今年は、舊年の内ながら、早くも立春となりしにつき、この同じい一つの歳を、去年と云はむか、やはり今年と云はむかと、極めてあどけなく怪み思へるさまなり。

柳無氣力條先動池有波文氷盡開府西池

出典 白氏文集卷二に見え、次の「今日不知云々」の上句と合せて、七言絶句なり。

釋釋 ◎無氣力 柳の、始めて萌え出づる頃は、枝條未だ強からず、春風の吹くにつれて、よわよわと打ち靡くが故に云へり。◎波文 波のあや織るをいふ。

大意 次を看よ。

今日不知誰計會春風春水一時來白

釋釋 ◎計會 豫め計算して物を計り會はするなり。

大意 昨日まで冬の景色を離れざりしに、今日見れば、春風が、そよよと吹き来りて、柳の枝を動かす、張りつめし池の水も解けそめて、水の面に波文の起つを見るにつけて、いかなる者が、立春の今日、春風と春水とをして、一時に來り會せしむるやう、計らひしにやあらむとなり。起句は春風、承句は春水をいひ、結句に、この二つを收拾したり。

夜向殘更寒磬盡春生香火曉爐燃山寺立香

釋釋 ◎向殘更 一夜を分ちて、五更と爲す。一更を甲夜といふ。戌時午後八時なり。二更を乙夜といふ。亥時午後十時なり。三更を丙夜といふ。子時午後十二時なり。四更を丁夜といふ。丑時午後二時なり。五更を戊夜といふ。寅時午前四時なり。殘更は、即ち五更を云ふ。向は、倭訓「なんく」とす」の條

○佐藤木、淺草木、櫻木、寛永木私註に、宿石山寺、立春初作と題し、管水一書に、宿天台寺、立春初作とあり。

○波の字、原本に、「浪」に作る。今、文集、及び諸本によりて改む。又、文の字、文集、及び諸解に、「紋」に作る。

に、「垂字、向字などをよめり。成なんとするの義なり。しにかゝるを垂死とし、くれがゝるを、向暮といふの類にて推べし」と見ゆるが如し。◎寒磬盡 爾雅釋詁に、「大磬謂之磬、疏に「磬樂器名也、以玉石爲之、云々、釋名云磬磬也、聲堅磬々、云々」と見え、倭名類聚抄調度に、「和名宇知奈良志」とあり。後世には、多く銅を以て作る。今は冬去りて、春來らんとする際なるが故に、「寒磬盡」といへり。◎香火 佛前の焼香なり。

大意 今宵一夜限りにて、立春の節となるなれば、寺僧が、後夜の勤に打ち鳴らす、冬の寒氣を帯べる磬聲が盡くると共に、春は、曉方の佛前の香爐の火のぬくみより、ほのくくと生じ來るとなり。袖ひらちてむすひし水の氷れるを春たつ今日の風やとくらむ。實之

出典 古今集上に、「春たちける日よめる」と詞書したり。

釋釋 ◎袖ひらちて ひちは、濡れ浸ることなり。この詞、四段と上下二段とに活きて、四段及び上二段言は自ら然る詞、下二段なるは使然言なり。こゝなるは、上二段言にて、自ら袖のぬるゝも知らずして、云々せし意。◎むすぶ 手にて水を掬ひ上ぐるをいふ。下の解くるといふ詞と、互に縁あり。◎春たつ今日の風やとくらむ 上の池凍東頭といへる詩の條下に云へる「東風解凍」といふ意を思ひ寄せたり。

大意 過ぎにし夏の頃、酷しき暑さに堪へかねて、木の下蔭の清水流るゝあたりに立ち寄りて、我が衣の袖の濡るゝも知らず掬ひし水の、いつしか秋も過ぎ、冬となりて、固く結びて、氷となりたるを、今日しも、春立ち返りて、のどかなる風の吹き融して、また元の如く、清しき流となすことなら

むと、月日の経過遠に、天地の景氣の移り變りの、暫も淀まざるを感せしなり。

春たつといふはかりにやみ吉野の山も霞みてけさは見ゆらむ。

出典 拾遺集卷に、「平貞文が家の歌合により侍りける」と詩書し、歌仙家集には、「初春」と題したり。

釋 ○いふばかりにや いふ程にやの意。「や」は疑の助辭なり。◎み吉野 大和國吉野郡吉野山にて、みは賞美の意を含める添辭なり。さて、この山は、雪深き處なれば、その山の霞めるは、實に春の立てるしるしなり。

大意 昨日今日、漸く春の季節に入りたると云ふばかりなるに、その爲にか、今朝ははや、冬の景色ががらりと變つて、吉野山のあたりに霞が立つて、すんと、春の景色に見ゆるやうなとなり。この歌、昔より、忠岑が秀歌として、この集の作者公任卿が九品和歌にも、上品の内に入れられ、道濟十體にも、最上とせり。

早春

氷消田地蘆錐短。春入枝條柳眼低。

出典 全唐詩元集に、見えたる七律なり。全詩、「真、變、虛、老、海、掃、西。天下風光數會稽。靈汜橋前百里鏡。石帆山崎五雲溪。」。安得故人生。羽翼飛來相伴。時如泥。

釋 ○蘆錐 芦の芽の初めて出でたるをいふ。その狀、錐に似たればなり。蘆は、玉簫に、「葦之未秀者」とあり。◎柳眼 柳の新芽をいふ。その狀、物の眼に似たればなり。

大意 四方の田面に残れる氷はいつしか消えて、蘆の新芽があらはれ、岸の柳の條には春が來りて、眉籠りして下重すとなり。

先遣和風報消息。續教啼鳥說來由。

出典 白氏文集卷十に、潯陽春三首二年作の内の春生の七律なり。全詩、「春生何處聞周遊。海角天涯遍始休。」。展張草色長河畔。點綴花房小樹頭。若到故園應覓我。爲傳淪落在江州。

釋 ○和風 春風の和らかにして、暖なるをいふ。◎消息 易經卦に「日中則昃、月盈則食、天地虛與時消息、註に「消息謂進退也」。又、文選の李善注に、「消往也、息來也」など見ゆるにより、音信の義とす。晋書陸機傳「陸機語犬曰、我家絕無書信、汝能齎書取消息不、犬遂至家得報還洛」とあるこれなり。◎來由 由來と云ふに同じ。合類大節用集卷に、「根元之義」と云へり。

大意 春は、人界に向つて、まづ和風を吹かせて、その季節に入れる消息を傳へしめ、續いて、禽鳥を、樹梢に囀らしめて、その來由を説き知らしむと、すべて、春を主人公として仕立てたり。

東岸西岸之柳、遲速不同。南枝北枝之梅、開落已異。

出典 本朝文粹卷八に、「早春同賦春生逐地形」と題せる序文中の詞なり。

大意 春は東方より來るが故に、東岸の柳は、早く萌え出で、西岸の柳は、遅く芽ぐみ、又南方は日向にして暖く、北方は日蔭にして寒ければ、南枝の梅は、とく咲きてとく散り、北枝の梅は、遅く

開きて遅く散ると、自然の景氣を敘したり。東岸、西岸、北枝、南枝と云へるは、共に、逐地形とある題意をあらはせるなり。

紫塵嫩蕨人拳手碧玉寒蘆錐脱囊

和早春晴野相公

釋 ○紫塵嫩蕨 下學集門辭に、「嫩、懶、嫩、已上三字各別也。本朝朗詠集有樂天詩句、樂天の詩句、此の詩句が、樂天の詩句に暗合せしなり。云、紫莖嫩蕨人拳手、然日本俗、因三字形相似、呼嫩作蕨讀、大誤也、况句意亦失蕨之用也、子細可味之、一辨莖字、又作蘆是亦大誤也、紫莖尤佳也。嗚呼一句之中、誤三箇字何哉」と云へるにつきて、朗詠考に、「按紫莖嫩蕨之誤、見下學集、西土檢洞冥記、有紫莖寒蕨文、蓋非嫩蕨也、楚辭有綠葉分紫莖之句、指秋蘭也、未見紫莖、然范仲淹茶詩、黃金碾碎綠塵飛、紫塵綠塵相似、然此不可言紫塵、必是莖之誤」と云へり。然るに、白石子筆話上には、「蕨の萌え出でたる穂に、紫の色したる細末の粉あるが故に、紫塵といひて、魏晉六朝の間には、是に類する語少らず」と云ひ、蕨字は、玉篇に、「情也、また、懶は「俗蕨字」といひ、嫩は「嬌弱也、少好兒、俗作嫩」といへり。抑も、紫塵は、碧玉に對したる語にて、比喩なり。されば、紫莖といふは非なり。嫩蕨の二字は、蕨の萌え初めたる時、その頭の臥したるを、形容したりとせむか、堀川院御時の百首和歌に、修理大夫顯季卿、早蕨を、紫の塵うちはらひ春の野にあさる蕨のものうげにして」と詠めり。然れども、なほ、嫩字の意とする方妥當なるが如し。勅點本、及び金澤本、寛永本私註に「モノウキ」と訓めれど、今、集抄、諺解、國字抄等に意訓して、

○佐藤本、醒
齒本、寛永本
私註、及び普
本に、早春晴
後と題せり。

「ツカキ」と讀めるに従へり。○人拳手 蕨の萌え初めたる時は、その形、人の拳を握りたるが如きをいふ。○碧玉寒蘆 碧玉は、蘆の青き玉に似たるを云ひ、寒蘆は早春の候、氣候未だ寒ければ云へり。○錐脱囊 蘆芽の萌え出でたるは、錐の囊を貫きて差し出でたるに似たりとなり。史記平原君傳に、「賢士之處世也、譬若錐之處囊中、其末立見」の文あり。

大意 野邊を見れば、紫塵の色したる蕨は、いまだその長け延びずして、恰も、人の拳を握りたるが如く、又水邊を見れば、碧玉の如き蘆芽の萌え初めたるは、錐の囊よりあらはれ出でたるが如しと、早春の景氣を述べたるなり。

○集抄七に、小野宮嵯峨殿詩作事と題して、「昔嵯峨天皇、にし山の大井川のほとりに、御所をたておぼしめて、嵯峨殿と申て目出度ゆしくつくりみがかろのみならず、山水木立わりなくて、殊に心とまるべき程にぞ侍ける。如月初の十日のころ、帝はじめて御幸侍りけるに、小野たかむらも供奉し侍けるに、帝たかむらなめされて、御前の野邊のけしき、ちと詩につくりて奉れと、仰のありけるに、たかむらとりあへず、紫塵嫩蕨人拳手、碧玉寒蘆錐脱囊とつくりてたてまつりければ、みかどしきりに御かんありて、宰相になされにけり。おほくの人を越て其座につき給にけり。ゆゑしき面目なりけんぞかし。たかむら逝去の後、大唐より樂天の詩どもをおくりけるに、蕨人拳手、蘆寒錐脱囊といふ詩侍り。こゝろはすこしも蕨の詩にたがはず。ことばはいさゝか變れり。時の秀才の人々の申けるは、蕨の句なほめでたしとぞほめ聞えける。實心詞ことに面白く侍り。わらび紫色なればかゝり、かゝればものうきに似たり。是又手をにぎるかと思えたり。蕨する物かたふくと云文は、高野大師の御詞に侍り。碧玉の寒蘆のおひ出で侍れば、實も錐の囊を脱に似たり。紫塵に對する碧玉、嫩蕨にあへる紫きあし、實おもしろく侍り。相公になし給へる君の御心ばへも目出たく、世をてらせる鏡の塵つもらで、人の能書をはかる事、くもり侍らぬ、いとありがたき事になん。云々」とあり。

氣霽風梳新柳髮冰消浪洗舊苔鬚

春霞都其香

釋 ○氣霽 霽は説文に、「雨止也」と見ゆ。○風梳新柳髮 柳の若枝の、そよ吹く風に、緩く長く

○集抄に、早
春、賦と題し、
佐藤本、淺草
本、醒本、寛

永本私註、及び青本には、香塵。早春賦。と併せ題す。

打ち靡くさまは、美人髪を梳るに似たればいふ。○舊言 舊言は、去年より生えたる水苔をいふ。その状、人の鬚などの如く見ゆればなり。大意 うららかなる日、水郷を見渡すに、返えくらしたる雨氣初めて晴れて、和やかなる風は、新に萌え出でたる柳の髪を梳り、この頃まで川の面に張りつめし氷も、いつしか解けて、情らかなる浪が、汀の生氣なかりし苔の髪を洗ふとなり。

○十訓抄に「同じ人(其香)羅城門を過ぐとて、氣響風梳(新柳髪)と詠じたりければ、樓上に登りて、水清瀟瀟(舊言)とつけたりけり。其香、昔丞相の御前にて、この詩を自説し申上げれば、下の句は、鬼の詞なりとぞ仰せられける」と見えたり。又江談抄、天滿宮遊起にも見ゆ。

庭増氣色晴砂緑林變容輝宿雪紅

草樹晴迎春。紀綱言。

出典 史館茗話に、「侍内宴賦草樹迎春詩」と題し、本朝文集入延喜以後詩序(紀綱)には、「予昔侍内宴賦草木共逢春」とありて、この二句を擧げ、「丞相常吟賞以爲口實、乘醉執手予曰、元白再生、何以加焉、予雖知過實猶感一顧」と見え、其の全篇は、作文大體に「草樹晴迎春」と題し、「春生無跡漸從東。草豈相迎暗至中。向暖因緣晴暈具。清輝媒介是時風。」と見え、芳艶不知何處契。日本詩紀。發に作る。誰教計會一時暈。と見ゆ。

釋 ○晴砂緑 庭内の若草、新に萌えいでて、今まで黄白なりし砂の面も、なべて緑となるをいふ。晴砂は乾きたる砂なり。○變容輝 容は儀容の義にて、「スガタ」また「カタチ」と訓す。楚辭の華容備些とある註に、「容謂容貌」と見ゆ。輝は光輝の義なり。また「變容輝」とは、今まで返

寒の候にありて、林の姿も荒涼たるありさまなりしが、春を迎へて、遂に、其の景容を改めて、春光和暢たるをいふ。

大意 春晴のあしたに見れば、庭上は、生氣よく動いて、春草萌え初めたりと覺しく、白砂も緑の色と變り、枯木と見えし林も、花を開きて、麗しき陽春の姿をなせば、こゝかしこに残れる雪も、これに相映じて、紅の色を帯びたりといひて、上句には草のことを敘べ、下句には花のことを敘べたり。

岩そくたるひのうへの早蕨のもえいつるはるになりける哉。志貴皇子

出典 萬葉集八に、「志貴歌皇子權御一首」と詞書して、「石激、垂見之上乃、佐和良妣乃、毛雲出春爾、成來鴨」とあるより轉じたるものなり。また古今和歌六帖春、及び新古今集上にも、「題しらす」として出でたり。

釋 ○岩そくたるひのうへの 岩そくは、岩の上に流れそくをいひ、たるひは垂氷にて、岩又は軒の端などより、雪、霰、雨水などの凍りて垂れ下る、謂ゆる「つら」といふものなり。然れど、垂氷は、岩の上に流れ注ぐべきにあらねば、この集のまゝにては聞え難し。故に、初二句は、萬葉集に従うて釋くべし。○いはははしる 瀧の、岩の上に走り落ちるをいふ。故に瀧にかけていひ、又、瀧は下に垂り下るものなれば、垂見の枕詞としたり。○たるみのうへのさわらび 袖中抄に、「攝津と播磨とのさかひに、たるみと云處あり。岸より、えもいはぬ水出る故に、たる水と云なり。垂水の明神と申す神おはす。そのたるみのうへをば、たるみ野といへば、其野に、さわらびはもえ

○兼抄、及び寛永本私註に、志貴皇子の作とせるは誤れり。

出るなり」と見ゆ。今辨津國豊島郡豊津村といふ。延喜式名神に、豊島郡名神大社垂水神社とあるは此處なり。早蕨の「さ」は、美稱の添辭にて、「さ牡鹿」などいふ「さ」に同じく、別に早く萌え出る意あるにあらず。

大意 萬葉集の端書に、慥の御歌とあれど、如何なる折といふこと定ならず。萬葉集略解八に「慶雲元年に百戸に封せられ、和銅七年に二百戸、靈龜元年に一品と見ゆれば、是等の御歌にや、此地名をよみ給へるは、封戸攝津などにも有しにや」と見ゆるは、さる事なるべし。意は、御喜びの事ありて、御身を早蕨に比し給ひて、今日まで、時節至らずして、早蕨の根に籠りて、屈まり居るあり様なりしが、今日この吉事に逢へるは、その根籠れる蕨の、やうく、春にあひて、萌え出でたるが如しと、歡喜の情を述べ給へるなり。

山風にとくるこほりのひまことに打ちいつる波やはるの初花。正澄

○古今集に、初句「谷風」に、作者、當時に作る。

出典 古今集上に、「寛平御時、ささいの宮の歌合のうた」と詞書したり。

釋 山風に 詩經風 谷風の註に、「東風謂之谷風」と云へるをもとにて、春風を谷風と云へるなれば、古今集に、「谷風に」とあるに従ふべし。○波や やは疑の助辭にて、二段の系辭なり。故に、「春の初花」の下に「ならむ」といふ詞を入れて見るべし。

大意 春立ちて、吹き来る風も和らぐまに、今まで、川の面に張りつめたる氷も、あそこ此處と解け初めて、その隙間々々より打ち出づる白波は、恰も、花の如く見ゆるが、外に花も未だ咲き出でぬ頃なれば、これをや、やがて、春の最初の花と云ふべからむとなり。

見渡せば比良のたかねに雪きえて若菜つむへく野はなりにけり。兼盛

出典 續後撰集上に、「麗景殿の女御の歌合に」と詞書したり。

釋 ○比良のたかね 近江國滋賀郡木戸小松二村の西に横はり、伊吹山と相對し、山姿雄偉、海拔二千九百尺あり。されば、江州の連山中、雪最も早くふりて遅く消ゆ。

大意 日を追うて、春色加はるにつれ、四方の景色も春めきて、さしも降り積みし比良の高峯の雪も、いつしか消えはて、野邊は、若菜萌え出でて、男女打ち群れて、摘み遊ぶべき頃となれりとなり。

春興

花下忘歸因美景樽前勸醉是春風。白嗣舒舒大見贈。

出典 白氏文集卷三に、「去年與哥舒大等八人同登科第、今、叙會散之意」と註せり。全詩は「去歲遊歡何處去。一作曲江西岸杏園東。各從微官風塵裏。共度流年離別中。今日相逢愁又喜。八人分散兩人同。」

大意 去年の春、哥舒大等八人と、同時に及第して、互に交歡を極めしが、その頃は、美景を賞すとは、花下に遊びて、家に歸ることを忘れ、或は春風に浮かれては、樽前に盃をあげて、酔を勧めたりきたりなり。

野草芳菲紅錦地。遊絲繚亂碧羅天。春日書懷寄東法白樂。劉禹錫

○此時、諸本に題を缺く。題本、淺草本、寛永本私註、及び集註、詠解等によりて補ふ。

○此詩、集註、註解、内閣本に題缺く。國本、佐藤本、寛永本私註、及び、菅本によりて補ふ。

出典 全唐詩話七に、「春日書懷寄東洛白二十二楊八二庶子」と題する七律なり。全詩は「會向空門學座禪。如今萬事盡忘筌。眼前名利同春夢。醉裡風情敵少年」。心知洛下間才子。不作詩魔即酒顛。」

釋 紅錦地 野草の花咲き亂れて、地上に紅錦を布けるが如きを云ふ。○遊絲 かげろふなり。字によりて、絲ゆふともいへり。陽儀に同じ。盛春の頃、空中に閃めく遊氣にして、その浮動するさま、絲の亂れたるが如くなれば、遊絲とも、また、その早きこと、野に放てる馬の奔るが如くなれば、野馬とも云へり。○繚亂 繚は説文に「纏也」、類篇に「繞也」、楚辭の註に、「繚紐也」とあれば、繚亂は、彼の陽儀の結ばれては亂れ、亂れてはまた、あひ纏繞するを云ふ。○碧羅 みどり色の薄物なり。

大意 麗らかなる春の日、俯して地を見れば、野草茂りあひて花さきたれば、紅錦を敷けるが如く、仰いで天を見れば、碧羅を張れるが如き空に、陽儀の閃き渡れるさまなり。

歌酒家々花處々莫空管領上陽春

送金孤會寄赴東都白

出典 白氏文集卷二に、「送東都留守令狐尚書赴任」と題する七律詩なり。全詩は、「翠華黃屋未東巡。碧落青嵩付大臣。地稱高情多水竹。山宜間望少風塵。龍門即擬爲遊客。金谷先憑作主人。」

釋 莫空管領 我が物となしたるかひなからしむるの意。○上陽春 上陽は縣の名なり。左傳に「晉公圍上陽」の註に、「號國都在弘農陝縣南東」と見えて、東都のある處なり。これを上陽

○東都を、菅本、南都に作る、誤なり。

宮の事と解するは誤なり。上陽宮は長安の城内にあるなり。

大意 陽春の候、任に、東都風流の地に赴く、彼處は、家々に歌舞遊宴の説あり、處々に花あり、顧くば、彼處の春興を我が物となして、歌酒に樂み興するに怠ること勿れとなり。

○今孤會寄 戶部尚書令狐遷なり。唐の敬宗の世、東都留守となる。○東都 洛陽をいふ。

山桃復野桃日曝紅錦之幅門柳復岸柳風繞麴塵之絲

逐處花皆好序紀齊名

出典 ○本朝文粹十に、紀齊名、暮春の日、友と共に郊外に遊びて、「逐處花皆好」と云ふ題にて作れる詩序なり。上下の文は、「夫以無處不花、無花不好」及び「吟賞之至、可忘歸者也、云云」と見ゆ。

釋 幅 はたものは機物にて、布帛の稱。はたばりは、倭訓栞に、「幅員を云ふ。云々。機張なるべし」と見ゆ。その機張は、「シイジ」また「シンシ」といふものにて、布帛を織るに、その左右の縁に撓めさして張る竹の串なるが、後に轉りて、布帛の幅員を云ふ詞となれるなり。○繞麴塵之絲 貞丈雜記五裝束部に、「麴塵といふ色は、萌黃の黃がちなる色なり。俗にキチン色といふ」と見ゆ。春柳を麴塵の絲に譬ふことは、唐の楊巨源の折楊柳の詩に「水邊楊柳麴塵絲」とあるに本づく。繞は玉筍に「絃也」、類篇に「冠素也」と見えて、冠の組緒なり。その結びあまりわがねらるゝが故に、縮ぬる義に用ゐたり。

大意 野を覆ひ、山に満ちて、咲き續きたる桃花の、日に映じたるさまは、恰も、紅の錦の反物を、日に曝したるが如く、家々の門、又は河の岸の柳の風に靡けるさまは、風が麴塵の絲をわがぬるが

○佐藤本、淺草本、醍醐本及び寛永本私註に、春日と題す。

如しとなり。さて、山、野、門、岸、の四字は、皆遠處とある題意なり。

著野展敷紅錦繡。當天遊織碧羅綾。春生。野相公

釋 ○繡 玉篇に、「五綵備也」と見ゆ。○遊織 陽炎の立ち動くさまを、碧羅綾といふによりて云へり。

大意 江談抄四には、この二句の次に、「洗開整戸雪飄雨。投出蟠龍水破氷」とあり。七律の断篇なるべし。今はこの四句の外傳らざるが如し。意は、盛春の候の野外の景色にして、種々の草花の咲き亂れたるは、恰も紅の錦繡を展べ敷きたるが如く、空は晴れ渡りて、一片の雲もなきに、陽炎の立ち上るさまは、恰も、緑の羅綾を織りかけて張れるが如しと、上句に野花、下句に遊織を敘したり。

林中花錦時開。落天外遊絲或有無。上寺望栗落。田邊音

釋 ○時開落 林中の花は、開くもあり、散るもありの心にて、前に、「東岸西岸之柳、運速不同。云々」とあると、同じ心なり。

大意 題の上寺は、京都の東山あたりの山寺に上れるなるべし。さて、遙に都の方を眺むるに、折しも春の頃なれば、あちこちに見ゆる林間の錦の如き花は、より／＼に開き、又より／＼に散り、晴れ渡る空には、遊絲の日に映じて、或は有るが如く、或は無きが如く見えて、長閑に面白き景色なりとなり。

○栗落 人民の栗居する處をいふ。落は、博雅に「居也」とあり。

○上寺、菅木、春上三山寺に作る。又田邊音とあれど、類從本田氏家集には見えず。

笙歌夜月家々思。詩酒春風處處情。悅者衆。管三品

釋 ○笙歌 笙は、爾雅の疏に「禮記曰、女媧之笙簧、釋名曰笙生也、象物貫地而生云々」。また、倭名抄音義に、「釋名云、笙、音生、俗云、竹之母曰匏、以匏爲之、橫施於管頭曰簧、以竹錢作之」と云へり。

大意 上句は、月夜に笙を吹き、歌をうたひなどして、家々に、春を樂み遊ぶ意を云ひ、下句は、長閑なる春風に乗じて、處々に詩を作り、酒宴などして、日を暮す心を云へり。さて、家々處々は、悅者衆と云へる題意なり。

○悅者衆 處々に樂み遊ぶ人多き意。白氏文集の句題なり。

も、しきの大宮人はいとまあれや櫻かさしてけふもくらしつ。赤人

出典 萬葉集十に、「野遊」と題し、下句「梅乎挿頭而、此間集有」に作り、赤人集類從、之に同じ。新古今集下、歌仙家集には、「題しらす」と詞書したり。

釋 ○も、しき 大宮の枕詞。百石城の約言にて、皇城の堅固なるを云ふと云へり。○大宮人 朝廷に奉任する百官有司。○あれや 萬葉の原歌は、あればやの意なれど、こゝにては、下に係らざれば、やは歎辭と見るべし。○かさし 髮刺の略言にて、物を髪に挿み、若くは、物を頭の上にさし上ぐるを云ふ。

大意 今の御世は、民なづき、世治りて、百官有司も、政務の暇あることよ、昨日も今日も、春の

景色にあがれて、櫻の花を折りかきして遊び暮すとなり。

春はなほわれにて知りぬ花さかり心のとけきひとはあらしな。三々

出典 拾遺集巻に、「平貞文が家の歌合に」と、忠岑集類從には、「仲春、中宮の御屏風に」と詞書した

大意 春は、自然の景氣長閑なるにつれて、人の心も、自らのびやかなるべき筈なるに、花盛りの頃は、明け暮れ、是を眺ぶ方に心ひかれて、却つて、物騒しき心ちする自分にて知り得たり、大方世間の人も、皆かくあらんよとなり。

春夜

背燭共憐深夜月踏花同情少年春。春花與盧同周諒花陽觀同居白

出典 白氏文集卷十に、「春中與盧同周諒華陽觀同居」と題せる七律にして、踏花の踏字、「陽」に作る。

全詩は、「性情懶慢好相親。門巷蕭條稱作隣。——。杏壇住僻難宜病。芸閣官微不救貧。文行知君尙憔悴。不知霄漢待何人。」

大意 背燭 月を眺ばんが爲に、燈燭を壁の方に向くるなり。◎少年春 少年は、わが身の齡の少壯なるをいひ、春は暮れ行く春をいふ。

大意 同人等と、この華陽觀に同居して、或時は、團居の夜の更けたるは、遠く燈火を、壁に背けて、共に深夜の月を愛で、或時は、下り立ちて、落花の狼藉たるを踏みて、今年の春も、間

もなく暮れ行かんとするに思ひ至り、同時に、我が青春の齡も、この春の如く、空しく過ぎ行かんとするを、共に歎き惜むとなり。

○華陽觀 長安にある道觀なり。長慶集の註に「觀即華陽公主故宅、有善内人存焉」。

春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくる。三々

出典 古今集上に、「春の夜、梅の花をよめる」と詞書せり。

大意 ◎あやなし あやは物の面に、種々の象、又は模様のあるをいふ。されば「あやなし」とは、其もやう、又は象のなきが如く、理の立たぬ、譯の分らぬことをいふ。◎やは 疑の意の裏返りて、確定の意となる反語。

大意 すべて聞き處には、物の香、一しは高さものなれば、その間を、人に擬へて、さてさて、春の間は、物の道理を辨へぬものぞよ、何となれば、汝が梅の花を隠さんと思ふとも、その花の色こそ見えぬ、肝腎の香は隠さるゝものは、却つて、いよく高くなる許りなれば、かやうの事ならば、初より、花の色をも隠さずに、よく見せたる方がよからむものと、強く間を咎めたるなり。何の風情なき間を捉へて、有情のものとなして、一首を構成したり。

子日附若菜

公事根源正月に、子日遊と題して、「これは昔、人々野邊に出でて子日するとして、松を引きけるなり、云々。また若菜は、同書に、供若菜と題して、内膳寮、並に内膳司より、正月上の子日、これを奉るなりき云々。尋常は若菜は七種のものなり。薺、葵、芹、青、御形、すしる、佛の座などなり。正月七日に七種の菜を食すれば、その人無病なし。又邪氣を除く術に侍ると見えたり」と云へり。又古今要覽四に、「正月子日に、若菜のおも

の謂じて幸りし事は、嵯峨天皇の弘仁四年を始とす。内裏抄引れば、唐の太宗の壽風にならひ給ひしといへり、云々。おほよそ若菜とは、唐人食ふべき春草の若菜をさしていひし各なれども、その食ふべき春草の中にも、初春の頃に生出るものは、寒、をばき、芹などの類にて、人々野邊に出でて、子日するとして、小松をひけるすがに、此菜をもつめるなり。故に菅束の文に、「倚松樹以摩腰、習風霜之難犯也、和菜羹而啜口、期氣味之克調也」といひ、藤原元真が歌にも、「霞たつ野邊の若菜をけふよりぞ松のたより」といひ。然るを、後の世に至りて、子日の若菜といへば、ひたすらに、七種の菜をそるへて奉るとのみ思へるは、古を知らざる誤りなり（探要）と見ゆ。猶いはむ、子日遊を、正月上の子の日とのみいへる説は拘はれるなり。中下の子の日にても、亦二月の子の日にても行はれしなり。

倚松樹以摩腰、習風霜之難犯、和菜羹而啜口、期氣味之克調。

雲林院行幸。

出典 菅束文章六及び本朝文粹九に、「履從雲林院不勝感歎、聊叙所親」と題せる詩序にて、上に「上陽子日野遊厭老、其事如何、其儀如何」下に「况年之閏月、一歲餘分之春、月之六日百官休暇之景」とあり。又難犯、及び克調の下に、「也」字あり。

摩腰 松は衆木の中に、獨り風霜に萎ますして、その葉常磐なるが故に、子日にこれに觸れ、腰を摩でて祝するなり。◎和菜羹而啜口 荆楚歲時記に、「正月七日爲三人日、以七種菜爲羹」。なほ、上なる「子の日」の條下を看よ。啜は、説文に「嘗也」、爾雅に「茹也」とあり。

大意 子日の祝に、松を引き來りて、之に觸れ携るは、その木の、寒風嚴霜にも犯されざるに習うて、我が身に、老の至らざらんことを希ふにて、また、七種の菜を和して、羹となして食ふことは、氣味

の能く調うて、無病健全ならんことを願ふが爲なりとなり。

○雲林院行幸 雲林院は、山城國愛宕郡にあり。もと仁明帝の皇子常康親王の別業たりしが、備正運顯に付囑して、寺となせり。宇多天皇の行幸は、寛平八年なり。

倚松根而摩腰、千年之翠滿手、折梅花而挿頭、二月之雪落衣。

子日序。備在列。尋故。

出典 本朝文粹十に、春日野遊と題し、冒頭に「夫上年之候、仲春之天」とありて、下に、「斯蓋吾朝之風俗、子日嘉會也」と見ゆ。

釋 〇千年之翠 松の風霜に堪へて、常磐なる色を云ふ。〇二月之雪 二月は梅の散る頃なり。故に落梅を喻へて、二月之雪といへるなり。

大意 子日の祝に、松を引ききて、之に觸れ携はる時は、常磐の緑手中に滿ち、梅花を折りて、頭にかさす時は、その花散りて、時ならぬ雪が衣袂に落つとなり。

子の日してしめつる野への姫小松ひかてや千代のかげをまたまし。清正

出典 清正集類從に、「紀伊國にて子日しけるに」と詞書したり。

釋 〇子の日して 子の日遊しての略。〇しめつる しむとは、その物を領する意。◎姫小松 今松の一種に、姫小松と稱するものあり。樹容、常の赤松に似て、葉は五針なり。されど、古の歌によめるは、たゞ、松の若木をさしていへるなり。◎まし 物の動作を未然に量りていふ助動詞。

大意 子日の遊すとて、わが物と占めつる野邊の小松の生ひたるさま、餘り優しく、をかしげにて、むさくひき抜かんもいたはしければ、そのまゝおきて、千歳の後に、老い茂りて、緑の蔭を爲す

○初句、集抄、助點木、内爾木、雲林木、山崎木、及び歌仙集等に、「れのひしに」に作る。

○佐藤木、淺草木、國爾木、寛永木、私註曾木、及び集抄に、春日野遊序と題す。

を待たんかとなり。

ねの日する野邊に小松のなかりせは千代のためしに何をひかまし。

出典 拾遺集卷に「題しらす」とあり。

釋釋 ◎千代のためし 子日に小松を引きて、千歳を祝ふ例になり。

大意 明なり。

千歳までかされる松もけふよりは君にひかれて萬代やへむ。

出典 ◎拾遺集卷に、「入道式部卿のみこの、子日し侍ける所に」と詞書したり。

釋釋 ◎かされる松 千歳を壽命の限りとしたる松。◎君にひかれて この「ひかれ」は被引の意に、連れ立つ意より轉れる、君の徳にあやかりてといふ意をよせたり。君は式部卿の宮をいふ。

大意 松は千歳をふるものとして、世にもてはやるものなれど、今日の子の日からは、それにも増して、萬歳も榮え坐すべき、この皇子の御手に引れ奉りて、却りて、その御徳にあやかりて、限り知らぬ歳月を經るならむかとなり。

參事紙四に、「能宣、父類基に語云、先日入道式部卿御子日に、宜許仕テ候。類基問之如何。能宣云、ちとせまで、かされる松もけふよりは、君にひかれて、よろづやへん。世以稱宜云々。類基賀詠吟して、カハハラナル被アトリテ、打能宣云、處外昇殿有御王御子日之時、以何可許後、ラザロヒノ不覺人後云々。能宣須臾ニ起テ返電云々。」と見ゆ。

若菜

野中荳菜、世事推之、蕙心爐下和羹、俗人屬之黃指。

備註。

出典 菅家文章及本朝文粹「早春觀賜宴宮人、同賦催粧應製」と題し、上文に、「聖主命」

小臣、分三類衛史之次、見有上月子日、賜菜羹之宴、臣伏惟、自願王公於正朝、至喚文士於内宴、首尾二十餘日、洽款言志者、諸不及婦人、此唯丈夫而已、夫陰者助陽之道、柔者成剛之義、况亦野中云々、下文に、「宜哉我君、特分斯宴、獨樂宮人、矣、云々、臣等職爲侍中、業書君舉、恐不得意知理者、謂我后偏專内寵、故聊假文章、以備史記云爾、謹序」とあり。又

日本紀略、寬平五年條に「正月十一日辛亥、云々、其日密宴、賦宮人催粧之詩」と見ゆ。

釋釋 ◎荳菜 爾雅卷に、「荳菜也。」註に「謂拔取菜。」疏に、「孫炎曰、皆擇菜也、某氏曰、荳猶拔也、郭公、謂拔取菜、以塞是拔義。」また詩經周南に、「參差荳菜、左右采之。窈窕淑女、鐘鼓樂之。」毛傳に、「荳、擇、亦謂拔菜而擇之也」と見ゆ。即ち野の中に、菜を撰擇して、抜き取るなり。

◎世事 世の中の事の義。◎蕙心 蕙は、蘭の一莖に數花ある種の名。移して婦人のやさしき心を云ふ。文選蕙城に、「東都妙姬、南國麗人、蕙心執質。」註に「銑曰、蕙香草、喻美也、云々」と見ゆ。◎俗人 世間一般の人の意。◎黃指 詩經衛風に、「手如柔荑」と見え、集傳に「茅之始生曰、荑、言柔而白也」と見ゆ。こゝには、婦人の指のたわやかなるを云へり。

大意 朝廷の賜宴は、常に百官有司の男子のみ、その恵を享くる習なれども、陰は陽を助け、柔は剛を成す基にして、男女の徳を以ていへば、兩々相俟ちて、事を成就すべきものなり、然れば、今日の子の日の遊にも、野外に出でて若菜を摘むことは、世間の習、これを婦人の優しき心に限るとし

備註序の下、佐藤本、法草本、國朝本、寛永本私註に、(雲林院)行幸とあり。

〇二句、實本、「ちかりし松も」に作る。

て焚め、また爐に當りて、之を羹にし、その味を鹽梅調理することは、之を佳人のしなやかなる手に任せて、男子は毫も干與する處なしといひて、婦人に斯の如き徳あれば、男子のみならず、宮人に賜宴あるも理りなりと、廻護したり。

○備註 題に「宴宮人」とあるが如く、子日の佳節に、後宮の婦人に、宴を賜ひし時、その婦人の、おのゝ粧を凝らして、御前に出でんとする苦心のありさまを、やがて題として、詩を作らしめ給ひし時の序文なり。

あすからは若菜つませむ片岡のあしたの原はけふぞやくめる。入丸

出典 拾遺集に、「題しらす」として出でたり。

○拾遺集に、二句「わかかなつまんと」に作り、菅木、金澤本、藤原、國字抄之に同じ。

釋 片岡、あしたの原 大和國名所にして、今北葛城郡、今王寺村、志都美村、上牧村等の地を云ふ。奈良の西南に位し、葛城山に連れる處なり。○けふぞやくめる 野を焼くは、早春の頃、枯草に火を放ちて、その灰を肥料となして、若草を、能く生ひ出でしめむ爲なり。「める」は「見えある」の約れる詞にて、事の狀態しか見ゆと推量していふ助動詞なり。

大意 あしたの原の邊りに、煙の立つは、今日その野を焼くさうな、然らば、若草の萌え出づるも、間も無かるべきにより、明日より、その野につきて、若菜を摘ませむとなり。さて、處の名を、あしたの原といふより、あすからはといひ、けふぞ焼くめるといひつゞけたるなり。今日焼きたりとして、明日より摘まるゝものならねど、興に任せて、あらまし事にいへるなり。

あすからは若菜つませむとしめし野に昨日もけふも雪はふりつゝ。赤人

出典 萬葉集卷八に、山部赤人歌四首と詞書せる内の一首にして、初句、「從明日者」に作る。

釋 ○雪は降りつゝ、つゝは、萬葉集卷十に、「なか／＼に君に戀ひすば比良の浦のあまならましを玉葉刈管」とあるを、或本歌曰「玉葉刈刈」とあるが如く、物の重り續く意なり。

大意 春の景色の加るにつれて、明日からは、若菜を摘まむと、所を取りおきたる野に、思の外に、寒さが返え反りて、昨日も今日も、雪が降り／＼して居る。この様子にては、容易に、若菜も萌え出るやうにはなるまじと、天候の心のまゝにならぬを歎きたるなり。

行きて見ぬ人もしのへと春の野にかたみにつめる若菜なりけり。貫之

出典 紀貫之集卷八に、「延喜六年月次の屏風、八帖がれうの歌、四十五首せじ(官言)にて、これを奉る。二十首、ねのひ遊ぶ家」と詞書したり。

釋 ○しのへと しのぶは物を慕ふ意より轉りて、その事を思ひ出で、又は想像する意。○春の野に 春の野にての意。○かたみ 倭名抄具に、「若菜和名加小籠也」とあり。菜葉の類を摘み入るゝ手提の籠なり。さて、この器の名に、記念の意の「かたみ」といふ語を通はしたりと覺しければ、三句「春の野の」とあるよろし。

大意 この若菜は、今年になりて、未だ野邊へ出て見ぬ人にも、その面白さを知らせむとして、あの春の野の記念として、この籠の中に摘める若菜ぞとなり。

三月三日 附桃

三月三日は、重三ともいひて、五節供の一とす。また、上巳を重三とするは、北魏より始る。上巳は、巫瀨の意に取る」とあり。猶下なる曲水を看よ。三月三日に、桃花を賞することは、荆楚歲時記に、「按韓詩云、唯溱與洧、

○三句、貫之「春の野の」に作り、菅木、藤原及び新古今集之に同じ。又四句、集抄、内閣本「かたみ」とつめ「に作る」。

方涇河、唯士與女乘、節分、註謂今三月桃花水下、以招魂、或「除穢穢」とあり。抑も、桃は、奥術に「桃者五木之精、其精生鬼門、能制百鬼云々」。また、幽明錄に「劉晨阮肇共入天台山、迷不得返、獲靈、得山上數桃、食之、遂不飢」。また、關漢法に「酒に桃花を漬して飲む。能く百病を除き、顔色を好くす」など見え、しかも時節の花なれば、これを、上巳の祓禊に附會し、さて、三月三日に結び付きたるなるべし。

春來遍是桃花水、不辨仙源何處尋。

桃源行。王維。

出典 王右丞集卷六に、桃源行十九と題せる七言古詩の結尾の一聯にして、全篇は、「漁舟逐水愛山春。兩岸桃花夾去津。坐看紅樹不知遠。行盡青溪不見人。山口潛行始隈隩。山開曠望旋平陸。遙看一處橫雲樹。近入千家散花竹。樵客初傳漢姓名。居人未改秦衣服。居人共住武陵源。還從物外起田園。月明松下房櫺靜。日出雲中雞犬喧。驚聞俗客爭來集。競引還家問郡邑。平明閭巷掃花開。薄暮漁樵乘水入。初因避地去人間。更聞成仙遂不還。峽裏誰知有人事。世中遙望空雲山。不疑靈境難聞見。塵心未盡思鄉縣。出洞無論隔山水。辭家終擬長游街。自謂經途舊不迷。安知峰壑今來變。當時只記入山深。青溪幾度到雲林。」とあり。

釋 桃花水 桃の花の開く頃の暖き水をいふ。河防一覽に「二月三日桃花始開、水泮雨積、川流狼集、波瀾盛漲、謂之桃花水」とある桃花水は狹義にして、こゝには適はず。○仙源 上に云へる武陵桃源をいふ。湖南省常德府に武陵縣桃源縣あり。輿地紀勝卷六十八に、「桃源避秦、輿地廣記云、桃源山、晉陶潛避秦記云、太康末有漁人、深入武陵、溪見桃花夾岸、居人衣服皆秦製、自言、避秦隱居數世矣、不知朝市之變、漁人既出欲再尋之、路迷不能至、云々。東漢沅南

縣地、梁陳皆因之、隋省入武陵」。國會要云、「乾德二年析武陵、置桃源縣」と見ゆ。大意 春來れば、四方の谿谷に漲るは、盡く桃花水なり、然れば、嘗て見たりし彼の桃源の仙源は、其處とも辨へ難ければ、如何でか、之を尋ね行くことを得むとなり。

春之暮月、月之三朝、天醉于花、桃李盛也。我后一日之澤、萬機之餘、曲水雖遙、遺塵雖絕、書巴字而知地勢、思魏文以翫風流、蓋志之所之、謹上小序。花時天似醉序。

出典 晋家文章卷五に、「三月三日、同賦花時天似醉應製並序」とあるその小序全部にて、次の「煙霞云云」の一聯は、その律詩の第二聯なり。

釋 春之暮月 大陰曆には、正月より春の節に入れば、三月を春の暮る、月となす。○月之三朝 月の初三日を云ひて、以上二句にて、三月三日のことを云へり。○天醉于花 桃李盛に開きて、天の色も映じて紅なるは、酔うて赤きに似たりとなり。○一日之澤 我君の惠によりて、今日の宴を賜はるを云ふ。澤は恩澤の義。○萬機之餘 萬機は、書經車馬に、「無教逸欲有邦、兢兢業々、一日二日萬幾、云々」と見えて、註に、「一日二日者、言其日之至淺、萬幾者、言其幾事之至多也」とあり。天皇の政治を視るなほすこと、多端なるを云ふ。○曲水雖遙 曲水宴は、三月三日、屈折したる緩き水流に臨みて、詩賦を作りて宴するをいふ。續齊諧記に、「晋武帝問尚書郎戴虞仲治、三月三日曲水、其義何旨、(中略)、尚書郎束皙進曰、仲治小生不足知、此、臣請說其始、昔周公

○桃李を、詩解「桃花」に作り、我后を、集抄、勅點本、内閣本、及び文章、「我君」に作り、上の字集抄、勅點本、内閣本、尊山崎本「君」に作る。又、小序の下、集抄、詩解、勅點本、内閣本、尊山崎本、及び山崎本、文章等「云爾」の二字あり。

成洛邑、因流水泛酒、故逸詩云、羽觴隨波流、又秦昭王、三月上巳置酒河曲、有金人自河而出、奉水心劍曰、令君嗣有西夏及秦、新諸侯、乃因此處、立為曲水、二漢相緣皆為盛業、帝曰善。と見えて、起源、遠く周公の時にあるをいへり。我が朝にて此事を行ひしは、公事根源に、是は昔、王卿など参りて、御前にて詩を作て講せられけるにや。御溝水に盃を浮べて、文人以下是をのむ由、康保の御記にのせられたり。又顯宗天皇元年三月上巳日、後苑に幸して、めぐり水のとよのあかりきこしめすと、日本紀にあり、云々。文人ども、水の岸になみみて、水上より盃を流して、我前を過ぎざる前に、詩を作て、その盃をとりてのみける也。羽觴を飛ばすなどいふも、此事なるべし。又上巳のはらへとて、人みな東流の水上にて祓する由、漢書などに記せり、云々。又明衛往來三月狀に、「曲水宴、唐國則周公旦為濫觴、本邦亦顯宗帝於權輿、其後連々不絶、云々」と云へるが如し。但し、貝原好古曰く「東晉が説、理あるに似たれども、亦一時の附會にして、信するに足らず。鄭國の俗、三月上巳の日、蘭を水上に采りて、不祥を祓除すること、詩經の鄭風に見え、暮春に、沂に浴すること、論語に出でたれば、猶その始久しき事なるべし」と。◎遺塵遺跡と云はんが如し。而して文帝以來、彼の朝に、此の事絶えたれば、遺塵絶ゆと云へり。◎書巴字云々 巴の字は水の象にて、渦卷の形より出づ。水の渦を成すは、即ち、流水の曲折したる處なれば、巴字を書して、周代に、曲水宴ありしところの地勢を知るとなり。これを、巴江の地勢を知ると解くは非なり。三巴記に「閬苑白水東流曲折三廻如巴字」とあれど、巴江は、いかでか、曲水にかゝはらむ。謂無しといふべし。◎思魏文 魏文帝曹丕の時、曲水宴のありしを思つて、その

遺跡を慕ふ心なり。

大意 三月は春の暮れんとする月なりと雖も、桃李の最も盛なる頃なれば、天も紅を潮して、恰も醉へるが如し、この時聖天子、萬機の政を講し給ふ暇、群臣を召して、曲水宴を行はせ給ふ、抑も、この宴の起りは、周の上代にあり、しかも、その事絶ること久しと雖も、今我が君の御風流によりて、新にこの遊を爲し、巴の字を書きては、周代に曲水宴ありし處の地勢を知り、又魏文帝の迹を慕ひては、風流を盡すは、眞に心ゆく限りなりとなり。

煙霞遠近應同戶 桃李淺深似勸盃 同題詩。曹丞相

出典 晉家文章五に見ゆ。全篇は、「三月春酣思曲水。彼蒼温克被花催。——。——。乘醉和音風口緩。銷憂晚景月眉開。帝堯姑射華顔少。不用紅勻上面來。」

◎煙霞 煙は霧などの水蒸氣をいふ。霞は、説文に「赤雲氣也」と見えて、空にたつ赤氣をいふ。◎應同戶 同戸は同じ程の酒量なるをいふ。戸は上戸下戸の戸なり。支那にては、庶民の婚禮、上戸八瓶、下戸二瓶など見えて、民戸の上戸(大戸)は、婚禮に酒瓶を多く供へ、下戸(小戸)は少く供ふるより轉りて、酒量の上にいへるなり。諺解に、「白居易猶言小戸長先醉、註曰、唐人以飲酒多者為大戸」。經史摘語には、三國の時の語といへり。されば、遠近の空、一面に霞たちこめて、彼此の差別なく、一樣に見ゆるが、上戸も下戸も、均しく酒に酔ひて、一樣に見ゆるが如くなるを云ふなるべし。◎似勸盃 桃李の、淺く深く咲きたる花の色の、空に映じて、紅に見ゆるは、桃李が酒を勸めて、天を酔はしむるに似たりとなり。

大意 明なり。

水成巴字初三日源起周年後幾霜兼流送羽鷹

釋 ○水成巴字 曲水宴に巴字といふこと、上に云へるが如し。○周年 周の時代と云はんが如し。

○幾霜 幾年に同じ。正字通に「歷年曰霜」。

大意 三月初三日、流の巴字を成せる處に臨みて、曲水宴を行ふ事は、遠く周の時代より起りて、今は、幾霜を経たるにやとなり。

○羽鷹 通雅集註七種魂の註に「羽鷹飲酒之器、爲生野形似有頭尾羽翼也」とあり。鷹は雀なり。又文選西京賦に「羽鷹行而無算」とある註に、「羽鷹杯上蓋羽以遠飲也」と見ゆ。

礙石運來心竊待牽流過手先遮同上。曹雅規

釋 ○礙 玉篇に、「疾也、速也」と云へり。

大意 曲水宴のありさまは、上流より盃を流して、我が前を過ぎざる間に、詩を作りて、さて、その盃を取りて飲む遊なれば、もし、盃の石にさへられなどして、流れ來ること遅ければ、詩を作りたる人は、心の内に、早く我が前に來らむことを希ひ、又流に引れて、早く我が前を過ぐれば、詩を得ざるものは、手にて、まづ盃をとめて、詩を賦すとなり。

桃

夜雨偷濕曾波之眼新嬌曉風緩吹不言之唇先咲桃始花詩序。紀納言

出典 本朝文粹十に、「仲春釋奠聽講禮記、同賦桃始華」と題せり。

釋 ○曾波之眼 寬永本私註に、「美人眼臉上有濃皺、似曾波也」と云へり。曾は唇の通用なり。

○嬌 字彙に「妖嬈也」、また「嬌嬈妍媚貌」と見ゆ。○不言之唇 史記李將軍傳に「桃李不言、下自成蹊」とあるによりて、花の開くを、不言唇先開と云へり。

大意 昨夜の春雨に、いつしか潤されて、その畫の目立ちてあでやかなるさま、恰も美人の眼の、媚を呈したるが如く、曉の風、緩やかに吹き來るにつれて、その花のはや開き初めたるは、美人の不言の唇に、笑を含めるが如しとなり。

みちとせになるてふ桃のことしより花さく春にあふそ嬉しき。恒

出典 拾遺集賀に、「亭子院歌合に」と詞書し、忠岑集類後には、「三月三日、ある所にて、かはらけと

りて、歌合とも」と詞書したり。

釋 ○みちとせになるてふ桃 列仙全傳一に、「西王母即龜臺金母也、以西華至妙之氣、化而生於

伊川、姓緜、諱回、字婉妗、一字大虛、云々、漢元封元年降武帝殿、母進蟠桃七枚於帝、自食其

二、帝欲留核、母曰、此桃非世間所有、三千年一實耳、云々」と見え、また、漢武故事にも見えたり。

大意 三千年の間に、漸く一たび、實を結ぶといふ桃の、今年初めて、花咲く春に逢ふことなれば、

○本朝文粹、昔の字を「口」に作る。勅撰本、内閣本及び豊國本、金澤本之に同じ。

○拾遺集、昔句「あひにけるかな」に作り、淺草本私註、豊國本、山崎本之に同じ。金澤本、「あひそめにける」に作る。古今六帖には忠岑の歌として、昔句なりぞしにける」に、忠岑集は二句一なるてふ桃は」に作り、歌仙集集も、忠岑の集に入れて「三千世へなるてふ桃のこと

しよ花さく
春に成りける
かな」と見え
たり。

○原註、
樓に居る、全
座時に遊りて
歎む。

行く末、いかに久しく榮え行くことならむと、宿の主を、仙家の桃に比して、繁昌を祝ひたるなり。

暮春

拂水柳花千萬點。隔樓鶯舌兩三聲。

過元慶志書
樓口占。元祐

出典 全唐詩十八に、「過襄陽樓呈上府主嚴司空。樓在江陵節度使宅北隅」と題せり。全詩は、「襄陽樓下樹陰成。荷葉如錢水面平。——。有時水畔看雲立。每日樓前信馬行。早晚暫教王案上。度公應待三月分明。」

釋 柳花は孝經樓詩話下に、「柳絮ト柳花ト別ナル事升菴集ニ見ユ。其本ハ宋楊伯岳ガ臆乗云、柳花與柳絮迥然不同、生於葉間成穗作鵝黃者花也、花既綻就帶結實、其實之熟亂飛如綿絮也、古今吟咏往往以絮爲花、以花爲絮、素無分別、可發一笑、杜工部詩有雀啄江頭黃柳花、又有生憎柳絮白於綿之句、則與絮不同、顯然可見、又曰、暮徑楊花舖白氈、得非又一時而莽然耶コレナリ」と見ゆ。

大意 低く垂れて、池面を拂ふ柳の枝には、柳花が繁く散點し、樓を隔てたる鶯の囀は、たゞ時々、兩三聲を聞くのみなりとなり。

○原註 清國湖北宜昌府所治なり。

低翅沙鷗潮落曉。亂絲野馬草深春。

曉春遊松山館
曾丞相

出典 菅家文章三に出づ。全詩は「官舎交屠枕。海濱。去來風浪不生塵。轉移危石開中道。分種小松一屬後人。——。釣歌漁父非交友。抱膝閑吟淚濕巾」とあり。曉の字を「暮」に作り、

又江淡抄四に引けるに、「曉」に作り、「此詩題、云蘭氣入輕風之詩也」と見ゆ。

釋 沙鷗 海岸の砂上に遊ぶ、かもめを云ふ。○亂絲野馬 野馬は莊子逍遙游篇に見ゆ、陽炎を云ふ。遊絲に同じ。なほ、上の春興の條を看よ。

大意 曉の潮の引き去るにつれて、鷗は翅を低れて、沙上に眠り、春の草は、いやが上に生ひ茂りて、陽炎は、盛り亂れ立つよと、動靜の二つを對照して、松山館の長閑なる景色をいへり。

○松山館 菅家文章三に、「自此以後、讀州刺史之作、仁和二丙午、年四十二」と見ゆ。松山は、當時阿野郡、現今嵯峨なり。菅公讀岐守たりし時の別館ありし處。

人無更少時須惜。年不常春酒莫空。

春光類賦
小野室

大意 人は若き時二度無ければ、今のこの少年の時は、宜しくこれを惜むべし、また、年も、いつも春なるにあらざれば、今のこの春に、酒を絶やさずして風流を盡せとなり。

劉白若知今日好。應言此處不言何。

深春好
源順

釋 劉白 劉は劉禹錫、白は白居易にて、この二人贈答の詩を劉白唱和集と云ひ、その第一首の初句に、「何處春深好、春深富貴家」と云へり。○大意 劉白唱和集の詩句を假りて、この春興に乗じたる詩筵の面白さを知らしめなば、劉白の二人も、春興の尤も好き處は、必ずこの詩席なりと

○原註に、春
深好と見せ
り。

○三句、古今集に「おもほえて」菅木、重國木、金澤木、歌仙家集には「おもほれど」に作る。

云ひて、更に何處などとは云はざるならんとなり。

いたつらにすくる月日はおほけれと花みてくらす春そ少なき。興風

出典 古今集には、「貞康のみこの、ささいの宮の五十賀奉りける御屏風に、櫻の花のちる下に、人の花見たるかたかけるをよめる」と詞書せり。

大意 詞書に見ゆるが如く、花を賞する人を題にて詠めるなり。意明なり。

三月盡 三月の晦日に、春の暮れ去るをいふ。

留春春不駐。春歸人寂寞。厭風風不定。風起花蕭索。

白 落花古詞詩。

出典 白氏文集十一に出でて、下に「既興風前歎。重命花下酌。勸君昔綠暗。教人拾紅萼。桃飄火焰々。梨隨雪漠々。獨有病眼花。春風吹不落」と見え、駐の字、「住」に作る。

釋 〇寂寞 字彙に「無聲也」とあり、即ち寂寥の貌。〇蕭索 物寂しく興盡きたる貌。字彙に、紫紵貌、紵曲也、紫收卷也あるによりて、花の風に吹れて、彼方此方に翻るさまとする説は迂なるが如し。

大意 春を留めむとすれども、留むべき由なければ、春は暮れ去りて、いつしか、花を賞する人もなく、忽ち寂寞を感じ、又、花を吹き散らす風を厭はしく思へども、これを静むべき術もなければ、強風の吹き起ると共に、梢の花は、忽ち散りはて、物寂しくなれりと、暮春の景氣の物あはれ

なるさまをいへり。

竹院君閑銷永日。花亭我醉送殘春。

白 酬皇甫賓客。

出典 白氏文集八に、酬皇甫賓客と題する律詩にて、閑の字、「間」に作る。全詩は、「玄晏家風黃綺身。深居高臥養精神。性慵無病常稱病。心足雖貧不言貧。——。自嫌詩酒猶多興。若比先生是俗人。」

釋 〇竹院 院は、字彙に、「堅也、宅也、室也、凡庭館有垣墻者曰院」。亭は、釋名に「人所停集也」。

大意 君は、常に竹の茂れる院の静なる處に、のどやかに、春の永日をくらし、我は、花の咲きたる亭の物騒しき中に、酔うて暮れ残りたる春を送るといひて、上句に皇甫賓客の高士なる趣、下句に、わが俗人に近き趣を述べたり。

惆悵春歸留不得。紫藤花下漸黃昏。

白 題慈恩寺。

出典 白氏文集三十一に見ゆる七絶にして、起承は、「慈恩春色今朝盡。盡日徘徊倚寺門。」と見ゆ。

釋 〇惆悵 玉篇に、「悲愁也」とあり。〇黃昏 日没の時を云ふ。

大意 春の歸り去るを悲み愁ふれども、抑留すべき術もなきに、たゞ藤は、春の暮に咲く花なれば、是こそ春の名残ぞと、終日ながめ暮らして、漸々、黃昏に至れりとなり。

○藤原に、次の二句と合せて一絶句なれど、今、附本に別記すに從ふ。

送春不用動舟車、唯別殘鶯與落花。送春。菅丞相

出典 菅家文草五に、「七年暮春廿六日、予侍東宮、有今日、聞大唐有_二一日應百首之詩、今試汝以_一一時、應三十首之作、即賜三十事題目、限七言絕句、予採筆成之、二刻成畢、雖凡鄙不能燒却、故存之」と前序し、次の「若詔光云々」の二句と、合せて七言絶句なり。

釋釋 ○動舟車 史記夏本に、「禹曰、云々、予陸行乘車、水行乘舟」とあり。

大意 次を着よ。

若使詔光知我意、今宵旅宿在詩家。

釋釋 ○詔光 漢書律曆に、「景曰、朔景詔景、云々、詔光亦春景而、猶謂春光、詔美也」とあり。○詩家 作詩を詠ぶ家。

大意 ○春は人にあらざれば、送るに舟車を用ゐるの煩なく、唯、殘鶯と落花とに別るゝのみなれど、一たび春過ぎては、忽ち寂寞を感ずるが故に、愛惜の情に堪へず、されば、若し春光に、我が、かく名残を惜む情を知らしめば、春も心ありて、その歸りぎはの今宵一夜の泊り宿は、我が詩家ならんとなり。

留春不用關城固、花落隨風鳥入雲。三月盡。景教

釋釋 ○關城 倭名抄居所に、「蔡邕が月令章を引いて、「關在境、關在境、所_二以察出衆入_一」と見

ゆ。大意 春は人にあらざれば、關城の固めも、その暮れ行くを留むるには、些の用を爲さず、たゞその時となれば、花は風の誘ふまに、空しく散りて、残るところなく、その花に歌ひ戯れし鶯も、いつしか雲間に入りて、何地に行きしやらん、跡方もなくなるとなり。

今日のみと春を思はぬ時たにもたつことやすき花のかけかは。恒

出典 古今集下に、「亭子院」の歌合に、「春のはての歌」と詞書したり。

釋釋 ○今日のみと 今年の春は今日限りと。○たにも たには、口語の「でも」の意。もは敷衍。

○たつ 立ち去る意。

大意 平生でさへも、花の木蔭は立ち去り難きものを、まして、今日を限りの春と思へば、なほ一層、名残の惜まれて、容易く立ち去り得る花の下蔭かは、否立ち去り難しとなり。

花もみなちりぬる宿は行く春のふる里とこそなりぬへらなれ。賈之

出典 拾遺集春に、「延喜御時、月次御屏風に」と詞書したり。

釋釋 ○ゆく春 暮れ行く春の略。○ふるさと わが生れたる故郷を云ふが本にて、後には、何處にても、一旦、住みしことある處を云へり。さてこゝには、花の散りし跡を、過ぎ行く春の舊里といひて、人の故郷と通はして巧を爲せり。○べらなれ べらは、「へみ」といふ詞と同じく、「べし」といふ詞を轉じて用ゐたる、古今集時代の一格にて「べかり」といはむが如し。

○三句、管本「年だにも」に作る。

○歌仙家集に、三月つこもりと題し、二句「ちりぬる時は」に作る。

○貫之集、二句時ぞとおもふに「五句か」に作るか、内閣本及び、内閣本「我身にしあらば」に作る。

○原註、行軍の下、管本、浙江、の二字あり。作者、集抄に、陸軍に作る、何香に據るか詳ならず。國字抄、陸

大意 すべて故郷は住み荒されて寂しきものなるが、花も皆散り失せたるわが宿は、行く春のふる里となりさうにて、今日より以後は、いかに寂しきことならむとなり。

またも來む時ぞと思へと頼まれぬ我が身にしあれば惜しき春哉。貫之

出典 後撰集下巻に、「三月のつごもりの日、久しうまうでぬ由、いひて侍る文の奥にかきつけ侍りける」と詞書して、次に、「貫之、かくて、おなじ年になん身まかりにける」と見ゆ。おなじ年とは天慶九年なり。また、歌仙家集之にも、次に、「世中心細くて、常の心ちもせざりければ、源公忠の朝臣の許に、此歌をやりける、このあひだ病おもく成にけり」とあり。

○頼まれぬ 明日の命も、確に頼れぬなり。

大意 春は、又も來べき春ぞと思へと、我が身の、何時失するも計り難きことを思ひやれば、今日暮れ行く春の、いよく惜しく思はるゝよとなり。

閏三月

閏、尙書典、以閏月定四時成歲の註に、「一歲十二月、月は三十日、正三百六十日、除小月六、爲六日は爲一歲有餘十二日、未盈三歲是得二月則置閏焉、以定四時之氣成三歲之曆象」とあり。

今年、閏在、春、三月、剩見、金陵、一月、花。

送淮南季中丞、行軍、陸待郎

○剩 字彙に「益也、餘也」とあり。物の常よりは餘分にあるをいふ。○金陵 清國、江蘇省江寧府なり。輿地紀勝府に、「春秋屬吳、戰國屬越、後屬楚、初置金陵邑。」註に「金陵圖經云、「昔楚威王、見此有王氣、埋金以鎮之、故曰金陵。」とあり。三國の吳以來、南朝の首都たり。

士衛とあれど、陸軍の集の中に、この詩なし。且この詩、唐調にして、漢魏六朝の風に非らず。士衛の作に非ること明なり。

風流佳麗の地を以て稱せらる。

大意 今年に春に閏月あれば、何人も、例年よりは、花を賞するに餘分あることなれど、まして君は、名に負へる金陵の地に向ひ行かるゝことなれば、彼地の名花を、心靜に觀賞することを得て、さぞかし満足なるべしとなり。花の期間は、常の春に變ることなれど、閏月ある春は、花の多分に見らるるやうにいへるが趣向なり。

歸谿歌鶯更逗留於孤雲之路。辭林舞蝶還翻於一月之花。

今年又有春序。源版

出典 本朝文粹八に、「後三月陪都督大王華亭、同賦今年又有春、各分二字應教」と題せる序文なり。

○谿 爾雅水に、「水注川曰谿。注谿曰谷。」○孤雲 一むらの雲。

大意 なほ閏月の春あるを聞きては、春の盡ると共に、やがて谿の舊巢に歸らんとせる鶯も、更に、暫くの間、雲路にとまりて歌ひ、林を辭して、將に歸り去らんとせる蝶も、再び一月の間、花間にひらく戯れ舞ふとなり。

花悔歸根無益悔鳥期入谷定延期。

清原滋藤

大意 花は、春の老ゆると共に散り失せたる後、閏月のあることを知りて、その落花を悔ゆると雖も、今更益なく、鳥は春已に暮るゝによりて、谷に歸らんことを思ふと雖も、なほ春のあることを知らば、大かた、その期を延ぶるならんとなり。

○原註、本原を缺く。佐藤寛永本、菅原本、及び集抄に、前と同詩とあり。

古今集、結句「あかれやはせぬ」に作
り、勅點本、草
原本、金澤本、
歌仙家集、伊
勢集之に同
じ。

○作者、菅原
本、内閣本、
集抄に寛永、
國本、寛永
本、私注、
及び集抄目
買須とあり。
皆買須の誤な
り。但全唐文
に、買須の作
なく、長江集
にも、此賦見
えず、他人の
作を誤り傳へ
たるものか。
或は吾邦に存

さくら花春くは、れる年たにも人のころにあかれやはする。伊勢
出典 古今集上巻に、「やよひに、閏月ありける年よみける」と詞書したり。
釋釋 ○春くは、れる 閏月ありて、春の、常の年より一月多きを云ふ。○あかれやはする やはは
反語。
大意 常の年よりは、一月、春が長くて、花の盛りの久しき年でも、いかで櫻の花が、人に厭かれは
しやうぞ、厭かるゝことはあらしなり。

鷺 鷺既鳴忠臣待旦鷺未出遺賢在谷

風鳥王賦。

釋釋 ○忠臣待旦 左傳宣公二年に、「晉靈公不君、厚斂以彫墻、從臺上彈人、而觀其辟丸也云々、宣
子驟々諫、公患之、使鉏麇賊之、晨往寢門闢矣、盛服將朝、尚早、坐而假寐、麇退歎而言曰、
不忘恭敬、民之主也、賊民之主、不忠也、棄君之命、不信、有一於此、不如此死也、觸槐而死」
と見え、又史記書世にも見ゆ。○遺賢在谷 遺賢は、在野の賢者にして、改正しからざれば、山谷に
隠れ、改正しき時は、出でて朝廷に仕ふ。在野といふべきを「在谷」といへるは、鷺によれるなり。
大意 風鳥を諸鳥の王と爲す時は、鷺鳥の類は、その臣下に位するものなれば、鷺の夜深く曉を告ぐ
るは、恰も忠實なる臣下の、朝風く起き出でて、出仕の時の來るを待つが如く、鷺の出來らすして、
空しく谷に籠れるは、なほ賢者の、野に在りて出で仕へざるが如しとなり。

彼の土に逸し
たるか未考。

○此賦、集抄
誤、國字抄、
誤解、及び内
閣本に、謝靈
運の作とせり。
按するに全唐
文に、謝靈の
集一卷ありて
賦二十三篇
を載す。而る
に、春曉賦
といふものな
く、又この句
もなし。別人
の句を誤傳し
たるか、若は
彼に逸して、
我に存する
か、後考を俟
つ。但全唐文
は、誤傳の作
なし。

○風鳥王、格物論に「羽鳥三百六十、而風鳥爲之長」、また「鷺曰、風鳥爲之長」とあり。なほ委しくは、雜書、文選の條に云へり。

誰家碧樹鷺鳴而羅幕猶垂幾處花堂夢覺而珠簾未卷

春曉賦。

釋釋 ○羅幕うす物の帳なり。○花堂 花やかなる家の義、温庭筠が詩に、「入門下馬問誰在、降
階握手登華堂」と云へり。

大意 春の曉方、誰が家ぞや、緑の植木に、鷺がはや鳴き渡れども、眠を食れるにや、羅幕は絞らすし
て、猶垂れてあり、また、幾か處ともなく、美しき家に、目は覺めながら、床のうちに鷺を聞いて、
珠の簾もまだ捲き上げずとなり。

咽霧山鷺啼尙少穿砂蘆笋葉纒分

早春尋李校書。

出典 全唐詩元集に見えたる律詩にして、咽霧を「帶霧」に、蘆笋を「蘆筍」に作る。全詩は、「款々
春風滂々雲。柳枝低作翠橫竿。梅含露舌象紅氣。江弄梨花散綠紋。——。——。今朝何
事偏相覓。撩亂芳情最是君」。この前半の第二聯は、次の梅の條に見ゆ。

釋釋 ○咽霧 朝霧の中に、啼く聲の幽かなるをいふ。○蘆笋 笋は、字彙に、「同筍」と見え、筍は、
竹芽と見ゆ。今の蘆の芽を云へり。

大意 春また浅ければ、朝霧に籠りて聞ゆる、山陰の意は煩氣にて、啼く聲なほ多からず、汀の砂を
おこして萌え出たる蘆の芽は、漸く二葉を分ちたるのみなりとなり。

臺頭有酒鷺呼客水面無塵風洗池

和思賢南莊。

本、寛永本私
註、春江に作
る。

出典 ○白氏文集卷三に、「奉和思黯自題南莊見示、兼呈夢得」と題せる七律なり。全詩は、「謝
家別墅最新奇。山展屏風花夾籬。曉月漸沈橋脚底。晨光初照屋梁時。——。除却
吟詩病問客。此中情狀更誰知。」

大意 臺頭に、美酒の設けありて、そを勧めむとして、鶯は、頻に聲をあげて客を招ぎ、水面に座なく
して清くするは、風が池を洗ふなりと、思黯の別墅の興趣窮りなき景色をいへり。

○思黯 牛氏。揚州の節度使たり。時に謝家とあるは、晉の謝安の風流に比していへるなり。

鶯聲誘引來花下草色拘留坐水邊。春江。

出典 白氏文集卷十に出づ。全詩は、「炎涼昏曉苦推遷。不覺忠州已二年。閉閣只聽朝暮鼓。上樓
空望往來船。——。唯有春江看未厭。紫砂遠石綠深淺。」

大意 貶謫のうちに春にあひて、時に鶯の聲の面白きに誘はれて、花の許に來り、或は、草色の美し
きに抑留せられて、水邊に坐すとすなり。

感同類於相求離鴻去雁之應春囀會異氣而終混龍吟魚躍之伴曉啼。

○魚躍、文神、
「離鴻」に誤
る。

鳥聲類「管絃」序。

出典 次の「燕姬之袖」云々の數句と共に、本朝文粹卷十に、「仲春内宴侍仁壽殿、同賦鳥聲韻管絃、
應製」と題せる序文中の數句にして、上に「于時妓舞粧樓、鳥詞禁樹、嬌聲出花柳之露、妙韻
入管絃之風」とありて、次にこの數句に接し、「至夫調泥風而不和、曲咽露而自誤」の二句に

接し、次に「燕姬云々」の數句あり。

釋 ○或同類於相求 この語は、易經文音に、「子曰、同聲相應、同氣相求、水流濕火就燥、雲從
龍、風從虎云々」と見ゆるに出づ。意は、天地の理は、同氣相求め、同類相聚りて、事を成すもの
なるをいへり。○離鴻去雁 春歸り去る雁の意にて、春の曲とす。拾遺記卷三に、「師涓出於衛靈公
之世、寫列代之樂造新曲、以代古樂云々、春有離鴻去雁、應類之歌」と見ゆ。文選の註に「大
曰鴻、小曰雁」。○春囀 下の曉啼に對して、鶯の春の朝に啼くをいふ。○龍吟 笛のこと。文選長笛
に、「笛生乎大漠、而學者不識其可、以神助盛美、忽而不識悲夫。有庶士丘仲言其所由出、
而不知其弘妙、其辭曰、近世雙笛從羌起、羌人伐竹未及已、龍鳴水中不見己、截竹吹之
聲相似」と見え、又懷竹抄に、「馬季長、曉天行堤上、龍鳴水中、二聲登天、其聲甚奇妙也、後巧構
木吹之不似、仍巧鑄竹吹之、其聲相似、故笛云龍吟」と見えたり。○魚躍 列子湯問に、「瓠巴
鼓琴而、鳥舞魚躍」と見えたるによりて、琴の一名と爲すと云へり。

大意 同類相成するは、天地の理なれば、殿上に奏する離鴻去雁の曲は、鳥の名あるうへに春の曲と
て、林中の鶯の春の囀とは相應じて、ますく、あはれに聞え、琴笛の一名となれる龍吟魚躍は、
その名より云へば、鶯とは異類のものなれど、發して聲調となりては、固より同種なれば、鶯の曉
の聲に伴ひて相和して、面白しとなり。

燕姬之袖暫收猜繚亂於舊拍周郎之簪頻動顧問關於新花。同題。管三品。

○新花の下、
文神に「若也」
の二字あり。

○燕姬 前漢の成帝の后趙飛燕のこと。文選四京の、飛燕寵於體輕の註に、「善曰、荀悅漢紀曰、趙氏善舞、號曰飛燕、上悅之、而由體輕而封皇后也」と見ゆ。○舊拍 兩説あり。一は拍を、箋註倭名類聚抄に、「拍子、蔣勗切韻云拍打也、拍板、樂器名也」とあるに隨ひて、樂器と見たるにて、舊き拍が朽ちてかく亂るるかと思ふ意とし、一は拍を調の拍子と見たるにて、舊拍子にて廢忘せるかと疑ふ意とせり。○猜 玉篇に、「疑也、懼也」、又楊子方言に「恨也」。○周郎之善云 曲裏に誤あるに就いての故事。吳志周郎に、「周瑜字公瑾、蘆江舒人也、云々、初孫堅與義兵討董卓、徙家於舒、堅子策與瑜同年、獨相友善云々、策親自迎瑜、授建成中郎將、云々、瑜時年二十四、吳中皆呼爲周郎云々、瑜少精意於音樂、雖三爵之後、其有闕誤、瑜必知之、知之之必顯、故時人謔曰、曲有誤、周郎顧云々」とあり。郎は、五車韻譜に「男子之稱」。○間關 鳥の鳴づる貌、もと崎嶇展轉の貌なるが、鶯聲の高低屈曲して面白く聞ゆるにいふ。詩經周南に、「關關雎鳩」、また白氏文集琵琶行に、「間關鶯語花底滑」など見ゆ。○新花 梅花なり。

大意 樂の音は、風にさへられて調はず、鶯の聲は、霧に咽んで亂るるに至りて、古の趙飛燕の如き上手なる舞妓は、暫く、舞の袖を收め、即ち舞ひ止みて、その穢れ亂れたることを、舊拍の爲かと疑ひ、昔の周瑜の如き音律を解する殿上人等は、その時の鶯の頻に動くまで、鶯の誤を氣にかけて、間關たる聲を、梅花のうへに振り反りて見るとなり。

新路如今穿宿雪、舊巢爲後屬春雲。

鶯出谷 菅丞相

出典 菅家文章六に、「早春内宴侍清凉殿、同賦鶯出谷應製」と題せる律詩なり。全詩は、「鶯見不致被人間。出谷來時過妙文。」。菅菰野理晴求友。暈綺花間入得群。恰似明王招隱處。荷衣黃髮應玄鶴。」

○新路 鶯のはじめて谷間を出づる通路をいふ。大意 鶯の、始めて、谷間より出づるに、その新路は、殘雪を穿ちてつけ、古巢は、春暮れて、再び歸らん時の爲に、春雲に托して置くとなり。

西樓月落花間曲、中殿燈殘竹裏音。

宮裏 曉光詩 菅三品

西樓 大内裡圖考證豐樂に、「豐景樓、一曰西樓、古本和名抄曰、豐景樓在豐樂殿西北、拾芥曰、豐景樓在豐樂殿西北、二間五間五間未詳」とあり。○花間曲 曲は聲音に曲節あるなり。○中殿 拾芥抄中末に、「云清凉殿、又云御殿、南殿西、常宸居也」とあり。○竹裏 清凉殿の殿前なる吳竹漢竹をいふるなるべし。

大意 宮中の曉方に、鶯は、月影の西樓に傾くや、そなる花間に、節面白く鳴き、燈火の中殿に明け残るや、殿前の竹村に、聲を立つとなり。

○江談抄五に、「村上御製與文時三位勝負之事」と題して、「村上御時、宮裏曉光題詩、召文時三位被講之、云々、件日村上御與文時相互相論日也。件製云、豐景樓園花底、月落高歌御柳陰、今作給。文時——ト作りタリケレバ、主上聞當テ我コソ此題ハ作給シタレト思辨、云々。文時申云、御製神抄侍、但下七字ハ、文時ニモマサラセタマヒタリ、御柳陰ナレバ宮ト思ヒ候ニ、上ノ句ハイソコニ宮ノ心ハ令作給ニカ候ラム。園ハ宮ニソアヤハ可作ト申ニ、村上御被仰禮ハ、足下ハ不知マカ、其圖ハ我カ園ソカシト波仰禮、文時申云、然コソ侍ナン、上林苑ノ心ニコソ侍ナレ、雖イカハ侍ベカラムト申

○竹裏の下、音字、菅原本、豊景の曉光の光字、原本、天に作る。今、江談抄、及び佐藤本、菅原本、寛永本私註、菅原本によりて改む。

爾、尤有爾下、後知ニ、一問答云、又有與御事アリト云テ、サコソハ待ナント申テ、退座云々」とあり。

あらたまの年たちかへるあしたよりまたるゝものは鶯のこゑ。素性

出典 拾遺集卷三、「延喜御時、月次御屏風に」と詞書したり。

釋 ○あらたまの年、月、春などの枕詞にて、語意に諸説あり、古事記傳卷二には、「阿多良阿多良麻の約りたる言なり、そは、萬葉廿十一に、年月波、安多良安多良爾、安比美禮騰、一本には、安良とあるは、安多良とは、年月日時の移りもて行を云言にて、年月は、移住て環る物なれば、又、環り來る毎に、逢見るよしなり云々」と見えたり。

大意 春の景物は多かれど、わけて、鶯の鳴く音の暮はしきまゝ、年の改ると共に、その朝より、鶯の谷間を出でて、庭の梅が枝に來鳴くが、今かいまかと待たるゝとなり。

淺みとり春たつそらにうくひすの初こゑまたぬ人はあらしな。原景殿女御

釋 ○淺みどり 多く春の空にかけていひ、又は、直に春の空の事とせり。○あらしな 「じ」は否定の意、「な」は、俗に「ヨナア」と云ふ意の感歎辭なり。

大意 淺綠の空に、春の立ちかへる頃は、今日か明日かと、鶯の初音を待ぬ人はあるまいよとなり。

鶯のこゑなかりせばゆきさえぬやま里いかて春をしらまし。中務

出典 拾遺集卷三、「天曆十年三月廿九日、内裏歌合に」と詞書したり。

大意 春たてども一向に春めがす、去年のまゝに、雪の消え残れる山里は、谷間を出でて、春來にけり

○作者、後撰集卷三には、原景殿の女御の屏風にと詞書じ、四句、初音をまたぬ」に作り、實之の歌となす。淺草本註之に同じく、菅原本には、「此歌江本不入。實之」とあり。金澤本も、後撰集集と同じ。

○作者、拾遺集に、朝忠の作と爲す。但案集には見えす。四句、勅

點本「山里いかに」作る。

○案抄に、春興ノ時と題す。

霞

と告ぐる鶯の聲なくば、いかでか、眞實に、春の季節となれることを知らむとなり。

霞光曙後殷於火。草色晴來嬾似烟。早春晴、寄蘇州、夢得。白居易

出典 白氏文集卷三十一、「早春憶蘇州寄夢得」と題せる律詩なり。全詩は、「吳苑四時風景好。就中偏好是春天。——。——。——。——。士女笙歌宜月下。使君金紫稱花前。誠知歡樂堪留戀。其奈離」

郷已四年」と見えて、「士女笙歌云々」の一聯は、雜部、刺史の條に出づ。又嬾の字、文集、「嫩」に作る、可なり。

釋 ○霞光云々 霞はその色赤し、故に火に譬ふ。○嬾似烟 嬾は已に云へるが如く、嫩の俗字にして、弱く美しき貌をいひ、こゝには、専ら、若草の緑の色の烟りこめたるをいふ。

大意 夜曙けて後、日光の雲に映じたる(即ち霞なり)光は、火よりも赤く、また、空晴れ渡りて、地上に萌え出たるばかりなる草の色は、わかしくして、遠く望めば、烟の如く見ゆとなり。

鑽沙草只三分許。跨樹霞纔半段餘。春淺帶、題寒、菅丞相

出典 菅家文章卷六、「同賦春淺帶輕寒應製」と題せる寛平十年の作の律詩なり。全詩は、「不」是吹灰案曆疎。淺春暫謝上陽初。——。——。雪未銷通樓谷鳥。氷猶冪得伏泉魚。貞心莫」

畏輕寒氣。恩煦都無一事慮。——。——。鑽沙 鑽は、字彙に、「穿物之錐也」とあり。草の沙を穿ちて、萌え出づるを云ふ。○跨樹

霞が木の梢にかかりて、遠く連れるを云ふ。◎三分許 ◎半段餘、共に僅少の意にして、早春の候、草も未だ生長せず、霞も未だ多からざる體なり。段は布帛の分稱なり。説文に「推物也、一日分段也、帛二曰一、分未麗曰匹、既麗曰段」。

大意 明かなり。

きのふこそ年はくれしか春かすみ春日の山にはや立ちにけり。人丸

出典 萬葉集には、「詠霞」と題して、讀人しらすの歌とす。

釋 年はくれしか しかは、「き」「し」「しか」と活きて、事の決定して、過去に屬せるを示す助辭なり。◎春日の山 大和國添上郡春日神社の背後の山。

大意 昨日、漸く、年は暮れしと思ひしに、はや、春日の山には、霞が立ちそめて、春めきたりと、月日の経過の速なるを驚き思へるさまなり。

春かすみ立てるやいつこみよし野の吉野の山に雪はふりつゝ。赤人

出典 古今集上に、「題しらす、よみ人しらす」とあり。

釋 ◎立てるやいつこ 霞の立ちたるは何處ならむかと疑ひたるなり。やは疑辭。

大意 春の季節に入りて、はや、霞の立ち初めたりと、世間に言ひはやすことの聞ゆるは、何處のことなるぞ、この自分の住む吉野山は、まだ、雪が毎日降りくして、春の景色とは見えすといふか

しみたるなり。さて「みよし野のよしの」と續けたるは、上は「春かすみかすかの山」と詠めると、

○この歌、拾遺集に、赤人の作とし、又人丸集、及び家持に入れる皆わろし。家持集には、前句は「や立ちぬらむ」とあり。

○古今集、二句立たるやいつこに作る。

○淺草本私註、此歌なし。又註解に、兼盛集にありと註したれど、歌仙家集、及び類從本兼盛集にも見えす。

○原註、集抄に、密雨如散練賦と題し、菅原本に、密雨散如練賦とし、作者は、江以言とし、圖字抄之に同じく、内閣本には、紀ノ納言の作とす。

同じ例にて、聲調を緩うするが爲に、この頃の人の、好みて用ゐたるなり。

朝日さす峰のしら雪むらさきて春のかすみはたなひきにけり。兼盛

釋 ◎むらさきて 處々、まばらに消ゆるを云ふ。◎たなひく 和訓栞に、「起靡くの義」と見え、萬葉集に輕引、又は懸懸など書き、神代紀に、薄靡の二字を調めり。雲霞などの、横に薄らうかにな

びくをいふ。大意 去年より、高峯に降り積りし白雪も、立春と共に、暖き朝日の映る爲に、處々消えゆきて、霞さへ立ち初めたりとなり。

雨

或垂花下潜増墨子之悲時舞餐間暗動潘郎之思。

密雨散如練序。江以言、或云都在中

釋 ◎墨子之悲 蒙求上に、「墨子悲練」と題して、「淮南子曰、墨子見練絲而泣之、爲其可

以黃可、以黒、高誘曰、憫其本同、而未異」とあり。墨子、名は程、周の世、宋の人。墨子十五卷を撰

す。◎潘郎之思 潘岳の秋興賦序三卷に、「晋十有四年、余春秋三十有三、始見三毛」と見えたる

をいふ。二毛は、註に、「左氏傳宋襄公曰、不禽三毛、杜預曰、二毛頭白有二色也」とありて、

年老いて、頭の斑白になるを云へり。潘岳は、字を安仁といふ。晋書に「潘安仁至美、每行于道、

群姬以果擲之、常盈車」と見えたる美男子なり。又才藻あり。中書令に累官す。大意 春雨は、時に花の木に垂れ滴りて、白き練の如くなれば、かつて練絲を見て泣きし墨子の悲み

をまし、又、時に鬢髮の間に降りかゝりて、白髮の如くなれば、昔て二毛を敷せし潘郎の物思を動すとなり。

長樂鐘聲花外盡。龍池柳色雨中深。

關下關人。李肇

○作者、漢軍本私注、及び集抄に、李肇、また關下とあり。

出典 全唐詩四及古唐詩合解十に、「關下裴舍人劉長卿」と見ゆる七律なり。全詩は「二月黃鸝飛上林。春城紫禁曉陰々。陽和不散窮途恨。霄漢常懸捧日心。獻賦十年猶未遇。羞將白髮對華簪。」

釋 長樂 史記漢書に見えたる長樂宮なり。同書の註に、「正義曰、括地志云、秦漢陽故宮、在雍州醴陽縣北三十五里、秦獻公所造、三輔黃圖云、高祖都長安、未有宮室、居醴陽宮也」と見ゆ。又大明一統志西安府に、「在府城西北一十八里、漢高帝建、內有東朝及宣德、通光、高明、長秋等殿」と見ゆ。○龍池 唐詩正音の題註に「池在興慶宮、明皇遊玩之地也云々」。また唐書に、「龍池者、安祿山、自范陽獻玉魚龍尾雁石梁石蓮華、雕鏤並妙、上大悅、命陳湯中、故曰龍池」とあり。これを武陵記に見えたる龍池のことに混するは非。

大意 曉を告ぐる長樂宮の鐘の聲は遠く響きて、花のあたりに盡き、興慶池邊の柳の色は、雨のうち

養得自爲花父母。洗來寧辨藥君臣。

仙家春雨。紀納言

釋 藥君臣 政事要略卷七十雜事に、新修本草一に、藥有君臣左使、以相宜配合和者、宜用

一君二臣五佐、又可用二君三臣九佐、本説如此。また神農本草經上に「上藥一百二十種爲君、主養命以應天、無毒、多服久服不傷人、欲輕身益氣不老延年者、本上經、中藥一百二十種爲臣、主養性以應人、無毒有毒、斟酌其宜、欲過病補虛羸者、本中經、下藥一百二十五種爲佐使、主治病以應地、多毒不可久服、欲除寒熱邪氣、破積聚、愈疾者、本下經」とあり。

大意 花の開くは、春雨の養ひによるが故に、雨は、花の父母たり、又草の萌え出づるは、春雨の潤膏によることなれど、不逞平等に降り來て、雨は、寧ろ君藥臣藥を區別せむやはとなり。藥草を植うるは、仙家の業なり。

花新開日初陽潤。鳥老歸時薄暮陰。

春色雨中寒。曹三品

釋 初陽 朝日なり。溫庭筠が詩に「初陽到古寺。宿鳥起寒林」とあり。正月又は初春と解するは、こゝには適はず。

大意 春雨の潤ひによりて、花の始めて開くころは、朝日の光濕やかに潤ひ、漸く日數へて、晩春となり、鳥聲老いて、復びその古巢に歸らむとする頃は、暮方の空曇れりと、春の季節を、しめやかに終るをいへり。

斜脚暖風先扇處。暗聲朝日未晴程。

微雨自東來。慶保胤

釋 斜脚 雨の風を受けて、斜に降るを云ふ。○暗聲 夜の雨の、暗中に聲あるをいふ。白氏文

○集抄、及び内閣本に、春色雨中深と題す。

○かけ、六帖一には、「下」とあり。又作者を、或書に、實方とせらるるし。

集に「蕭々暗雨打窓聲」と云へるが如し。

大意 暖風朝日は、共に「自東來」の意にて、細やかなる春雨は、暖なる東風の吹きあふる爲に、斜に窓などを打ち、朝日の、いまだ上らざる内は、たゞ聲のみして、目には見えずとなり。

さくら狩雨はふりきぬおなしくはぬるとも花の蔭にかくれむ。 讀人不知

出典 拾遺集卷に、「題しらす。よみ人しらす。」とあり。

釋 ○さくら狩 狩は、鳥獸を探り捕ふるを本にて、轉りては、野山に入りて、花、紅葉を探り觀るをも云ふ。櫻狩、紅葉狩などは是れなり。

大意 櫻狩するうちに、雨は降り來りぬ、さて、同じ雨を避くるならば、花に心を移して來つること故、よし濡るゝとも、この花の蔭に立ちよりてあらんとなり。

あを柳の枝にかゝれるはる雨は絲もてぬける玉かとぞ見る。 伊勢

出典 新勅撰集卷上に、「柳をよみける」と詞書し、伊勢集本には、「歌合の時、亭子院」とあり。

釋 ○かゝれる 降りかゝれるなり。○絲もてぬける玉 絲をもて連貫ける玉なり。上古の人は、種々の球玉を緒に貫きて、首又は手足に懸けて、裝飾とす。その玉を貫く緒を、玉の緒といふ。

大意 やう／＼延び出でたる柳の枝に、春雨のふりかかりて、自ら露となれるは、さながら小玉珠を、絲の緒にて貫ぬけるかと思はるゝとなり。

梅 附紅梅

内閣本に、春生、と題す。

白片、落梅、浮澗水、黃梢、新柳、出城、城。

春至香山寺。白居易。

出典 白氏文集卷十に、「春至」と題し、「若爲南國春還至。爭向東樓日又長。」とあり。間拈。

蕉葉一題詩詠。因取藤枝引酒管。樂事漸無身漸老。從今始擬負風光」とあり。

釋 ○白片 梅の白き花瓣。○澗水 溪水といはむが如し。澗は、説文に「山夾水也」とあり。○黃梢 柳の萌ぐみて、梢に、黄色を帯びたるを云ふ。○城牆 支那の都市には、高き築牆を回らして、外廓と爲すを云ふ。

大意 百花の魁たる梅花は、已に老いて、その白き花びらは散りて、谷川に浮びて流れ、柳の梢は、稍、黄ばみて、その若枝の長く延びたるが、高く城牆の上さし出でたりと、漸く、盛春の候となるる景色をいへり。

梅花帶雪飛琴上、柳色和煙入酒中。

早春初晴野宴。韋孝標。

出典 全唐詩章孝標詩卷所見なし。後考を俟つ。

釋 ○帶雪飛琴上文 選三 既三月城西門解中 鮑明の詩、「蜀琴抽白雪」とある李善の註に、「宋玉笛賦曰師曠將爲白雪之曲也、又對問曰、客有歌於郢中者、其爲陽春白雪、國中屬和者不過數人。」

また「濟曰白雪陽春並曲名、郢國名」と見ゆ。又、淮南子 覽冥に「昔者師曠奏白雪之音、而神物爲之下降、風雨暴至」と見ゆ。

大意 早春の候、宴を野外に張りて、琴を弄び、杯を上ぐれば、紛々たる梅花は、雪を混へて、琴上に

飛び、鳥娜たる柳の色は、野煙と共に、酒杯の中に映ると、上句は師曠、下句は五柳先生の記事をよめり。五柳先生の事は、下なる「青絲絃出陶門柳」の條にいへり。

漸、薰臘雪、新封裏、偷綻春風、未扇先。

寒梅結早花、村上御製

釋 ○臘雪 臘は十二月の一名にて、風俗通八に、「謹按禮傳、夏曰嘉平、殷曰清祀、周曰大蜡、漢改爲臘、臘者獵也、言田獵取獸以祭、祀其先祖也、或曰、臘者接也、新故交接、故大祭以報功也、漢家火行衰於戌、故曰臘也」と見ゆ。

大意 この梅は臘月新に降りたる雪の封じこめたるうちより、漸く薫じ、春風の未だ吹き來らざる前に、いつの間にか綻び初めたりとなり。

青絲絃出陶門柳、白玉裝成廬嶺梅。

尋春花、後江相公、或云晉三品

出典 日本詩紀七に、「以下九首延長中題御屏風詩。從小野道風真跡中得之」と註し、又全詩は、「見説林花處々開。展與並馬共口口。——。香送宜張雙袖受。葩句偷折一枝回。翻嫌春鳥欺游客。空勸提壺不勸盃」を擧げ、「共下恐脫徘徊二字」とあり。又作者を、後江相公とせり。

釋 ○絃出 絃は、緑の俗字なり。柳の風に靡くさまの、絲をくるに似たるを云ふ。○陶門柳 晉書陶潛傳に、「陶潛、字は元亮、大司馬侃之曾孫也、云々、嘗著五柳先生傳、以自況曰、先生不知何許人、不詳姓字、宅邊有五柳樹、以因爲號焉」とあり。又與地紀勝南康軍五柳館、在郡昌樓隱寺、

淵明宅前有五柳、淵明嘗著五柳先生傳」と見ゆ。○廬嶺 次に云ふ、五嶺中の大廬嶺にして、梅の名所なり。

大意 三冬の候漸く去つて、春の季節に入れば、家々の柳の萌ぐみて、緑の絲を繰り出したるは、陶門の柳と見え、丘山などの梅の花の開き満ちて、恰も白玉を以て装ひ成せるは、大廬嶺の梅と見ゆとなり。

五嶺蒼々雲往來、但憐大廬萬株梅。

同題、晉三品

釋 ○五嶺 ○大廬嶺 裴氏が廣州記に「大廬嶺、始安嶺、臨賀嶺、桂陽嶺、楊陽嶺、是五嶺也」。與地紀勝安南軍に「南康記、秦守五嶺、第一塞嶺即大廬嶺是也」。また「梅嶺、大廬嶺上多梅、亦名梅嶺、又上猶一嶺、亦曰梅嶺、舊傳梅福隱此」と見えたり。○蒼々 群山の青々として、遠く霞み渡れるを云ふ。○但憐 但は康熙字典に、「音誕、徒也、凡也、又空也、又語辭猶言特也」と見ゆ。とりわけて、その物をさす意。憐は愛賞の義。

大意 五嶺の頂を眺むるに、たい青み渡れる山の端に、雲の往き來するのみなれど、大廬嶺のみは、萬株の梅花咲き亂れて、殊に賞翫に堪へたりとなり。

誰言春色從東到、露暖南枝花始開。

同同上

大意 大廬嶺の梅を見るに、日當りよき南枝は露暖にして、花まづ咲けば、春は南より來るやうに思はるゝを、昔誰が、春は東方より到ると云ひ出ししかとなり。

煙添柳色看猶淺、鳥踏梅花落已頻。

晉三品

○日本詩紀七
次の一編と合
せて、七絶一
首と爲せり。

○讀首の二
字、臘臘木、
及び晉原本一
書、「真言」
に作る。淺草
本私注の原註
に、度讀多梅
樹と題す。

○内閣本、舊國本、頭註本に、此の詩を載せず。菅原本頭書に、「此の篇なし」と見え、粘貼本には、細書せり。佐藤本私註に、「師類入之、在新朗詠」と云ひ、但類從本、新朗詠集無所見。集註に、「此詩題不知、或説云、堀川院御宇、師類細書入りらるるとなん」といひ、詠解これに同じ。國字抄には、集註の或説を「信阿が脱のよし」といひ、なほ集抄には「此詩ハ異本ナ多ク見ルニ無之、此詩ヲ香ノセル本希也」と云へり。然れば、この詩は、後人の加筆なること疑なきが如し。故に、こゝには、本文のみを上げて、註釋を施さず。但、師類の香入れなりや否やは、今明ならず。

いにし年ねこしてうゑし我かやとの若木の梅は花さきにけり。 安保廣庭

出典 萬葉集卷八に、出で、又拾遺集卷九には、「題しらす」とあり。

釋釋 ○いにし年 去にし年。○ねこし 草木を、根ながら抜き取るをいふ。

大意 明かなり。

わかせこに見せむと思ひし梅の花それとも見えす雪の降ればは。 赤人

出典 萬葉集卷八に、「山部宿禰赤人歌四首」と詞書せる一首にして、後撰集卷九には、「題しらす。よみ人しらす」として載せたり。

釋釋 ○せこ 兄、又は夫など、すべて、女より、男を親みて呼ぶ様なるを、轉じては、男とち親しき中にも云へり。○ふれば 降りてあればの約言。

大意 庭前の白梅、今を盛りと咲き出でたれば、親しき友に見せて、共に清香の馥郁たるを愛でむと思ひしに、早春のならひ、寒ささえかへりて、雪さへ降りかゝりたれば、何れが雪、何れが花とも見えわかの程になりて、環ての心構も、空しくなりぬとなり。

○万葉集、二句、去年春、伊勢自而植之、に作る。

香をとめてたれをらさむ梅の花あやなし霞たひなくしそ。 朝恒

出典 拾遺集卷九に、「齋院御屏風に」と詞書したり。

釋釋 ○香をとめて とめは「ちとめ」の上略。○たれをらさむ 誰かは折らざるものあらむの意にて、かの反語を含めり。○あやなし 上に「やみはあやなし」とある「あやなし」に同じ。○たちなか

くしそ などは「勿れ」の意にて、動詞を制限修飾する副詞。そは、其れと物を指し定むる詞。

大意 梅の花を惜むとて、霞は立ち隠すならむが、その香は隠すことを得ざれば、誰もその香を尋ねて手折るべきにより、つまり、何のかひもなきこととなり、されば霞よ、初めより花をば立ち隠すこと勿れとなり。

紅梅

梅含雞舌兼紅氣江弄瓊花帶碧文。 早春尋李校書。元稹

出典 此詩の全篇、上の條に出で、帶碧文は「散綠紋」に作る。

釋釋 ○含雞舌 雞舌は、丁子香といふ説もあれど、倭名抄名に、「南州異物志云、雞舌香是草花之可含香也」と見えれば非ならむ。又古今原始に、「前漢宣帝賜雞舌香、凡侍臣奏事、恐氣觸玉至尊、故賜雞舌香以含之」とも云へり。さて、梅花の香氣高きを、含雞舌」と云へり。○弄瓊花

瓊は、字彙に、「説文赤玉也云々、按詩言玉以瓊者多矣、瓊華、瓊英、瓊瑩、瓊瑤、瓊琚、瓊玖、皆謂玉色之美爲瓊、外苑亦曰、説文訓作赤玉、恐非、詩尚之以華、尚之以英、尚之以

昔謂玉色之美爲瓊、外苑亦曰、説文訓作赤玉、恐非、詩尚之以華、尚之以英、尚之以

黄、則瓊爲玉之光彩、非赤玉也、謝莊雪賦、林挺瓊樹、言其白也、豈赤之謂乎」と云へり。
 されば瓊華は、單に、光彩ある玉の義なり。そは水上の泡、或は波の花を喻へたるなり。諸註、題
 に拘りて、下句も紅梅のことに解けるは非なり。◎碧文 碧の波紋なり。
 大意 梅は、えも知らぬ香を含みて、そのうへ紅の色を帯び、江は波の花を弄んで、しかも、緑の波文
 を散らすとなり。

淺紅婢娟、仙方之雪、媿色濃香芬郁、妓爐之烟讓薰。後唐梅正開時之序。

出典 本朝文粹十に、「春日陪第七親王風亭、同賦、繞着梅正開、應教」と題し、上に、「芳梅遍窓
 而立、新葉繞着窗而聞」とあり。

○婢字、菅原
 本、勅點本、
 重國本、内閣
 本、及び類註
 本、「婢」に作
 り、烟字、重
 國本、及び山
 崎本、「依」に
 作る。

釋語 婢娟 ◎玉篇に、「美好貌」とあり。◎仙方之雪 漢武內傳に「西王母云、仙家上藥有玄霜絳雪」。
 洞鑑類函に「唐開元中、內人趙雲容、問申元之乞延生之藥、元之與絳雪丹一粒曰、汝服此必
 死不壞、百年復生、至三元和末百年、雲容果再生、雲容楊貴妃之侍兒也、妃甚愛之、常令獨舞、
 寬裳于繡嶺宮、或云雲容姓張」と見ゆ。絳は字彙に「音降、大赤色、釋名絳工也。染難得、色、以得
 色爲工也、又曰紅絳也」と見ゆ。仍つて紅梅の、えも言はず美しく、紅なるを形容したるなり。
 大意 薄紅梅の婢娟たる色には、彼の仙家の上藥とする絳雪も、顔色なく、その體都たる香には、妓
 女がたき物する香爐の烟も、その香を讓るならんとなり。

有色易分、殘雪底無情難辨、夕陽中。

賦、庭前紅梅、
 前中書王萊明

大意 庭前の紅梅は、殘雪の白き中に埋れども、色異なる故に、鮮に分ち知り易し、しかし、その夕日
 のあかき影に輝く時は、色同じければ、風韻を解するものにあらずば、いづれを梅とも辨へ難から
 んとなり。

仙白風生空、簸雪野爐火、暖未揚烟。

紅白梅花。
 紀齊名

釋語 ◎仙白 仙家に藥を練る白。◎簸雪 簸は、字彙に「揚米去糠也」とあり。雪は絳雪丹なる
 べければ、あかき色と見るべきなれば、この二句は、紅梅をいへるが如し。◎野爐 冶爐の音通。
 大意 紅梅の、風に吹かれて四散するさまは、恰も、仙人が、絳雪丹をうすつく時、風起つて、その
 粉末を播揚するが如く、またその、盛に咲き出でたるさまは、かの金鐵を練る爐に、火爐の盛なる
 が如く見ゆれど、實の火にあらざれば、烟を揚ぐることなしとなり。

君ならてたれにか見せむ梅の花、いろをも香をもしる人そしる。左則
 出典 古今集上に、「梅の花ををりて、人に贈りける」と詞書したり。

大意 今、この折れる梅の花の、いふにいはれぬよき色、好き香あるにつけて、これらのやさしき風
 情を辨へ知らざる人に贈りても、梅の詮なきことなれば、これは、豫て、その情をよく知り給へる
 貴君をおきて、贈るべき人はなしとなり。

いろ香をは思ひもいれず梅の花、つねならぬよによそへてそ見る。花山院
 釋語 ◎思ひもいれず 我が心に思ひ入れぬにて、佛道の見地より、花の色香を愛惜せざるをいふ。

○仙字、集抄
 に「仙」に作
 り、野字、菅原
 本一書、「治」
 に作る。

○新古今集
 上に、梅の花
 を見給ひてと
 圖書せり。二

毎、逢草木、
私註「思ひも
分かつ」に作
る。

◎つねならぬ世 遺教經に「世皆無常、會必有離」と云へる意。
大意 梅の花の姿でたき色香を見ては、世の人は、何事をも打ち忘れて賞翫する習なれど、やがて、色
あせ香消ゆると見れば、佛の、世は皆無常、また色即是空と教へ給へる理りも思ひ合はされて、その
色香に、心を入れて賞翫せんとも思はざるのみならず、却つて、世相を觀するよすがとなすに足れ
りとなり

柳

林鶯何處吟箏柱。塙柳誰家曝麴塵。

天宮閣早春。

出典 白氏文集卷八に、出でて、曝字、「曬」に作る。全詩は、「天宮高閣上何頻。毎上令人耳目新。
前日晚登緣看雪。今朝晴望爲迎春。」。可憐三川虛作主。風光不屬白頭人。

釋 箏柱、箏は、字彙に、「樂器、以竹爲之、秦樂也。一說秦人薄義父子、爭瑟而分之。因以
爲名。一說、秦蒙恬所造、制長三尺、弦十三柱、高三寸、又呼と見え、伊呂波字類抄に「箏樂
と見えたり、其形、瑟に似て短く、十三弦あり、柱は、倭名抄類に、「箏柱、和名古高三寸、具三
才也」とあり。箏の柱を立つる柱を云へり。なほ箏の事、秋の部、膺の條をも合せ見るべし。◎麴
塵 上なる春興の條を看よ

大意 林中の鶯は、横音を弄して、何處かにて、恰も、箏の琴を彈すと聞え、垣根の柳は萌え出でて、
風に靡くさま、誰が宿にてか、麴塵の絲を曝すと見ゆとなり。

漸欲拂他騎馬客。未多遮得上樓人。

喜小樓西新
柳抽條。白

出典 白氏文集卷三に出づ。全詩、「一行弱柳前年種。數尺柔條今日新。須教碧玉
羞眉黛。莫與紅桃作麴塵。爲報全堤千萬樹。饒伊未敢取春。」

大意 さきつ年植まつる柳、條漸く延びて、彼の騎馬の客の頭を拂はんとする位にて、その枝さのみ
茂からの故、未だ樓に上り來る人までは遮り得ずとなり。

巫女廟花紅似粉。昭君村柳翠於眉。

題映中石上。

出典 白氏文集卷十に出づ。この次に見ゆる二句を轉結として、七絶一首なり。

釋 巫女廟 文選高唐賦注に、「昔者先王、嘗游高唐、怠而晝寢、夢見一婦人、曰妾巫山之女也」
と見えて、李善註に、「襄陽耆舊傳曰、赤帝女曰姚姬、未行而卒、葬於巫山之陽、故曰巫山之女、
楚懷王遊於高唐、晝寢、夢見與神遇、自稱是巫山之女、王因幸之、遂置觀於巫山之南、號爲
朝雲、後至襄王時、復游高唐」と云へり。歷代地理志韻編卷五に「巫山今四川夔州府巫山縣治」と
見ゆ。◎紅似粉 粉は紅粉をいふ。和名抄貝、紅粉、釋名云紅粉、和名紅赤也、染使赤所以著類也」
とあり。◎昭君村 白氏文集卷十昭君村の註に北四千里とあり。歸州は清國湖北省荊州府に屬す。
この村、王昭君の生地なり。昭君名は嬀、前漢の元帝の宮人となる。西京雜記に「元帝後宮已多、
不得常見、乃使畫工圖形、按圖召幸之、皆賂畫工、多者十萬、少者亦不減五萬、獨王嬀、
不肯、遂不得見、後匈奴入朝、求美入爲閼氏、於是上按圖以昭君行、及去召見貌、爲後宮

第一、善應對舉止閑雅、帝悔之而名籍已定、帝重失信於外國、故不復更人、乃窮竟其事、書工毛延壽等皆棄市。

誠知老去風情少、見此爭無一句詩。

此詩絕句也。與前一首。

釋 ○風情 趣味、または興味と云はんが如し。

大意 白居易、峽中に來りて、その地の景物を見るに、巫女窟の花は、美人の紅粉よりも紅に、昭君村の柳は、美人の眉よりも色濃なり、されば、老い衰へて、世間の興趣を覺ゆること少き我が身も、この地の、古來の歴史と、現在の景勝とに對して、何ぞ、一句の詩なくして可ならむやとなり。

大庾嶺之梅早落、誰問粉粧。匡廬山之杏未開、豈料紅粧。

内案序、傳正書、柳色。紀綱言。

釋 ○粉粧 ○紅粧 粉粧は、白粉を用ひて粧ひ、紅粧は、紅料を用ひて、顔容を裝ふをいふ。○匡廬山 清國江西省にあり。大明一統志卷五十二に、「在府西北二十里、古名南障、世傳、周武王時、匡裕兄弟七人、結廬隱居於此、故名云々、周五百餘里、實南方巨鎮也。」○趁 字彙に、「同、趁」と見え、趁は、「踐也、逐也、從也」とあり。

大意 大庾嶺の梅は、已に散り失せれば、誰かその白粉を施せるが如き色をも思ひ問はじ、廬山の杏花は、未だ開かざれば、いかで紅粧なる風情を尋ね逐ふべき、されば、今はたゞ、柳の翠色のみ翫ぶべしとなり。

雲擊紅鏡扶桑日、春燭黃珠嬾柳風。

早著作。田邊音。

○原註、佐藤本、國朝本、寛永本私註、及び内閣本に、或時酒對柳とあり。又、作者は、國字抄に江相公、佐藤本、國朝本、寛永本私註に紀綱言、或云江相公、集抄には江納百納持の作とす。

○菅原本に、早春題「唐客」

と題せり。國朝本私註、集抄「唐」に作る。

釋 ○擊紅鏡 擊は、玉簫に「持高也。擲也」とあり。紅鏡は、朝日の昇るさまの、紅の鏡に似たるを云ふ。○扶桑日 山海經卷十四に、「大荒之中有山、中有谷曰溫源谷、溫源谷有扶木、在扶木上、又淮南子天文に、「日出于暘谷、浴于咸池、拂于扶桑、是謂晨明。」註に「扶桑東方野也」と見ゆるを、下學集門地に、「扶桑國日本地名也、朝暾必昇於若木扶桑之梢、故呼日本云扶桑國也」とあり。なほ、秋の部、蘭の條をも合せ見るべし。又、扶桑を我が國號と爲すこと、篤胤翁の大扶桑國考に詳なり。○嬾黃珠 嬾は、字彙に、「嬾々長弱貌、又叟貌、又風動貌」と見えて、こへには、柳の若枝の風にたわむをいひ、黃珠は柳の萌え出でたるを、黃なる珠に譬へたるなり。大意 晴れたる春の空に、旭日の雲を衝いて立ち昇るさま、恰も紅なる一大鏡を捧げたるに似、又、春風緩く吹いて、嬾々たる柳の若枝を靡かすさま、恰も黃なる珠を挽めたるが如しとなり。

積宅迎晴庭月暗、陸池逢日水烟深。

柳影繁初合時。後中書王具平。

釋 ○積宅 晉書陸康に、「積康字叔夜、譙國鉅人也云々、性絕巧而好銀、宅中有二柳樹、甚茂、乃激水圍之、每夏月居其上以銀」と見ゆ。○陸池 南齊書陸康に、「陸慧曉字叔明、吳郡吳人也云々、張融與陸慧曉並宅、其間有水、此水必有異味、遂往酌而飲之」と見ゆ。大意 池の邊りに植ゑたる柳の、漸く茂り行くにつれて、積康が家は、晴れたる空にも、月影庭の面を照らすことなく、陸慧曉が池は、日にまし、水煙濃かになりゆくとなり。

潭心月泛交枝桂、岸口風來混葉蘋。

垂柳拂綠水一詩。曹三品。

釋 ○潭心 潭は、字彙に、「水深處」とありて、即ち、川の淵の正中なり。○桂 酉陽雜俎卷一に、「月桂高五百丈、下有二人常斫之、其人吳剛、學仙有過、令伐樹」と云へる、月中の桂を指す。
 ◎蘋 字彙に、「大萍、華谷殿氏曰、本草水蘋有三種、大者曰蘋、葉圓闊寸許、季春始生可糝蒸爲茹、中者曰荇菜、小者水上浮萍、毛氏以蘋爲大萍是也、郭璞以蘋爲水上浮萍、是以小萍爲大萍誤矣」と云へり。

大意 類聚句題抄に、この一聯の上に、「翠黛婆娑烟半濕。清陰搖曳浪無塵」とあり。絶句か、或は律詩の二聯のみ残れるか、恐くは後者ならむ。さて、言ふ意は、枝垂柳の水面をなぶる時、その淵の中に、月の影が映れば、月中の桂と枝を交すが如く、また、岸の額に、そよ吹く風の来れば、水上の浮草と、その葉を混すと云ふ。

青やきの絲よりかくる春しもそみたれて花はほころひにける。其之

出典 古今集上巻に、「歌奉れと仰せられし時、よみて奉れる」と詞書あり。

釋 絲よりかくる 絲に縫りをかくるを云ふ。○春しもそ 又は強め詞、もは歎辭、そは是れと、物を、強く取り出でていふ助辭。

大意 絲を縫り合せては、物の綻びも縫ひ合すべき筈なるに、青柳の枝が、緑の絲を縫りかけて居る春の頃は、却つて、木木の梢の花が綻び初めて、此處にも、彼處にも咲き亂れたりとなり。

青柳のまゆにこもれる絲なれば春のくるにそいろまさりける。兼輔

○古今集、四句「みだれて花の」に作り、六帖には、通照の歌とす。

出典 歌仙家集、及び權中納言兼輔卿集類從に、「屏風に」と詞書したり。

釋 ○まゆにこもれる絲 まゆは、蠶の繭なり。繭より絲を繰り出すを本にて、柳の芽は、蠶の形によく似て、それより萌え出でて、緑の絲とも見ゆるやうになれば、春のくるとも云へり。○春のくる くるは來る意に、絲を繰る意を兼ねたり。まゆは、絲といへる縁語なり。

大意 緑の絲とも見ゆる柳の枝は、もと、繭のやうなる柳の芽の中に籠れるなれば、春のくるにつれて、いよく、そのたけを延ばし、その色を増し加ふるとなり。

花付落花

花明上苑、輕軒馳九陌之塵、猿叫空山、斜月笠千巖之路。閑賦。

釋 ○上苑 上林苑の略。文選上林賦に、「且夫齊楚之事、又焉足道乎、君未視夫巨麗也、獨不聞天子之上林乎、左蒼梧、右西極、丹水更其南、紫淵徑其北、云々」もと秦の始皇帝の開きし處なるが、漢武帝に至りて、更に之を廣開したり。花明は、百花の争ひ開きて、清く盛なる貌。○輕軒 輕くして奔ること速なる車をいふ。軒は、左傳の註に「大夫車」とあり。魚軒、犀軒、皆車をいふなり。○九陌 九條の街路をいふ。字彙に、「阡陌田間道、南北爲阡、東西爲陌」と見ゆ。○笠 玉色光潔なる義より轉じて、磨き光らす義に用ゐる。○空山 木葉悉く枯れて落ちて、物さびしき山をいふ。

大意 上二句は、上林苑の花の盛りなるころ、花見の士大夫の、輕軒を連ねて、都の街に、塵を起し

○原註の閑字、遊解、閑の字、集抄に、居字あり。

て行き通ふと、盛春の長閑なるさまを云ひ、下二句は、木葉悉く枯れて、寂寥たる山中に、猿の聲、いと哀れなるに、西に傾ける月光、重疊たる巖石を照して磨けるが如しと、清秋の閑寂なるさまをいへり。

池色溶々藍染水。花光焰々火燒春。

早春招要賓客。

出典 白氏文集十一に出づ。全詩は、「久雨初晴天氣新。風煙草樹盡欣々。雖當冷落衰殘日。還有和陽和暖活身。」。南山老伴相收拾。不用隨他年少人。」。

釋 溶々 字彙に、「水盛也、一曰安流也」と見ゆ。

大意 白樂天、我が住居の景趣を叙したるにて、池の水はなみくとして、色青きこと、藍を以て染めたるが如く、花の光は燃え立つばかりにて、火にて春を焼くかと思ゆとなり。

遙見人家花便入。不論貴賤與親疎。

尋春題諸家園林。

出典 白氏文集十三に出でて、「親隨年老欲如何。興遇春幸尙有餘」の起承あり。

大意 明なり。

○十訓抄卷十に、「白樂天、ある年の春、煙霞の裏に引れて、あぐれ出でたりけるに、花面白き家のありけるに、乗りながら入りたりけるを、あるじの將軍とがめければ」と見えて、此の時をあげ、「——と詠じけるによりて、又云ふ事なかりけり。物を感ずる風情、如此」とあるは、何事に據れるか、詳ならず。

笠日笠風高低千顆萬顆之玉。染枝染浪表裏一入再入之紅。

花光水上浮序。昔三品。

出典 本朝文粹卷十に、暮春侍宴冷泉院池亭、同賦「花光水上浮」應製、と題して、上文に「觀其花」綻在岸、水清盈科、花垂映而水下照、水浮光而花上鮮」と見えて、次に、この數句あり。次に下の「誰謂云々」の數句に接す。

釋 笠日 笠風 花を玉になぞらへていへるなり。○千顆萬顆 その數の夥多なるをいふ。顆は、字彙に、「今言物一顆、猶一頭也」と云へり。今も、物の丸く小なるものを數ふるには顆といふ。

○染枝 染浪 染枝は、枝上の花にして、染浪は水上に映れる花なり。○一入再入 俗に「ひとしほ、二しほ」と云ふに同じく、「しほ」は、物を染料に入る、度數を云へり。さて、表裏の表は枝上の花、裏は水上に映れる花を云ひて、その花に、自ら濃淡の趣あるを表はしたり。

大意 冷泉院の池亭を廻れる樹木の花、日に笠かれ風に笠かれて、いよ／＼その光りを増せば、高く枝頭にあるもの、低く水面に映れるもの、千顆萬顆の玉と見え、或は枝を染め、或は浪を染めて、表は濃く裏は薄き、紅の絹と見ゆるとなり。

誰謂水無心、濃艶臨兮波變色。誰謂花不語、輕漾激兮影動唇。

同上

釋 輕漾激 漾は、字彙に、「禹貢播家導漾、又水搖動貌」と見えて、さ／＼やかなる浪をいふ。○水無心 花不語 白氏文集の「落花不語空辭樹、流水無心自入池」によりて、誰謂とはいへるなり。さて、その句、下に出でたり。

大意 水は無心のものど誰かいひしぞ、心あればこそ、色濃かに艶なる花の映る時、忽ち、波の色を

變するなれ、又花は、物云ふことなしと誰かいひしぞ、物いへばこそ、小波のたつ時、之に映れる影の搖ぎて、花の唇を動すなれとなり。

欲謂之水、則漢女施粉之鏡清瑩。欲謂之花、亦蜀人濯文之錦粲爛。

出典 本朝文粹^十に、暮春於淨蘭梨洞房、同賦「花光水上浮」と題して、上文に、「至彼和風扇兮粧彌亂、迅潮咽兮影不開、花非花水非水」と見ゆ。

釋 漢女 漢王の宮女を云ふ。唐代の詩人、時事を詠するに、多く漢代に託して忌諱を避く。故にこの語あり。又思ふに、こゝは詩の周南に「漢有遊女、不可求思」とあるに出づるか。さらば、漢は漢水にて、清國湖北省を流る、漢江なり。◎清瑩 清く磨けるを云ふ。◎蜀人濯文之錦 集註に、白氏六帖に、「蜀成都有濯錦之江云々」。又唐氏輿地書^{泗州}錦江の註に、「城南、一名二江、汝江、流江、此水濯錦鮮明。又曰内江、外江」と見え、又安齊隨筆^六に、「蜀江の錦は云々。其江の水にて、糸を洒して織る故、蜀江を以て名とす。蜀江の錦に、金糸を交へず」と見ゆ。文は、錦に、いろ／＼のあやあるを云ふ。故に濯文は、即ち、錦を洗ふことなり。

大意 花光水上に映じて、波靜なる時は、水にして水にあらず。影亂る時は、花にして花にあらず。若し強ひて、之を水といはむとすれば、まさに漢女が對して、紅粉を施すところの清く磨ける鏡なり、又、之を花といはむとすれば、蜀人が、蜀江に洗ふところの彩文の粲爛たる錦なりとなり。

織自何絲唯暮雨裁無定樣任春風

花開如散錦
書三品

○原註、佐藤本、淺草本、

○原註、菅原本に、花少鳥又稱と題せり。

大意 花の咲き亂れて、錦の如くなるは、如何なる絲にて織り出せるかと云ふに、しめやかなる夕暮の雨を絲として織れるにて、その織りたるを裁つには、別に定れる樣式なく、唯、春風の爲すに任せて、四方に散せしむるとなり。

花飛如錦幾濃粧織者春風未疊箱

同
源英明

大意 次の一聯と合せて絶句一首なり。次を看よ。

始識春風機上巧非唯織色織芬芳

同上

釋 ◎芬芳 字彙に、「芬芳香也」と云へり。

大意 亂れ飛ぶ花の錦は、えも云はれぬ色香艶なる粧にて、この錦の織手は春風なるが、未だ、箱の内にも疊み入れず、散らしかけたるまゝなり、さて、この花の錦を見るにつけて、始めて、春風の、機織に巧なることを知れり、そは、單に、花の美しき色を織り出すのみならず、芳ばしき香氣をも、その内に織りこむるによりてなりとなり。

眼貧蜀郡裁殘錦耳倦秦城調盡箏

花少驚稀
源相規

釋 ◎眼貧 春の暮れ行くにつれて、眼に花を見ることの乏しくなれるを云ふ。◎蜀郡 今の泗川省成都府、龍安府及び邱雅二州は、その地なり。秦漢之を置く。◎秦城調盡箏 文選笙賦に、「晋野棟而投琴、况齊瑟與秦箏」と見え、六臣註に、「齊國出善鼓瑟人、秦多善箏者」と云へり。

○三句、菅原本一書、及び土佐日記には「さかざらば」とあり。

大意 春の暮るゝにつれて、蜀郡の錦と見えし花は散りて、わづかにその残ち残しのみ眼に留り、秦城の等と聞かれし鶯は稀になりて、聞くも物うくなれるは、その調べ盡したる餘聲なりとなり。

よのなかにたえてさくらのならせは春の心はのとけからまし。業平

出典 古今集上巻に、「渚の院にて、櫻を見てよめる」と詞書せり。

釋 〇たえて 絶無の意。〇春の心 春の人心。〇まし 想像の意の助辭にて、常に此によりて彼を推し量る場合に用ゐる。

大意 春は、時節柄、人の心も自ら長閑に、うちくつろぎてあるべきに、何事ぞ、櫻を愛づる餘りに、朝なゆふな、心を盡すなるは、我ながらいと怪し、されば、世に、この櫻の花なからましかば、春の人心は、いかに静に長閑けからんとなり。

わか宿の花見かてらにくる人はちりなむのちそ戀しかるへき。朝恒

出典 古今集上巻に、「櫻の花のさけりけるを、見にまうできたりける人に、よみておくりける」と詞書せり。

釋 〇がてら ついで之意。

大意 吾が宿處に、花の咲きたる頃、そなたの尋ねて來られたるは、自分を訪ふが本意ならねば、花が散つてしまはん後は、また元のやうに、無沙汰せらるゝならんと思へば、その時になりては、定めて、そなたを戀しう思ふことなるべしと、無沙汰したる人の、たまゝ花の時に尋ね來れるにより

○三句、古今集「さくら花」に作る。國字抄之に同じ。

て、戯にさし當て、よめるなり。

見てのみや人にかたらむ山さくら手ことにをりて家つとにせむ。素性

出典 古今集上巻に、「山の櫻を見て」と詞書せり。

釋 〇のみや やは反語。〇いへつと 我が家に、持ち歸る苞直にて、俗にいふ土産なり。

大意 誘ひあはせて花見に來つるに、その花餘りに美しかりければ、このまゝ、われゝ同志見て歸りて、その面白かりしことを吹聴するのみにてはおかれじ、名々手毎に、花の枝を折りて、家への土産として、この花の美しきところを見せんとなり。

落花

落花不語空辭樹流水無心自入池。通元家履信宅。

出典 白氏文集卷二に出づ。全詩「雞犬喪家分散後。林園失主寂寥時。——。風蕩——。

船初破漏。雨淋歌閣欲傾欹。前庭後院傷心事。唯是春秋月自知。」

大意 たまゝ、故人履信が舊宅を過ぐれば、折しも、春の末とて、昔見しまゝの木々の梢より、落花紛々として散り行けど、素より無情のものなれば、舊事を語るに由なく、又、その庭中に流るゝ水も、何の心なく、昔のまゝに、自ら流れて池に入れども、今は、その人を見るに由なく、哀れに物さびしとなり。

朝踏落花相伴出暮隨飛鳥一時歸。春來願與李二賓客郭外同遊因贈長句白。

○原註、佐藤本、淺草本。

○心字、白氏文集「情」に作る。

○原註、内閣本に、史記竟案序、大王讚、史記一序と題す。又晚字、諸本、「晚」に作り、墨字、左本私註及び「預」に、文粹、「興」に作る。

出典 白氏文集十三に出づ。全詩は、「風光引歩酒開顔。送老消春嵩洛間。我爲病叟、誠宜退。君是才臣豈合間。可惜濟時心力在。放教臨水復登山。」大意 李氏と春來頻に同遊を試みて、朝には、落花を踏みて、郊外に出でて春光を弄び、夕には、時に歸る禽鳥と共に、相伴うて家に歸ると、友情の濃なるを述べたり。

春花面々、闕入酣暢之筵。晚鶯聲々、豫參講誦之座。出典 本朝文粹九に見えたる序文の聯句にして、上に、「于時線縹頻傾、絃管緩調」下に、「朝網質謝水光、文懸雕席、猥奉大王之教、聊獻小子之詞、謹序」と見えて、讀史記の下、「應教」の二字あり。

釋 〇面々 一々と云はんが如し。〇闕入 闕は廣韻に、「妄入宮門」と見ゆ。〇酣暢 酒に心を暢べ樂むなり。酣は説文に「酒樂也、徐曰飲洽也」とあり。この酣暢之筵は、史記講演の竟宴の席なるべし。〇晚鶯 晚春の鶯。〇豫參 豫は爾雅釋詁に、「參與也」と云へる意なり。〇講誦之座彼の史記を講誦する席座なり。

大意 落花はおのゝ、我もくと、酒宴の席に亂入し、晚鶯は聲々に、我も文士がほに、講誦の席に參與するとなり。

落花狼籍風狂後。啼鳥龍鍾雨打時。

惜春。後江相公。

出典 日本詩紀卷二に、「以下九首延長中題御屏風詩、從小野道風真跡中得之」と註せる内の律詩

なり。全詩「曉陽暈處幾相思。招客迎僧欲展眉。春入林鐘猶隔跡。老尋人到詎成期。樹欲枝空鶯也老。此情須爾一簪詩。」

釋 〇狼籍 史記釋名に、「杯盤狼籍」、演義に、「凡物之縱橫敗亂者謂狼籍」と見ゆ。〇風狂 風の烈しく吹くを云ふ。〇龍鍾 つかれ衰ふること。しほくとすること。細素雜記に曰く、「古語有二聲合爲二字者、如不可爲巨、何不爲盍、從西域二合之音、切字之元也、龍鍾、潦倒正如二合之音、龍鍾切聲字、潦到切老字、老羸聲疾、即以龍鍾潦倒目之者、正此義也」と見ゆ。大意 風のはげしく吹きて後は、落花は、亂れくたるありさまを呈し、雨の降る時は、春鳥の聲は、しほくとしたりと、殘春の光景をいへり。

離閣鳳翎憑檻舞。下樓娃袖顧階翻。

落花還繞樹詩。卷三品。

釋 〇鳳翎 翎は羽なり。〇娃袖 娃は、字彙に、「美女也」と見ゆ。即ち舞姫の翻す袖なり。大意 一たび樹梢を離れたる花の、復び風の爲に、枝條の間に翻るさまをいはむとして、上句は閣を樹に、鳳を花に、檻を樹の枝に譬へて、鳳の一たび閣を離れて空に上れるが、再び檻に憑りて舞ふが如しと云ひ、下句は、樓を樹に、舞姫を花に、階を枝に比して、舞姫の舞ひ終りて、樓を下らんとして、暫く階上に止りて、重ねて袖を翻すが如しといへり。さくらちる木の下風はさむからて空に知られぬ雪そふりける。其之

○羽の字、金澤本に従ふ。諸本「羽」に作る非。原註の樹字、鳳翎本、寛永私註、及び集抄、樓に作る。

○結句、實之集「雪ぞちりける」に作る。

出典 拾遺集春に、「亭子院歌合」に詞書し、「紀貫之集本には、「亭子院の御門の歌合し給ふに、歌ひとつ奉れとあるに」と詞書せり。

釋 ◎空にしられぬ雪 晴れたる春の空に、落花の、雪の如く降るなれば、「寒からで」とも、「空に知られぬ雪」とも云へり。

大意 明かなり。

このもりのとものみやつこ心あらはこの春はかり朝きよめすな。公忠

出典 拾遺集春に、「延喜御時、南殿にちりつみて侍りける花を見て」と詞書せり。

釋 ◎このもりのとものみやつこ とのもり寮は、略して、「このも寮」「また」とのもん寮」とも云へり。職員令に、「主殿寮、掌供御、輿輦、蓋笠、楳扇、帷帳、湯沐、洒掃殿庭、及燈燭、松柴、炭燎等事」とある是なり。とものみやつこは、日本書紀に、國造をくこのみやつこ、伴造をとものみやつこ」と訓みて、古より一の職業を以て、朝廷に奉仕するもの、總稱なりしが、令制の時、是等部曲の民を、悉く各省寮司の關係ある處に分隸せしむ。よりにて、洒掃殿庭することを職掌とするものも、この時主殿寮に屬けられて、令に殿部四十人と見ゆ。これ即ち「とものみやつこ」なり。

◎心あらば 風流を解する心あらばなり。◎朝きよめ 朝の掃除。

大意 禁中の樓閣近の樓なりの左の、庭上に散れるが、餘りに、面白き風情なれば、主殿寮の殿部等は、殿庭を洒掃すること、固よりその職掌なるべけれど、もし汝等にも情あらば、この春に限りて、毎朝、

禁庭を掃除することを止めて、心ゆくまで、雪と降り積る落花を賞翫せしめよかしとなり。

躑躅 和名抄木に「南陽居士本草注云、羊躑躅和名以波豆之羊躑躅而所、故以名之」と云へり。

晚葉尙開、紅躑躅、秋房初結、白芙蓉。 題元十八溪居。

出典 白氏文集卷六に、「題元八溪居」と題して、晚葉を「晚葉」に作る。全詩は「溪嵐漠々樹重々、水檻山隈次第逢、飯細酒香濃、聲來枕上千年鶴、影落杯中六老峰、更媿殷勤留客意、魚鮮

釋 ◎晚葉 葉は花しへにて、字彙に、「葉花心鬚也、花外曰萼、花内曰葉」と見ゆ。さて躑躅は、もと晚春初夏の候に、花開くものなれど、山間の磐谷にありて、遅れて開ける花なれば、晚葉尙開と云へり。◎白芙蓉 白蓮華をいふ。夏の部、蓮の條に詳なり。

大意 元十八が溪居には、初夏の花なる躑躅が、紅になほ開き、又早く秋氣を催して、蓮華が、初めて、白き花房をつくるとなり。

夜遊人欲尋來把寒食家應折得驚。 山石櫛髣似火。

釋 ◎夜遊人云々 文選卷九古詩に、「晝短苦夜長。何不秉燭遊」と云へるを思ひ寄せたるか。

◎寒食家云々 寒食は荆楚歲時記にも、「去冬節一百五日、即有疾風甚雨、謂之寒食、禁火三日、造飴大麥粥」とあり。初學記に、「按周禮、司烜氏、仲春以木鐸、徇火禁于國中、注爲季春將出火也、今寒食節、是春末、清明之初、則禁火並周制也」とあり。但し介子推が故事によりて、

○初字、原本、及び佐藤本、臨瀾本、寛水本私註、集抄、集註、國字抄等「始」に作る。今皆原本、外五本、及び文集に依りて改む。

火食を禁ずとするも舊き事なり。琴操下卷に、「龍蛇歌者、介子綏所作也、晋文公重耳與子綏俱亡、子綏割其腕股以餌一作重耳、重耳復國、舅犯趙衰俱蒙厚賞、子綏獨無所得、綏甚怨恨、乃作龍蛇之歌以感之、其章曰云々、文公驚悟、即遣使者奉節迎之、終不肯出、文公令燔山求之、子綏遂抱木而燒死、文公哀之流涕、令民五月五日不得舉發火」と云へるが如し。

大意 脚觸の花、盛に開きて、殷々たれば、とかく誤り認めて、まことの火となし、夜遊の人は、尋ね把つて、燭と爲さむとし、火を断ちたる寒食の家にては、折り取りては、驚くことなるべしとなり。

○山石榴 東雅竹「羊腸園云々、兼名苑の山榴、即山石榴也、花與羊腸園相似といふは、アイツ、ツといふものなり」と見ゆ。

思ひいつるときはの山の岩躑躅いはねはこそあれ戀しきものを。平貞文

出典 古今集一に、「よみ人しらす」とあり。

釋 思ひいつるときはの山 思ひいつる時と云ふを、ときはの山に云ひかけたり。この山は、山城國太秦の北にあり、山城名勝志葛野に「今常磐村、在並岡西、按所の名を、ときはといふ事は、嵯峨天皇の皇子左大臣源常の住給ひしより起れるにや」と云へり。○岩つじ 躑躅は、多く山の岩根に生ふるものなれば云へり。又岩つじまでは、「いはねば」と云はん爲の序詞なり。○いはねばこそあれ 口へ出して言はでこそあれの意。

大意 第二句「ときは」より、五句「戀しきものを」に續けて見るべし。いふ意は、我が切ない戀をして居る心の内は、口へ出して言はぬでこそあれ、思ひ出した時は、それはく、きつう戀しいもの

のを、何として、この心中を云ひ明さんかとなり。

歎冬

俄名類聚抄類に「本草云、歎冬一名虎鬣一本冬作東也、和名夜末木、木一と見えて、古より我邦には、歎冬を以て、山吹と爲せり。されど誤なる由は、下に云へり。

點着雌黃スルハ、ニ天有意ニ歎冬誤綻暮春風ニ 清慎公

釋 雌黃 下學集彩色に、「黃灰也」と見え、書言故事卷十に、「議論反復曰口中雌黃、晋王衍善玄言、義理有所未安、隨即更改、世號口中雌黃」。また同書卷十に、「書名黃卷有所自、古人寫書皆用黃紙、用黃檗染之、以辟蠹、故曰黃卷、有誤字以雌黃滅之、與紙相類、故可ニ否文章ニ謂ニ雌黃ニ」。

大意 歎冬にして、誠にその名の如くならば、冬さくべきを、誤つて春綻べるより、天も心ありてにや、かく雌黃もて點つけたるぞと、歎冬の處々に咲けるは、雌黃を以て、書に點つけたりと見ゆるよりいへり。

○下學集草木に、歎冬、フキと訓じ、「根莖菜也、本草云、歎冬、十二月有華、其色黃、或紫、其味苦也、三體詩云、僧房送著歎冬華、出寺吟行日已斜、十二街中春雪遍、馬啼今去入誰家、按此詩、十二月之華、至暮春雪時分也、然我朝朗詠集、清慎公詩云、歎冬誤綻暮春風何哉、所證日本之俗、皆以山吹吹謂ニ歎冬ニ、山吹即雌黃也、其色黃而如綠酒也、清慎公之作、亦誤歟、雌黃曰ニ歎冬ニ也、其詩意云、此華名也、若是歎冬、何綻暮春風乎、若歎冬字而云爾耳、詩意雖工用、上故事誤矣、可辨之、また雌黃、日本所謂山吹是也、暮春有花、日本俗呼ニ歎冬ニ謂ニ山吹ニ者誤也」といひ、又江談抄四に、「點着雌黃、天有意、歎冬誤綻暮春風、題不詳、作者不知、或云清慎公小野宮宴、無今作者、云々、大隅守清原爲信云、故親父典藥頭真人相語云、昔中書大王爲大納言之時、詔彼大王第、地宮風流、天縱煙霞、當宵陽之時、暮見黃花之盛開、于時大王憲

于彌吟此句者、其人於未書院所作也、見其氣色、解書作者也、爰交真人從容言、歌冬和名山不々支、見於本草、其花冬開、今以歌冬爲山吹名誤也、於是中書大正感語云、若於學者不可言詩矣、と見ゆ。

書窓有卷相收拾詔紙無文未奉行

詔紙無文 保胤

釋 ○書窓 讀書の窓を云ふ。○相收拾 書冊に、黃紙を用ゐること、前條に云ふが如くなれば、書窓の下に、山吹の花の咲けるを、書巻に見立て、拾ひ收むることなり。○詔紙無文 書言故事十に、「寫詔紙曰黃麻、杜詩黃麻似六經、唐太宗用黃麻紙、寫詔勅文、唐玄宗別置學士院、掌內命、凡拜免將相、皆用白麻」と見ゆ。麻紙は麻を製して作り、その色黄なるが故に、かの山吹の花の色黄なるを、詔書に見なして、此の花は、詔書に似たれど、文字なければ、未だ奉行せずと云へるなり。

大意 明かなり。

かはつ鳴くかみなひ川にかけ見えて今や咲くらんやまふきの花。 厚見王

出典 萬葉集八厚見王歌一首として出でたり。

釋 ○神南備川 大和國生駒郡神南山、一名を三室山ともいふ。龍田村大字神南にあり。三方水に圍れて島を爲し、その下を流るる川を、神なび川といふ。

大意 過ぎし年、神南備川の邊に遊びて、水底の蛙の聲、岸の山吹の花の、優に面白かりし景色を見て、心に忘れ難く、年を経て後も、その時節となるや、今頃は、かの蛙鳴く神なび川に、影を映して、山吹の咲くことならむと、思ひやれるなり。

○作者、踏本厚見王に作り、新古今集之に同じ。今萬葉集、及び菅原本に依りて改む。初句、六帖「ちはやぶる」四句、菅原本、及び新古今集「今かさくらむ」に作る。

○二句、菅原本「やへ山吹の山吹本、及び山吹本、」やへの山吹」に作る。

わかやとのやへ山吹はひとへたにちり残らなむ春のかたみに。 兼盛

出典 拾遺集卷には、「題しらす。よみ人しらす」として出で、歌仙家集、及び兼盛集本にも見えず。

天徳歌合に、兼盛が「一重つゝ八重山吹はひらけなむ程へて匂ふ花とたのまむ」と詠めるに似たるより誤れるならむ。

釋 ○かたみ 遊仙窟に「記念」の二字を訓める意。○なむ なむに二種あり、既然言を受くるは、過半去る時を示し、將然言を受くるは、願ひの意をいふ。こゝなるは後の方なり。

大意 我が宿の八重山吹は、春の日數の經ると共に、残りなく散り行かむとするが、暮れゆく春の記念として、せめて、その八重の内の一重なりとも残りてあれかしとなり。

藤

悵望慈恩三月盡紫藤花落鳥關々

悵望慈恩寺見寄。白

出典 白氏文集卷十に、「酬三元員外三月三十日慈恩寺相憶見寄」と題する七律の起聯にて、紫藤を「紫桐」に作り、下に、「誠知曲水春相憶。其奈長沙老未還。赤領猿聲催白首。黃茅瘴色換朱顏。誰言南國無霜雪。盡在慈人髮髮間。」の句あり。

釋 ○悵望 愁を帯びて、遠くながむる貌なり。○慈恩 慈恩寺の事、上の三月盡の條に見ゆ。○關々 爾雅詁に、「關々、嗶々音聲和也、」疏に「關々、嗶々者、皆鳥鳴音聲相和也、周南關雎云、關々雎鳩、云々」と見ゆ。

大意 元十八が、慈恩寺より、遠く詩を寄せたるにつきて、その處の景色も、その人も、今更慕しく、慈恩寺の春色も、三月盡となりて、藤の花の散りて、鳥の空しく嘯る、物あはれなるさまを悵望するとなり。

紫藤露底殘花色 翠竹烟中暮鳥聲

四月有餘春 詩源相規

大意 春已に去りたれど、朝なく、藤におく露の底に、紫の色を帯びて、花の散り残りて、幾分か春をとりめ、竹を籠むる緑の煙の中に、暮れ行く春を惜む鳥の音、いと哀れに聞ゆとなり。

紫茸偏奪朱衣色 應是花心忘憲臺

於御史中丞亭取藤

釋 紫茸 藤の一名。白氏文集卷十 湖上間望と題する詩に、「藤花浪拂紫茸條」と見ゆ。◎朱衣

本邦服色の制は、推古天皇二十二年に、始めて冠位の制を立てられたるに起り、同十九年、天武天皇十四年、持統天皇四年等、おひくりに變革を経て、大寶令に至りては、「親王禮服、一品深紫衣、諸王禮服、一位深紫衣、二位以下五位以上並淺紫衣、諸臣禮服、一位深紫衣、三位以上淺紫衣、四位深紫衣、五位淺紫衣」と見えたり。今朱衣といふは、即ち三位以上の紫衣に對して、四位以下の緋衣を云へるなり。◎憲臺 通典職に「御史之名、周官有之、蓋掌贊書而授法令、非今任也、戰國時亦有御史、云々、則皆記事之職也、至秦漢爲糾察之任、所居之署、漢謂之御史府、亦謂之御史大夫寺、亦謂之憲臺、云々、御史爲風霜之任、彈糾不法、百僚震恐、官之雄峻莫之比焉、云々」と見ゆ。即ち上は朝廷より、下は郡縣に至るまで、非違を檢察し、風俗を肅清するを以

○心字、寛永本私註、及び集抄、充に作る。又内閣本には之を載せず。新撰朗詠集に、紫藤花下作と題す。

て、任と爲す官なり。我邦にては、令制の彈正臺之に當り、長官尹は、彼の御史大夫に、次官大弼は、即ち御史中丞なり。

大意 論語陽貨に、「子曰惡紫之奪朱也、惡鄭聲之亂雅樂也、惡利口之覆邦家者」と見えて、朱註に、「朱正色、紫間色、范氏曰、天下之理、正而勝者常少、不正而勝者常多、聖人所以惡之也」と見ゆるを本文にて、元來、藤の花は紫にして、正色ならざる間色なり、然るに、正色なる朱衣の色を奪うて、是に優れるは、これ花の心に、非違を檢察する憲臺の設あることを忘れたるものなるべしと、主人が彈正大弼にて、朱衣の身分なるより、庭の藤の花の紫を取り合せて、藤花を賞翫したるなり。

たこの浦そこさへにはふ藤なみをかさしてゆかむ見ぬ人のため。 繩丸

出典 萬葉集卷十に、「十二日 天平勝寶 遊覽布勢水海、船泊於多祇海、望見藤花、各述懷作歌四首」と見え、越中の國守大伴宿禰家持、次官内藏忌寸繩麿、判官久米朝臣廣繩、及び久米朝臣繼麿の人々、かの布勢の水海を遊覽して作れるもの、一首にて、この歌の作者は、次官繩麿なり。然るに、梯

本集に入り、拾遺集歌にも、人丸の歌とし、菅原本に、人丸或家持とし、集註、及び國字抄目錄にも、繩丸は、人丸を書き誤れるならんとさへいひ、集抄には、蟬丸となせるは、皆誤なり。今、内閣本、及び萬葉集によりて、繩丸の作とす。

釋 ◎たこの浦 越中國射水郡に在り。

○初句、菅原本、藤解、藤園本、頭註本、及び萬葉集、拾遺集一たこの浦の」に作る。

大意 多帖の浦に咲ける藤の花を見れば、今を盛りにて、映れる影に、水の底までも匂はむとするま
ま、言語に絶えたる景色なれば、障ることありて、これを見ざる人の爲に、この花を手折りて、頭
にかざして持ち行かんとなり。

ときはなる松の名たてにあやなくもかゝれる藤のさきさてある哉。實之

出典 紀實之集續後には、「延喜十八年、女四宮の御かみあげの料の御屏風の歌、依三内裏仰一奉之」と
詞書せる内の一首なり。

釋釋 ◎名だて あしき名をたてにの略。名のみありて、その實の添はざる心なれば、名折れとも解す。
大意 松が枝に、藤の花のさき懸れる屏風の繪様を詠めるにて、常磐の松に懸れる藤は、あやかりて、
おなじく常磐のものならんと思ひしに、その松の名折となるやうに、藤の咲くや否や、早くも散る
ことよとなり。

○實之集、初句「うつろはぬ」に、四句「やどれるふぢの」に作り、歌集家集之に同じく、若句、菅原本一書、「ちるらん」に作る。

夏

更衣

更衣は四月、十月にあり。こゝなるは四月にして、春の衣をぬぎて、夏の衣に更ふるをいふ。公事根源四月に、
「今日は衣がへなれば、宮中、所々の御装束、掃部家あらたむ。御殿の御帳のかたびら、表すしに、胡粉にて繪を
かく。壁代、皆撤す。御疊等も新しきをなしかふ。御服は御直衣、御ぞ、すしこの綾の御單、御襦袢、内裏寮より奉る。女
房のきぬ、袴の衣ども、衣がへの單唐衣、すしなり。裳は、上臈薄裳、小上臈うす色、常の如し」と見ゆ。

背壁燈殘ケル宿ハハ焰開箱衣ハハ帶隔年香ハハ

早夏曉興

出典 白氏文集卷三に、早夏曉興、贈三夢得一と題せり。全詩は、「窓明簾薄透朝光。臥整巾簪一起下。牀。

無情亦任他春去。不醉爭銷得畫長。一部清商一壺酒。與君明日煖新堂。」

釋釋 ◎經宿 經宿は、一夜を過ぎたるをいふ。宿は、詩經周南の註に「一宿曰宿、再宿曰信」。

大意 壁を背にしたる燈火は、三月盡日の宵より一夜を過ぎて、この立夏の曉まで、燃え残りの焰を
立て、更衣の爲、箱から取り出したる衣は、去年焚きしめたるまゝの香のするとなり。

生衣欲待家人着シ宿釀ハハ當招邑老ハハ酣ハハ

譚州作。

出典 菅家文章卷四に、「四年和三月二十六日作、到任之三年也」と題せり。全詩、「我情多少與誰談。況換風
雲感不堪。計四年春殘日四。逢三月盡客屋三。好去鶯花今已後。冷心一向

勸三慶雲。」
釋釋 ◎生衣 生絹の衣にて、即ち夏衣なり。◎宿釀 秋より釀し置ける酒の、春に至りて熟したる

○釀字、勸點本、及び内閣本、「釀」に作るは誤なり。

をいふ。◎邑老 村里の長老なり。◎酣 字彙に、「酒樂也、湛嗜也、應劭曰、不醒不醉曰酣」とあり。

大意 春去り夏來りて、更衣の節に入れど、生絹の夏衣は、家人の裁ち縫ふを待ちて着かへむと思ひ、また豫て醸せる酒は、丁度この節熟したれば、邑里の父老を招きて飲ますべしとなり。

花の色にそめしたもとのをしければ衣かへうき今日にもある哉。重之

出典 拾遺集夏に、「冷泉院の東宮におはしましける時、百首歌奉れと仰せられければ」と詞書せり。

釋釋 ◎花の色にそめしたもと 裝束集成卷八「染裝束、櫻、自正月至三月」とあり。また同書女官裝束部に、「櫻がさね、表白く、裏あさぎ、くれなるの單、紅梅のうはぎ、蘇芳のこうちぎ、櫻山吹は三月まで」とあり。即ちこの色目の衣は、櫻のさく頃着るなれば、この色の衣を着ならして、あなた此方に花見せしなり。

大意 今日、更衣の節なれば、夏衣に着更ふべきなれども、春の間着ならして、花の色に染めなしたる衣を脱ぎ更ふるも、苦心ぐるしといひて、過ぎ去りし春に、愛でたる花の面白かりしことを慕ひたるなり。

首夏

裴頭竹葉經春熟階底薔薇入夏開。

書裴正開春酒初熟。

出典 白氏文集卷十に、薔薇正開、春酒初熟、因招劉十九、張大夫、崔二十四同飲と題する律詩

○原註、佐藤本、藤原本、寛永本私註に、或云初夏即事と題せり。

の起聯にて、次に、「似火淺深紅雁架。如飴氣味綠粘薑。試將詩句相招去。倘有風情一或可來。明日早花應更好。心期同醉卯時杯」の句あり。

釋釋 ◎裴 東雅用、倭名抄に、「揚氏方言を引て、裴、裴等の字、共に設て、モタヒと云ひ、裴亦作、裴、裴亦作、裴と註せり、云々」と見ゆ。酒を入る、土器なり。◎竹葉 酒の一名なり。尺牘双魚の註に「釀酒竹葉を以て、其の中に雜ふ、極めて清潔なり。故に、酒を謂つて、竹葉となすと」。◎經春熟 酒は冬より作りて、春になりて熟するが故に云ふ。◎階底 階下をいふ。◎薔薇 倭名抄草木に、「本草云、薔薇、一名牆藤、陶隱居注云、營實、和名無波、薔薇子也」とあり。

大意 明かなり。

苔生石面輕衣短荷出池心小蓋疎。

首夏作。物部安興

釋釋 ◎荷 下の蓮の題の下に詳なり。◎池心 池の底。◎小蓋 小なる「キヌガサ」なり。蓋は、馬車のうへに立つる覆ひにて、その製、大なる傘の如し。

大意 夏季に入りて、石面に、苔の薄く生じたるは、人の薄く輕き夏衣を、裾短に着たるが如く、又池底より生ひ出でたる荷葉は、まだ初夏の頃なれば、いと小く、恰も、小蓋を、まばらにかさせるが如しとなり。

わかやとのかきねや春をへたつらむ夏きにけりと見ゆる卯の花。順

出典 拾遺集夏に、「屏風に」と詞書し、歌仙家集には、「應和二年十一月、前朱雀院の若宮の御裳着

の料に、御屏風調せさせ給ふ。人々に仰せて奉らせ給ふ歌、四月卯花さける所」と詞書せり。
大意 初夏の頃、垣根に咲ける卯花を見れば、早く、夏の來れることを知らせ顔なり、されば、垣は、隣を隔つるものとのみ思ひしに、春と夏の季節までも隔つるものにやあらんとなり。

夏夜

風吹枯木晴天雨月照平砂夏夜霜

江樓夕望

出典 白氏文集卷二に、江樓夕望招客と題し、枯木「古木」に作る。従ふべし。全詩、「海天東望夕茫々。山勢川形瀾復長。燈火萬家城四畔。星河一道水中央。能就江樓銷暑否。比君茅舍較清涼。」

大意 江樓の夕、風が庭の古木を吹いて、木葉を鳴らせば、晴れたる空にも、雨の降るかと思え、月が河邊の砂原を照してきらめけば、夏の夜ながら、霜のおけるかと思ゆとなり。

風生竹夜窓間臥月照松時臺上行

早夏獨居

出典 白氏文集卷十に、七言十二句、贈弼部吳郎中七兄時早夏獨居、閑と題す。全詩は、「四月天氣和且清。綠槐陰合沙堤平。獨騎善馬衝塵穩。初著單衣肢體輕。退朝下直少徒侶。歸舍閉門無送迎。」。春酒冷骨三數盞。曉琴間弄十餘聲。幽懷靜境何人別。唯有南宮老駕兄。」

大意 門を閉ちて、客を送迎することもなければ、窓近き竹の林に、涼しき風の生ずる夕は、軒近き

處に、意の行くまゝに臥し轉び、月、漸く上りて、庭前の松を照らす面白きころは、更に臺上に登りて、月を翫ぶとなり。

空夜窓閑螢度後深更軒白月明初

夜陰歸房

釋釋 ◎空夜 月未だ上らずして、寂寥たる程をいふ。
大意 宵闇の頃、螢の一つ飛び過ぎての後は、窓のあたり、いと物靜かに、夜の更けて、月の出初めたる時は、軒端が、ぼつと白くなれりとなり。

夏の夜をねぬに明けぬといひおきし人は物をや思はさりけむ。人丸

釋釋 ◎ねぬに明けぬ 夏夜の短き心なり。

大意 夏の短夜も、人を戀しく思ひて、物を思ひ續ければ、いねがたく、明しかぬるを、ねぬに明けぬと云ひ置きし昔の人は、我が如く、人を戀しく思ふことはなかりしならんとなり。

時鳥なくやさつきの短夜もひとりしぬればあかしかねつも。同

出典 萬葉集卷十に、寄鳥と題し、二句「きなくさつきの」に作り、詠者不詳なり。拾遺集夏にも「題しらす、讀人しらす」とあるを、後に、歌仙家集、及び柿本集類從に入れたり。

釋釋 ◎なくや やは、感歎の助辭にて、常に、他言語の中間、または、下に用ゐられたり。「難波津にさくやこの花」などいふも、この格なり。◎さつき 五月の異名にて、種々の説あれど、其の義

○原註、菅原本に早夏閑齋獨處、淺草本私註に早夏晴獨處、詠解に早夏獨夜と題す。

○菅原本一書夜欲歸房と題す。

○原註に人丸と見ゆれど、歌仙家集、及び類從本柿本集に、見えす。

○結句、菅原本、及び集抄「あかしかねつ」に作る。

詳ならず。◎ひとりししは、事物をとり出でて、強くいひ示す助辭なり。◎あかしかねつもは、秋の助辭にて、俗に「マア」といふが如し。

大意 一二句は、短夜と云はむ爲の序詞なり。さて、時鳥の鳴く五月の頃は、夜の短き盛りなれば、妹と一緒に寝なば、いよ／＼其の夜の短きを啣つべけれど、妹と別れて、たゞひとり寝ぬる夜は、寝覺め勝ちにて、この短夜も、安らかに明し兼ねるよとなり。

夏の夜はふすかとするればほと／＼きすなく一聲にあくるしのめ。夏之

出典 古今集夏に出づ。

釋 ◎しのめ 倭訓栞に「萬葉集に、細竹目と書く。めは、むれの反、篠の群竹の義也といへり。東雲をよめるは、曉の雲の細やかに明わたるを、篠の芽にたとへいふなるべし。云々」と見ゆ。

大意 夏の夜は、いと短ければ、今寝たかと思ふ間もなく、時鳥のなく一聲に、ふと目さむれば、はや曉となれりとなり。

端午

端は、はじめの義にて、五月の初めの午の日を端午といふ。今の世、五日を用ゐて、午の日を取らず。昔は此の日節會ありて、菖蒲を用ゐられたり。公事根源五月に「今日ちまきを食事あり。昔高辛氏の墓子、五月五日に、舟に乗りて、海を渡りし時、暴風俄かに吹て浪にしづみけるが、水神となりて、舟に人をなやます。或人、五色の絲を以て、ちまきをして、海中に投げ入れしかば、五色の蛟龍となる。それよりして海神人を懼さず、こぎゆく船も災難にあはずと申傳へたり。又は風原が泪羅にしづみ、魚腹に葬せしを祭りし時の供物なりとも申にや」と見ゆ。

有時當戸危身立無意故園任脚行
釋 艾人

○任字、菅家文章、「信」と作る。

○初句、菅原本、數點本、新編萬葉集卷上、古今集等「夏の夜の」に作る。

出典 菅家文章卷四に、端午日賦艾人寛平元年と題せり。全詩は、「艾人形相自蒼生。初出雲講束帶成。運命款逢端午日。追尋恐聽早鷄鳴。」

釋 ◎有時 五月五日をいふ。◎危身立 かの艾人を、門戸の上に懸け置きたるが、危げに見ゆるをいふ。◎故園 艾人は、人の形に似たれど、もと、庭園に生育したるものなるが故に、その初め生じたる園を、故園と云へり。

大意 芥草、端午の節に逢うて、人の形に造られ、衣冠を裝束して、欣悦の情に堪へず、故に、その身は、門戸に懸けられて、その位置危げなれども、此を捨て、脚に任せて、その故園に逃れ行かんとも思はずとなり。

○艾人 荆楚歲時記に「五月五日、四民並鬪百草、又有鬪百草之戲、採艾以爲人懸戶上、以辟毒氣」と云へり。

わかこまとけふにあひくる菖蒲草おひおくる、やまくるなるなむ。 類基

出典 歌仙家集巻に「五月五日駒くらべする比」と詞書あり。

釋 ◎けふにあひくる 競馬は、五月五日に行はるゝこと、下に云へるが如し。又、菖蒲も、此日用ゐるものなれば、ともに、「あひくる」と云へり。即ち昔より、この日に會し來るの意なり。また、菖蒲草といふ下に、「とは」といふ字を入れて見るべし。◎おひおくる、菖蒲の生ひ後るゝと、競馬の追ひ後るゝとを兼ねたり。

大意 今日競馬の若駒は、同列を追ひ越すを勝とし、後るゝを負けとするが、同じくこの日の祝に用ゐらるゝ菖蒲も、今日の間會はずして生ひ後れたるものを、負とするならんとなり。

○結句、原本「つまとなるかな」に作る。今拾遺集、及び菅原本、敍點本等によりて改む。

○地字、佐藤本、淺草本、藤原本、寛永本私註、池に作る。又、原註の池字、原本、及び内閣本集註、地に作る。佐藤本、淺草本、藤原本、寛永本私註、菅原本、集抄、詠解、及び文集によりて改む。消字、金澤本、錦に作る。

きのふまでよそに思ひし菖蒲草けふわか宿のつまとみるかな。能宣

出典 拾遺集夏に、「屏風に」と詞書せり。

釋 〇つま 倭訓栞に「夫妻互に稱して、つまといふ。むつまじきの義なり」と云へり、云々。又神代記に、爪又爪をよめり。簾のつま、衣のつま、扇のつま、草のつまなど、みな端をいふ。爪の義なり」と見ゆ。こゝには、簾のつまと、妻とを通はし云へり。

大意 五月五日の節句に、池の汀に生ひたる菖蒲を引き來りて、わが宿の軒にかくるにつけて、昨日まで、よそ／＼しく思ひし菖蒲なれど、今日は、他處の物とも思はれずといふ意を、詞の同じきによりて、わが宿の妻と見るかなと云へるなり。

納涼

青苔地上消殘雨。綠樹陰前逐晚涼。池上逐涼。

出典 白氏文集卷三十三に、池上逐涼と題する二首の一にして、殘雨を「殘暑」に作る、從ふべし。全詩は、この句の下に、「輕履單衫薄紗帽。淺池平岸痺藤床。簪纓怪我情何薄。泉石諸君味甚長。徧問親爲老計。多言宜靜不宜忙」の三聯あり。

大意 盛夏已に去つて、殘炎なほ全く退かず、故に、或は青苔地上に逍遙して、殘暑を消し、或は綠樹陰前に漫行して、晚涼を逐ふとなり。

露簾清瑩迎夜滑。風襟蕭灑先秋涼。池上夜境。

出典 白氏文集卷十二に出づ。全詩「晴空星月落池塘。澄鮮淨綠表裏光。無一人驚。鹿野禽下。新睡覺時幽草香。但問塵埃能去否。濯纓纓何必向滄浪」。

釋 〇露簾 簾は竹席なり。倭名抄調度に「蔣紡切韻云簾織爲席、暑月鋪之」とあり。竹皮を、庭の如く編みて作れるものなり。さて、夜に入りて、その上に、露の置くによりて、露簾と云へり。

〇清瑩 清くかゝやきて涼しきさまなり。〇迎夜滑 夜に入れば、露の爲に、簾の肌のすべらかになるをいふ。〇風襟 衣の襟に、風を含むをいふ。〇蕭灑 俗のさつぱりする心。

大意 涼榻に踞して晚涼を貪るに、露のおきたる簾は、星月の光に清く瑩きて、夜になると滑らかになり、風を含める衣襟は、自ら爽快にして、いまだ秋ならざるに、涼しくなれりとなり。

不是禪房無熱到。但能心靜即身涼。恒寂禪師。

出典 白氏文集卷五に「苦熱題恒寂師禪室」と題し、上に、「人々避暑走如狂。獨有禪師不出房」と見え、不の字「可」に作る。

釋 〇禪房 禪を修する僧房をいふ。

大意 人々暑熱を苦みて、これを避んが爲に、東西に奔走すること、狂するが如き時に當りて、我が恒寂禪師は、獨り其の房を出づることなく、恰も暑熱の何たるを知らざるに似たり、これ炎暑の、獨り彼の房に到ることなきにあらず、たゞその身、禪定に入りて、心身ともに安靜なるが故に、自ら、暑氣の至るを知らざるなりとなり。

○盤字、尊圓本、及び山崎本、又原註の池字、原本及び寛永本私註、集註、地に作る。佐藤本、藤原本、淺草本、私註、菅原本、集抄、詠解、内閣本、及び文集によりて改む。

○恒寂の恒字私註、集註、及び内閣本、恒に作る。

○原註、石の下、佐藤本、陸爾本、寛永本、集抄、岸字あり。

斑婕妤^ガ團雪^ノ之扇^ヲ代^シ屏風^ニ兮長^ク忘^ル燕昭王^ヲ招涼^ノ之珠^ヲ當^テ沙月^ノ兮自得^ル。水石序。

○班婕妤 班況の女。前漢の成帝の宮人にして、婕妤たり。常に嘉言を以て帝に進む。趙飛燕宮に入る及びて、譖にあひ、退きて、怨歌行を作る。○團雪之扇 班婕妤が怨歌行に「新裂^ニ齊^ノ綺^ノ素^ノ鮮^ニ潔^ニ如^シ霜^ノ雪^ノ。裁^ニ爲^シ合^ノ歡^ノ扇^ノ。團^々似^シ明^ノ月^ノ。出^テ入^リ君^ノ懷^ノ袖^ノ。動^シ搖^シ微^シ風^ノ發^ス。常^ニ恐^ル秋^ノ節^ノ至^ル。涼^ニ颼^ニ奪^ル炎^ノ熱^ノ。棄^テ捐^テ篋^ノ筥^ノ中^ニ。恩^ノ情^ノ中^ニ道^ノ絕^ス。」とありて、白き絹を以て、團扇を作るに、その白きこと霜雪の如く、團きこと月の如くなれば、かく云へり。○燕昭王 周末の燕國の主、名は平、郭隗、樂毅、鄒衍等の名士を用ひて、齊を伐ち、仇を報ず。○招涼之珠 拾遺記^四に「昭王坐^ニ握^ノ日^ノ之^ノ臺^ニ、參^ニ雲^ノ上^ニ可^レ捫^レ日^ノ、時有^ニ黑^ノ鳥^ノ白^ノ頭^ノ、集^ニ王^ノ之^ノ所^ニ、啣^ニ洞^ノ光^ノ之^ノ珠^ノ、圓^ノ徑^ノ一^ノ尺^ノ、此^ノ珠^ノ色^ノ黑^ノ如^シ漆^ノ、懸^ニ照^ニ於^ニ室^ノ內^ニ、百^ノ神^ノ不^レ能^レ隱^レ其^ノ口^ノ靈^ノ、此^ノ珠^ノ出^テ陰^ノ泉^ノ之^ノ底^ニ、陰^ノ泉^ノ在^ニ寒^ノ山^ノ之^ノ北^ニ、員^ノ水^ノ之^ノ中^ニ、言^ハ、水^ノ波^ノ常^ニ圓^ニ轉^ニ而^レ流^ス也、有^ニ黑^ノ蚌^ノ一^ノ飛^ノ翔^ノ來^ノ去^ノ、如^シ五^ノ岳^ノ上^ニ、昔^ニ黃^ノ帝^ノ時^ノ霧^ノ成^ノ子^ノ、遊^ニ寒^ノ山^ノ之^ノ嶺^ニ、得^テ黑^ノ蚌^ノ在^ニ高^ノ崖^ノ之^ノ上^ニ、故^ニ知^ニ黑^ノ蚌^ノ能^レ飛^レ矣[、]至^ニ燕^ノ昭^ノ王^ノ時^ノ、有^ニ國^ノ獻^ニ於^ニ昭^ノ王^ノ、王^ノ取^テ瑤^ノ潭^ノ之^ノ水^ノ洗^ニ其^ノ沙^ノ泥^ノ、乃^ニ嗟^ニ嘆^ニ曰^ク、自^ニ懸^ニ日^ノ月^ノ以^テ來[、]見^ニ黑^ノ蚌^ノ生^レ珠^ノ已^ニ八^ノ九^ノ十[、]遇^ニ此^ノ蚌^ノ千^ノ歲^ノ一^ノ生^レ珠^ノ也、珠^ノ漸^ニ輕^ニ細^ニ、昭^ノ王^ノ常^ニ懷^ニ此^ノ珠^ノ、當^ニ隆^ノ暑^ノ之^ノ月^ノ、體^ノ自^ニ輕^ニ涼^ニ、號^ニ曰^ク銷^ノ暑^ノ招^ノ涼^ノ之^ノ珠^ノ也」と云へり。

大意 水邊の風、極めて涼しければ、彼の團雪の扇も、長く忘れて用ゐず、砂石を照す月の影圓かなれば、それを、かの招涼の珠に當て、わが物として、涼しさを覺ゆとなり。

臥見^{シテ}新圖^ヲ臨^ミ水障^ヲ行^ヒ吟^ム古集^ノ納涼^ノ詩^ヲ。屏風納涼畫也。

○此時、菅家文章、本朝文粹等所見なり。

し。日本詩紀また然り。而して、諸本、屏風納涼畫也と題し、菅家原本、夏日偶興に作る。今案するに、若屏風畫に題せるものとす。時は、行吟の字義通ざざるが如し。故に菅原本に従ひて改むべきに似たれど、暫く舊注を存して、後考を俟つ。

○新圖臨水障 水邊の景色を、新に描ける障子なり。さて、その障子は、貞丈雜記^{卷十四}に、障子と云ふは、厚く裏表より張て、或は繪など書き、或はからかみにてはりたるをば、襖障子と云ふ。又薄き紙、又は生絹などにて張りたるをば、あかり障子といふ也。障子と云は、總名也。間々を障へへだつる物なる故、障子と云ふ也」と云へり。

池冷水無^ニ三伏^ノ夏^ノ松高風^ノ有^ニ一^ノ聲^ノ秋^ノ。夏日閑遊ノ暑。源英明。

○三伏夏 和漢名數^末に「初伏^夏至^ノの後^ニ、中伏^同第^三の庚^ノ、末伏^立秋^ノの後^ニ、」と見ゆ。夏至より後の、第三の庚の日より十日間を初伏とし、第四の庚の日を仲伏とし、立秋後の初庚の日を後伏とし、是を三伏と名く。暑熱尤も盛りなる頃なり。

大意 池邊の松かげに立ちよりて、炎暑を避くるに、さすがに、池は、水波冷しくして、三伏の暑熱を覺えず、松は亭々として、梢の風、さと吹きおろすその一聲、いかにも涼しく聞えて、さながら、秋の籠れる心ちすとなり。

すしやと草村^ノこと^ニにたちよればあつさを増るとこなつ^ノ花^ノ。貞之

出典 古今六帖^{卷六}に「なでしこ」の題の下にあり。

觸穢などの時もあり。神事を行ふ時は、臨時にも常にあれども、この大祓は、百官一同に集りて、祓をするなり。云々」と見ゆ。又民間にても、是を行ひしが、後世、十二月の祓は廢絶し、六月のみ行ふことなれり。名義は、八雲御抄上三に、「邪神をはらひなごむる祓ゆるに、なごしといふなり。河邊に、いぐしたて、麻の葉はなどにてするなり。又夜する事なり」と見ゆ。

大意 今日六月の晦にて、常には、諸人の懇なる願ごとをも受け引かずして、荒びするむ禰神をも、和むる祓を爲る日ぞとなり。

花橘

花橘とは、橘の花に就きていへるなり。さて、橘は、記紀を按ずるに、垂仁の朝、命を奉じて、田道間守といふ人の、常世の國より將來せし非時香菓なり。田道間守の名によりて、「チチバナ」といふとぞ。今いふ橘柑柚の總名と見れば事も無けれど、或は蜜柑といひ、或は今いふ橘なりといひ、或は柑子なり、などいひて、定説なし。その花夏開きて、その實は、冬を経て、夏に至り、花と共に在る邊を詩歌に詠めれば、今の夏蜜柑が、橙の外にはあるべからず。しかも、夏黄色を呈して、金鈴の如くなる由をいへれば、夏蜜柑こそこれにかなふべかれ。但し、時代によりて、稱呼に變化ありしと思はるれば、一概には定め難し。

盧橘子低山雨重。枳櫚葉戰水風涼。

西湖晚歸望孤山寺。白

出典 白氏文集卷二に、西湖晚歸望孤山寺贈諸客と題し、枳字、「棕」に作る。全詩「柳湖松島蓮花寺。晚動歸棹出道場。煙波滄海搖空碧。樓殿參差倚夕陽。到岸諸君回首望。蓬萊宮在滄中央。」

釋 盧橘 和漢三才圖會卷八十七 金柑の條に、「金橘、盧橘、夏橘、山橘、給客橙」等の名稱を擧げて、「盧者酒器名、形肖故爲盧橘、然文選註、以枇杷爲盧橘誤也」と見へたり。但し、潜確

「和漢朗詠集」の「花橘」の條に、
 橘は、記紀を按ずるに、垂仁の朝、命を奉じて、田道間守といふ人の、常世の國より將來せし非時香菓なり。田道間守の名によりて、「チチバナ」といふとぞ。今いふ橘柑柚の總名と見れば事も無けれど、或は蜜柑といひ、或は今いふ橘なりといひ、或は柑子なり、などいひて、定説なし。その花夏開きて、その實は、冬を経て、夏に至り、花と共に在る邊を詩歌に詠めれば、今の夏蜜柑が、橙の外にはあるべからず。しかも、夏黄色を呈して、金鈴の如くなる由をいへれば、夏蜜柑こそこれにかなふべかれ。但し、時代によりて、稱呼に變化ありしと思はるれば、一概には定め難し。

類書に、「盧橘は夏蜜柑にて、夏に至りて熟する者也」といへる宜し。○枳櫚 倭名抄草木に、「唐韻云、枳櫚一名蒲葵、説文云、枳櫚可以爲索 枳音井、枳櫚」と見ゆ。

大意 湖上より孤山寺を回望するに、盧橘の實のなり下りたるうへに、山近き雨の降りて、いよゝく重やかに、枳櫚の葉は、水の面を吹き來る風に戦ぎて、いと爽涼たりとなり。

枝繁金鈴春雨後。花薰紫麝調風程。

花橘詩。後中書王

釋 紫麝 和漢三才圖會卷三十八に「案、三才圖會云、麝如小鹿、有虎豹之文、今、商汝山中多群也、字彙亦曰、有虎豹文、蓋黑色有豹文者乎。また「今所渡麝香、雲南者爲上云々、一種無皮膜、如煉粉者、名曰傳染麝香、共赤黑色而有乾者、云々」と見ゆ。其の色、赤黒色といへば、又紫麝とも云へるなるべし。○調風 爾雅釋天に、「南風謂之調風」註に、「詩に曰、凱風自南、疏に、「南風謂之韻風者、李巡曰、南風長養萬物、喜樂、故曰韻風、韻樂也」と見ゆ。

大意 橘は、春雨の潤を経て後、その實黃熟して、枝上に黄金の鈴をかけた如く、夏の南風の吹く程、その花の香高く、麝香の薰するが如しとなり。

さつきまつ花たちはなのかをかけは昔の人の袖の香をする。伊勢

釋 五月を待ちうけて咲く花橘の香を嗅けば、むかし馴染の人の袖の香がするよとなり。ほととぎす花橘に香をとめてなくはむかしの人やこひしき。貫之

○原註に、伊勢とあれど、歌仙家集、及び類従本伊勢集に見えず。古今集夏に「よみ人しらす」とあり。伊勢物語に見えたるによりて、伊勢とせるか。されど、この物語、伊勢の作とするは非なり。

○集抄、菅原本、藤原本、金澤本等、また「花橘の」とあり。

出典 新古今集夏に出で、二句「花橘の」とあり。
詠釋 ◎とめて 求めてなり。

大意 時鳥よ、毎日に、この橘の木蔭に、この花の香を尋ねて来て鳴いて居るのは、汝も、この花の香につれて、昔の人を思ひ出して、それが戀しき故にやとなり。

蓮

爾雅釋草に、「荷、芙蓉、江東呼之荷、其莖、茄、其葉、蓬、其木、荷、在泥中者、其莖高、其實蓮、其根、其的中、的中意、見ゆ。」

風荷老葉蕭條綠、水蓼殘花寂寞紅。

縣西郊秋、寄贈馬、造階下、白。

出典 白氏文集卷十に、縣西郊秋寄贈馬造階下と見ゆ。全詩は、「紫閣峯西清渭東。野煙深處夕陽中。我厭官遊君失意。可憐秋思兩心同。」の六句なり。

詠釋 ◎風荷 風になびく蓮をいふ。◎老葉 荷葉の、秋に入りて衰へたるなり。◎蕭條 字彙に「寂寥貌」とあり。◎水蓼 水邊に生ずる蓼なり。爾雅釋草に、「蒿、虞蓼、」疏に、「周頌良耜云、以蓼茶蓼、毛傳云、蓼水草是也。」

大意 これは、秋の光景を叙したるものなれど、たゞ上句の意によりて、こゝに收め、さて夏部にも入れるなり。意は明かなり。

葉展影翻當砌月、花開香散入簾風。

階下、蓮、白。

出典 白氏文集卷十に出でたる七絶の起承にして、轉結は、「不如種在天池上。猶勝生於野水中。」

○原註、階下蓮の下、佐藤本、淺草本、醍醐本、寛永本私註、詩字本私註、

あり。又作者を、佐藤本、寛永本私註に「許渾、又云白」とあり。

とあり。

詠釋 ◎砌 東雅室に、「階、和名鈔に、考聲切韻の登、堂級也といふ説を引て、ハシ、一にシナともいふ也」と註し、又兼名苑を引て、「砌、一名は階也、ミギリとよむ」と云へり。

大意 階下の荷は、その葉、漸く展びては、砌を照す月の影に、葉の影が翻り、その花開きては、簾内に吹き入る風に、花の香が、ぱつと匂ふとなり。

烟開翠扇清風曉、水泛紅衣白露秋。

縣西郊秋、寄贈馬、造階下、白。

出典 全唐詩許渾に、秋晚雲陽驛西亭蓮池と題し、水泛を「水泥」に作り、「一作泛」とあり。全詩は、「心一作憶蓮池、兼燭遊。葉殘花敗尚維舟。神女暫來雲易散。仙娥初去月難留。空懷遠道難持贈。醉倚闌干盡日愁。」とあり。

詠釋 ◎煙開翠扇 烟は水煙をいひ、翠扇は、蓮の開けるが、緑色の團扇を開きたるに似たるをいふ。◎水泛紅衣 花の水に映れるが、紅衣を浮べたるが如く見ゆるをいふ。◎白露秋 淵鑑類函に引く所の、周書時訓に曰く、「立秋後五日白露降、後五日寒蟬鳴、白露不降民多疾病、寒蟬不鳴人臣力疾、白露之日、鴻雁來云々」と云へり。

大意 荷葉は、清風の吹き渡る曉、絶えくなくなる水烟の中に、緑の團扇を開きたる如くに立ち、荷花は、白露のおる、秋、水のうへに、紅衣を泛べたる如くに咲けりとなり。

緣何更覓吳山曲、便是吾君座下花。

亭子院法皇御賀、吳山千葉蓮華屏風詩。延喜御製。

釋 ◎竟吳山曲法華傳に、「流水大臣有罪、王曰、得青蓮花可免之、吳山有池、池有青蓮花、又有赤梅檀、大龍護而難近、大臣請吳山羅漢云々、來即曰、若人稱南無佛、龍神不害、大臣從其語、往吳山稱南無佛、龍知佛子散之、遂採蓮花獻王、免罪云々」とあるを云へり。
大意 この御座のほとりの蓮花は、即ち吳山の青蓮花に均しければ、彼の流水大臣の如く、遠く辛苦を盡して、その花を求むるに及はず、然も、座ながらにして、この尊き青蓮花を得るは、わが法皇の、佛果を得給へる故なりとなり。

○享子院法皇 宇多法皇をいふ。その五十賀行はれし時、延喜帝、即ち醍醐天皇は、法皇の御子にて、御幸ありけるに、御屏風に、吳山千葉の蓮華を書けるを見て、作りせ給へるなり。

岸竹枝低應鳥宿潭荷葉動是魚遊

池亭晚望
紀在昌

大意 明かなり。

經爲題目佛爲眼知汝花中植善根

石山寺池蓮
源爲憲

出典 本朝麗藻に、石山寺小池蓮と題し、起承は「寺鑿小池蓮正進。與人間草不須論」とあり。

釋 ◎經爲題目 佛經中に、蓮花を題目とするは、妙法蓮華經なり、題は顯なり。又木材の端頭なりと云ひ、目は、黙して、内に識るなりと云へり。即ち、物の一端を見て、全般の節目條理を知るべき要領語を云ふ。◎佛爲眼 類聚名物考佛教部に、「佛眼を青蓮花にたとへしは、花びらにはあらず。天

○原註の望字、佐藤本、醍醐本、寛永本私註、及び集抄、略に作る。

竺に細葉の蓮あり、其葉の形、狭く長くして、下の方少しく丸くして、上の方、やうやうひろし。その形の佛眼に似たれば、たとへていふなり。目頭の方は丸くて、目尻の方はそく、長きをいふなり。無量壽經に「其池岸上有梅檀樹、華葉垂布、香氣普薰天、優鉢羅華、鉢曇麻華、拘物頭華、分陀利華、雜色光茂、彌覆水上、科註上 新譯華嚴音義云、優鉢羅華、具云尼羅烏鉢羅、尼羅者此云青、烏鉢羅華號也、其葉狹長近下小圓、向上漸尖、佛眼似之、經多爲喻、其華以藕、稍有刺也」と見ゆ。◎善根 諸佛を供養し、教法に隨順し、尊長を恭敬し、一切貧苦の衆生を憐愍し、乃至六道の衆生に、殺害を加へず欺かす賤めざるを、諸種善根といふ。

大意 蓮花の、或は、經文の題目となり、或は佛菩薩の眼にたとへらるゝによりて見れば、多くの花の中に於て、獨り汝は、前世より、他に勝れたる善根を植ゑおきたりといふことを知れりとなり。

はらす葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあさむく。 夏正

出典 古今集夏に、「はらすの露をみてよめる」と詞書せり。

釋 ◎にこりにしまぬ 法華經品出に「善學菩薩道、不染世間法、如蓮華在水」と見ゆ。即ち世間の汚濁に侵染せざるを、蓮の濁水中にありて、益清らかなるに譬へたり。◎露を玉とあさむく 荷葉の上に止れる露は、誰人も、玉かと疑はるゝを、蓮の心ありて、人に偽るやうにいへるなり。

大意 蓮華は泥中より出でて、その穢濁に染まざる、奇特のものに有りながら、何故に、露をば、玉

と欺きて見するにやとなり。

郭公

東雅集に「杜鵑ホトギス、倭名紗に、唐韻を引て、鶯鶯は、ホト、ギス、今之郭公也と註せり。ホト、ギスとは鶯鶯の啼聲なり。十王經に見えたり。倭名紗に見えし所の如きは、我國の中世より云ひつぎし所によりしなるべし。されど鶯鶯、郭公、もとこれ一物にもあらず、二鳥、またホト、ギスといふ者とも見えず。杜鵑の如きは、此に云ひ傳へし所と、漢にいひ傳へし所と相合へる事共あり。杜鵑、子規等の字は、古人も又用ひし所とこそ見えたれ云々。」

一聲山鳥曙雲外萬點水螢秋草中

題發幽居將尋詞志。許渾

出典 全唐詩許渾には、自楞伽寺晨起汎舟道中有懷と題せり。全詩は「碧樹蒼々茂苑東、佳期迢遞路何窮。門掩竹齋微有月。棹移蘭渚淡無風。欲知此路堪惆悵。菱葉蓼花連故宮。」

釋

◎山鳥 郭公をいふ。◎水螢 水邊に群る螢。◎秋草中 叢に螢の飛ぶ心なり。禮記月令に「腐草化為螢」と見ゆ。さて螢は夏の物なるに、こゝに、秋草中と云へるは異なるが如くなれど、大陰曆は、四月より六月までを夏として、七月より秋なるが故に、晩夏の螢は、秋に近ければ、かく云へり。されば、次の詩句に、「螢火亂飛秋已近」と見えたり。

大意 晩夏の候、曉に起きて、幽居を出づれば、山鳥一聲、曙雲の外に鳴き去つて、行くへを知らず、又、夜いまだ全く明けざれば、萬點の螢火は、草むらの中に光を放ちて、幽邃爽涼たるさまなり。

さつきやみおほつかなきに時鳥なくなる聲のいと、はるけき。明日香皇子

出典 萬葉集卷十に「この夜らのおほつかなきに時鳥鳴くなる聲のおとのはるけき」とある「讀人しらす」の歌を改めたるなり。

○新後拾遺集夏には「よひの同もおほつかなきを郭公なくなる聲のほどのほるけき」と改め、赤人の歌として入れたり。

す」の歌を改めたるなり。

釋 ◎さつきやみ 五月のころ、雨しげく降りて、夜のいたく、聞きほどをいふ。◎おほつかなきに おほつかなき空にの意なり。おほつかなきは、こゝにては不分明なるをいへり。

大意 五月開の頃は、打つゝき雨ふりて、黒白もわかぬほど聞き空に、時鳥の、一聲二聲鳴きたる聲の、甚だ遙にして、いよく覺束なしとなり。

ゆきやらて山路くらしつ郭公いまひとこゑのきかまほしさに。公忠

出典 拾遺集夏に「北宮の裳着の屏風に」と詞書し、歌仙歌集には、「北の宮のみくしあげの屏風に、山を越ゆる人の、子規を聞きたる所に」と詞書あり。

釋 ◎山路くらしつ 山路にて暮しつゝの意。

大意 山路を行く人の、思ひもよらず、時鳥のなくを聞きて、今一聲のきかまほしさに、行く手を急ぎもやらで、同じ所に立ちとまりて、遂に一日を暮せしさまなり。

さよふけてねさめさりせは時鳥人つてにこそ聞くへかりけれ。忠見

出典 拾遺集夏に「天曆御時の歌合に」と詞書せり。

大意 夜ふけて、寢覺の床に、時鳥の初聲を聞きしうれしさに、今宵、かく寝ざめせずば、今年の時鳥の初音は、人傳にのみ聞くべかりしものとなり。物思ふをりの寝ざめも、今は、幸となれる趣なり。但し、「せば」とかかれるに、下句の仕立かなはず。「こそ」もいかい。

螢

螢火亂飛秋已近。辰星早沒夜初長。

夜坐。元稹。

出典 全唐詩元稹に見ゆ。全詩「雨滯更愁南瘴毒。月明兼喜北風涼。古城樓影橫空館。濕地蟲聲透暗廊。」
孩提萬里何時見。狼籍家書滿臥牀。」

釋 辰星 和漢三才圖會卷一に「辰星水曜生於申、壯於子、死於辰、登壇必究云、辰星宰相之祥也、常以二月春分見奎角、五月夏至見東井、八月秋分見角元、十一月冬至見牽牛、出以辰戌、入以丑未、二句而入、晨候之東方、夕候之西方、常隨太陽而行、然或或前後不出三十度之外、亦一月一宮、一歲一周天」とあり。然れば、この辰星は、今の午後第四時七時に現はれ、夜の十二時九時に、その光も最も盛にして、午前八時五時にその光を失ふ。さて、秋分の後、夜が長くなる時は、日出も自ら後るゝが故に、夜が明けて間もなく、辰星その光を没す。是を辰星早没といへるなり。舊註に、この事を古來の難義なりなどいへるは、いと拙し。

大意 晩夏の候、螢火各所に飛びみだれて、秋も已に近づき、辰星が早く、その光を没して、夜も、初めて長くなれりとなり。

兼葭水暗螢知夜。楊柳風高雁送秋。

常州留與楊給事。許渾。

出典 增補詩句題解卷十九に「許渾常州留與楊給事詩と見えて、原註の與字なし。又雁送秋を「雁報秋」に作る。全唐詩許渾集所見なし。」

釋 兼葭 倭名抄草木部に「兼名苑云、葭一名葦阿之爾雅注云、一名蘆、兼は、爾雅釋名に「似雀而細、高數尺、江東呼爲蘆」といへり。○楊柳 倭名抄草木部に「唐韻云、楊和名夜、赤莖柳也、兼名苑云、青楊一名蒲柳、また同書に「兼名苑云、柳一名小楊和名之太、崔豹古今註云、一名獨搖、微風大搖、故以名之」と見ゆ。淵鑑類函木部に「崔豹古今注曰、蒲柳生水邊、葉似青楊、亦曰移柳、亦曰水楊、即蒲楊也、支勁韜任大用、云々」と見ゆ。即ち、柳は、世に「しだりやなぎ」といふ物にして、その葉細長にして、木幹も細く、又、楊は、かはやなぎといふものに當りて、葉も廣く、幹も大なるものなり。○雁送秋 雁は、字彙に「大曰鴻、小曰鴈」とあり。雁は、春は必ず北し、秋は必ず南して、嘗て誤ることなければ、今、蕭々たる秋風、楊柳の梢を吹きて、雁の南行するを見て、秋の季節を送り來るが如く思へるなり。

大意 兼葭生ひ茂る水面の暗くなれるに、螢は夜なることを知りて、その光を放ち、楊柳の梢に、風高く吹くにつれて、雁は、北方より來りて、この秋を送り來るとなり。

明々仍在誰追月光於屋上。皓々不消豈積雪片於床頭。

秋螢照映賦。紀納言。

釋 追月光於屋上 南齊書江表傳に「江泌字士清、濟陽考城人也、云々、少貧晝日斫屨、夜讀書、隨月光、握卷升屋、性行仁義、云々」と見ゆ。○皓々 皓は、爾雅釋名に、「光也」と見えて、螢の光の明かなるをいふ。○豈積雪片於床頭 蒙求卷上に、孫康映雪と題して、「孫氏世錄曰、孫康、家貧無油、常映雪讀書、少小清介、交遊不雜、後至御史大夫」と見ゆ。

大意 螢の光、明々皓々として、書窓を照して明なれば、江士清、孫康が如き寒生も、讀書するに、屋上に月光を追ひ、床頭に雪を積むを要せずとなり。

○峽は玉簫に「小寒也、香衣也」とあり。題の心は、螢の光、窓を透して書冊を照らすをいふ。晋書傳に「車胤字武子、南平人也、云々、胤恭勤不倦、博學多通、家貧不常得油、夏月則練囊盛數十螢火、以照書、以夜繼日焉」と見ゆ。

山經卷裏疑過岫海賦篇中似宿流

同題。 權直幹

釋 山經 昔、唐虞の際洪水あり、大禹之を治めて、五方の山を分ち、八方の海を分ち、品物を等類して、山海經を作れり。今、山經といふは、その山部をいへり。山海經新校正夏小正序に「山經三十四篇實是禹書、與伯益、至名山山川、定其秩祀、量其道理、類別草木鳥獸、今其事見於夏書禹貢」といへり。◎岫 字彙に「山有穴曰岫」とあり。◎海賦 木華字は玄虛、廣川の人、海賦を作る。文選卷十に載せて、昔より名文と稱す。

大意 螢の影を以て、山經を照せば、螢が山の岫を飛び過ぐるかと疑ひ、又、海賦を照せば、螢が、海流に宿るが如く思はるとなり。

くさふかきあれたる宿のともしひの風にきえぬは螢なりけり。 赤人

大意 草ふかき荒野に見ゆる一つ家に、一點の光の見ゆるを、燈火かと思れば、豈に計らむや、さにはあらで、吹き来る風にも消えぬ螢の光なるよとなり。

つゝめとも隠れぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり。

○新勅撰集夏に「よみ人しらす」と題す。四句、原本「風にきえぬ」に作る。今注草本私註、書原本、勅撰本、尊圓本、山崎

本、金澤本、及び新勅撰集によりて改む。歌仙家集、及び類從本亦人集共に所見なし。又、集抄には、三句ともしびは」に作る。○作者、原本、金澤本、淺草本私註、註解、國字抄共に缺く。菅原本に、人丸とあれど、歌仙家集、類從本亦本集共に所見なし。

出典 後撰集夏に「桂のみこの、螢をとらへてといひ侍りければ、わらはの、かざみの袖に包みて」と詞書し、また、大和物語上に「桂の御子に、式部卿の宮すみ給ひける時、その宮にさぶらひけるうなぬなむ、このをとこ宮を、いとめでたしと思ひかけ奉りけるを、え知り給はざりけり。螢の飛びありきけるを、かれとらへてと、此わらはに宣はせければ、かざみの袖に、螢をとらへて、包みて御覽せさすとて、聞えさせける」と見えて、この歌を擧げたり。

釋 ◎夏虫 こゝにては、螢をいへり。◎おもひ 思のひに、螢の火を通はしたり。

大意 螢によせて、戀の心をいへるにて、かの螢の、汗衫の内に包まれながら、その身より餘れる光は、遂に隠るゝことなきが如く、わが心の思も、身の内に包み隠しながら、え隠し果せざるよとなり。

蟬

遅々兮春日玉蟄暖兮温泉溢嬾々兮秋風山蟬鳴兮宮樹紅

白 關山宮賦。

出典 白氏文集卷四に、驪山高と題し、「美天子重惜人之財力也」と註し、全章は、上に「高々驪山上有宮。朱樓紫殿三四重。」といふ二句あり。下は「翠華不來歲月久。瑤有衣兮瓦有松。吾君在位已五載。何不三幸於其中。西去都門幾多地。吾不遊兮深有意。一人出兮不容易。六宮從兮百司備。八十一車千萬騎。朝有宴飲暮有賜。中人之產數百家。未足充君一日費。吾君修己人不。知。不自逸兮不自嬉。吾君愛人人不識。不傷財兮不傷力。驪宮高兮高入雲。君之來兮

爲三身。君之不來分爲三千萬人」と見ゆ。

釋 ○遅々 緩かにして迫らざる義にて、春の日にいへるは、卓氏漢林に「日長而暄也」とあり。

○玉甃 玉にて飾れるいしだたみなり。○温泉溢 温泉は、驪山の温泉なり。三秦記に「驪山温泉、舊説以牲祭、乃得入、可去疾消病、俗云、秦始皇與神女遊而忤其旨、神女唾之、則生瘡、始皇怖謝、神女爲出温泉而洗除、後人因以爲驗」と見ゆ。○嬋々 字彙に「長弱貌、又曳貌、又風動貌」と見ゆ。

大意 かの驪山宮は、長閑なる春の日には、玉を敷ける甃暖にして、温泉溢れ流れ、そよ吹く秋の風には、山の蟬鳴いて、宮のうちの梢も、やゝ色づきたりとなり。

○驪山宮 大明大統志三十二、「西安府驪山在臨潼府東南三里」と見ゆ。秦始皇、始めて、こゝに阿房宮を作りしこと、史記に出づ。唐代また、こゝに離宮を築きたり、華清宮これなり。

千峯鳥路含梅雨五月蟬聲送麥秋

發音滋店至長安西方 渡江之作 李嘉祐

釋 ○千峯鳥路 千峯は連山をいひ、鳥路は、雲井遙に聳えたる山上の路にして、翼なければ到り難き程の處をいへり。○含梅雨 假名曆註解に「入梅芒種の後、壬の日を入梅とす。六月節の後の壬の日を出梅とす。かくの如く三十日の内なり。中梅雨と名づけたるは、梅の實黄ばみ落る比なるに因つて也」と見ゆ。また初學記に「梅熟雨、江東人呼曰『黄梅雨』と見ゆ。○送麥秋 禮記月令に「孟夏之月云々、靡草死麥秋至、仲夏之月云々、鹿角解蟬始鳴」と見えて、麥は四月に熟するが故に、この月を麥秋と稱し、又蟬は、仲夏、則ち五月の候に入りて鳴くが故に、麥秋を送り過せりと

○内閣本には、作者を李嘉祐、また許渾とせり。

いへり。

大意 明かなり。

鳥下綠蕪秦苑靜蟬鳴黃葉漢宮秋

題 咸陽城東樓 許渾

出典 全唐詩許渾に、咸陽城東樓一作咸陽城西樓 一作咸陽城東樓と題し、全詩は、「一上高城萬里愁。蒹葭楊柳似汀洲。漢雲初起日沈閣。南近磽嶇溪、西對慈福寺閣山雨欲來風滿樓。東來渭水流。一作渭水寒聲盡 一作光夜流、聲一作光」と見え、秦苑靜を「秦苑夕」に作る。三體詩三、丁卯詩集一等之に同じ。従ふべし。

釋 ○綠蕪 蕪は字彙に「荒也、又草名」と見えて、荒野に草の茂れるをいへり。○秦苑 秦始皇帝の、咸陽宮の苑園をいふ。史記秦始皇紀九年に、「戰咸陽正義曰、括地志云、咸陽故城、亦名渭城、在雍州北五里、今咸陽縣、東十五里、秦孝公已下故都、此城、始皇鑿之、金人十二於咸陽、また、同書二十に「秦每破諸侯、寫放其宮室、作之咸陽北阪上、時、別名渭城、正義曰、今、咸陽縣南臨渭、自雍門以東至涇渭、殿屋復道、周閣相屬、所得諸侯美人鐘鼓、以充入之」といへり。○漢宮 上に引く史記の註に「漢武時別名渭城」といへるによれば、なほ、咸陽宮を指せるものと見るべし。

大意 上句は、秦亡びて後、さしも莊麗を極めたりし咸陽の苑園も、荒廢に歸して、名もなき草など、心のまゝに生ひ茂りたれば、夕暮には、禽鳥も臥處をもとめており立つよしにて、下句は、漢の世には、天下の豪奢を極めて、宮室の美も、目を驚す許りなりしに、世遷り時隔りては、空しく秋風の爲に黄ばめる林の梢に、蟬の聲の喧しき由にて、世上の榮花は、夢幻に同じきを歎きたるなり。

今年異例腸先斷不是蟬悲客意悲聞新蟬

出典 菅家文章四に、新蟬と題し、上に「新發一聲最上枝。莫言泥伏遂無時。」の二句あり。菅公、讚岐の守として、彼國に客寓せられし時の作なり。

大意 明かなり。

歳去歳來聽不變莫言秋後遂爲空新初蟬 紀納言

大意 年々歳々、年は改れども、蟬の聲は、去年も今年も、少しも變ることなし、然れば、その蟬は、毎年、秋の後に、空しくなるものとはいふべからずとなり。

夏山のみねのこするの高ければ空にそ蟬のこゑはきこゆる。人丸

大意 明かなり。

これを見よ人もとかめぬ戀すとてねをなく虫のなれる姿を。大納言重光

出典 後撰集三に「物いひける女に、蟬のもぬけを包みて遣すと」と詞書し、二句「人もすさめぬ、」結句「姿よ」とあり。

釋釋 ◎ねをなく 音をたて、はげしくなくをいふ。◎姿を をは歎辭なり。

大意 人も取りあはぬに、われ獨り焦れ思ひて、終に、この虫の蛻のやうに、やつれ果てたる我が身の姿を、あはれとも見よとなり。

○この歌、萬葉集に所見なし。又歌仙家集、類從本人丸集にもなし。

○二句、淺草本私註、集抄、勅點本、内閣本、後撰に同じく、結句、菅原本一書、集抄、勅點本、及び内閣本同じ。

扇

盛夏不消雪終年無盡風引秋生手裏藏月入懷中白

出典 白氏文集十三に、白羽扇と題して、全詩は、上に「素是自然色。圓因裁製功。颯如松起籟。颯似鶴翻空」とあり。下に「塵尾班非疋。蒲葵陋不同。何人稱相對。清瘦白鬚翁。」とあり。

釋釋 ◎不消雪 扇を雪にたとふることは、團扇の扇の心にて、上に註せり。◎引秋生手裏 扇を手にとれば、自ら秋の涼しさも、手中にあるが如きをいふ。◎藏月入懷中 團扇は、その色を以て、雪に譬へ、その形を以て、月に譬ふべし。而して、その製は、開閉自由なるが故に、明月の形と見えし扇も、忽ちをさめて、懷中に入るべしといへり。

大意 團扇の事相と、徳用とを稱したるにて、意明かなり。

不期夜漏初分後唯翫秋風未到前輕扇動明月 菅三品

釋釋 ◎夜漏 貞丈雜記十六に「漏刻といふものあり。銅の壺に水を入れて、壺の下に穴ありて、水の滴り漏るやうに作て、其壺の水の中に、箭を立てるなり。其壺を漏壺といひ、其水を漏水といひ、其箭を漏箭といふ。其箭に、刻目を付け置くを漏刻といふ。其刻目の數は、四十八刻むなり。一時の間を、四刻々々に定めたる物なり。此箭を水の中へたておく時、水もりて、水のかさ減るに従て、箭の刻目段々に見ゆるなり。子の時に刻目一つ見ゆるは、子の一つといひ、二つ見ゆるは、子の二つといふ。以下之に準じて知るべし」といへり。さて、夜漏初分とは、日盡きて、夜の初更に入る

大意 月は、夜に入りて、初めて出づれども、是は扇の月なれば、いつと限ることなく、我が思ふ時
翫ぶことを得るのみならず、まことの月は、秋に至りて、始めて賞翫するものなれど、この扇の月
は、秋風のたぬ程、即ち、夏の頃に、はや翫ぶとなり。

天の川河瀬すゝしきたなはたにあふきの風を猶やかさまし。中務

出典 拾遺集秋雜に「天祿四年五月廿一日、圓融院のみかど、一品宮に渡らせ給ひて、亂基とらせ給ひ
ける負業を、七月七日に、かの宮より、内の大盤所に奉られる扇に、はられて侍りけるうすもの
に、をりつけて侍ける」と詞書し、歌仙家集には「七月七日、一品宮の御ごの賭物、頭の中將の奉
る蘆手に」と詞書ありて、二書共に、河瀬を「河べ」に作る。

釋釋 ◎天の川 秋の初めころより、天に小さき星の集りて、河の如く見ゆるをいふ。倭名抄天に「兼
名苑云、一名天漢、今按、又名河漢、一名銀河也、和名、阿、萬乃加八と見ゆ。◎たなばた 秋の部、七夕の
條を看よ。◎猶やかさまし 棚機に物手向くるを、借すといふなり。

大意 二星の相逢ふ七夕は、秋の初なれば、天の川の河の瀬毎に吹く風は、もとより涼しかるべけれ
ど、なほ扇の風を貸して、一しほ涼しからしめんかとなり。

あまの川あふきの風にきりはれて空すみわたるかさゝきの橋。元輔

出典 拾遺集秋雜に見えて、前の歌と同題なり。

釋釋 ◎かさゝきの橋 かさゝきは、鳥の名にして、その形、鳩より小さく、つぐみよりは大きく、
翅に、黒と白との斑文ありて、尾ながし。倭名抄羽族に「本草云、鶴和名加、佐佐木と見ゆ。さて、かさゝき
の橋とは、白氏六帖に「鳥鵲填河成橋而渡織女」といへり。◎空すみ渡る わたるは、橋の縁
語なり。

大意 七夕のころは、秋のならひにて、天の川に、霧が立ちこむるなれど、この扇の風ゆるるに、霧晴
れて、空もよくすみ、鳥鵲の渡すといふ橋も、よく見えて、織女も心易く、それを渡ることならん
となり。

君か手にまかする秋の風なればなひかぬ草もあらしとそ思ふ。中務

出典 中務集類從に「北の宮の、うちに奉り給ふ扇に」と詞書して、四句「なびかぬ草は」に作り、歌
仙家集「なびかぬ色も」に作る。

釋釋 ◎秋の風 上に見ゆる白樂天が白羽扇の詩に「引秋生手裏」といへる意なり。

大意 我が君の御手のまに〜、この扇よりあふがれ出づる風には、なびかぬ草木もなからんと、論
語先進に、「君子之徳風、小人之徳草、草上之風必偃」とあるを本文にて、草木を臣民にたとへて、
帝の御稜威を稱へ申せるなり。

秋

立秋

天の運行の、秋の季節に入る日ないふこと、立春の條に準へて知るべし。

蕭颯涼風與衰鬢。誰教計會一時秋。

立秋日登樂遊園。

出典 白氏文集卷十に見えて、上に、「獨行獨語曲江頭。回馬遲遲上樂遊。」の二句あり。

釋義 蕭颯は、康熙字典に、「寂寥貌」、颯は、「風聲」とありて、秋風の荒涼たる景色なり。◎

計會 春の部、立春の條にいへり。

大意 立秋の節に入りて、遽に涼しく、寂しき風の吹き來るに、恰も吾身も、老境に入りて、鬢髮の衰ふるを覺ゆるにつけて、誰人か數へ合せて、この秋風と、吾が身の老境とを、一時に來らしむるぞと、歎きたるなり。

○樂遊園 長安にあり。功臣鄧子儀の宅せしところ。

鷄漸散間秋色少。鯉常趨處晚聲微。

於管師匠書亭賦一葉。薄庭時詩。保胤。

釋義 鷄漸散間 庭園に集ひ遊べる鷄の、漸く、晚景となるにつれて、時に歸り散する程をいふ。

◎秋色少 立秋の節に入りたるばかりなれば、秋の景色も、未だ深からざるを云ふ。◎鯉常趨處

鯉は、孔子の長子にして、家語卷九本に、「孔子云々、至三十九娶於宋之拜官氏、一歲而生伯魚。魚之生也、魯昭公以鯉魚賜孔子、榮君之賜、故因以名曰鯉、字伯魚、魚年五十、先孔子卒」なり。

とあり。常趨處とは、論語季氏篇に、「陳亢問於伯魚曰、子亦有異聞乎、對曰未也、嘗獨立、鯉趨而過庭、曰學詩乎、對曰未也、不學詩無以言、鯉退而學詩、他日又獨立、鯉趨而過庭、曰學禮乎、對曰未也、不學禮無以立、鯉退而學禮、聞斯二者、陳亢退而喜曰、問一得三、聞詩、聞禮、又聞君子之遠其子也」と見えたる故事によりて、保胤自身が、彼の奮亭に於て、常に、文時卿の教訓を受けたるをいへり。さて、世に、童蒙に、ものを教ふるを、庭訓といふも、この故事より出でたり。◎晚聲微 ゆふべに、木の葉の散る聲が、かすかに聞ゆるなり。

大意 初秋の候、空高く氣澄みたるに、夕日西に眷く頃となれば、群れ居たる雞も、いつか時に歸りて、滿庭寂たる折から、木の葉の一葉二葉散り落つる音も、微かに聞き取らる、閑寂なるさまなり。

○管師匠 菅原文時を云ふ。保胤は、その弟子なること、傳に云へるが如し。この詩は、文時の歿後、その舊宅に於ての作なり。

秋きぬとめにはさやかに見えぬとも風のおとにそおとろかれぬる。 敏行

出典 古今集上秋に、「秋立つ日よめる」と詞書せり。

釋義 ◎さやかに あさやかに、はつきりとの意。

大意 秋が來りしとて、それと、はつきりと、目には見えざれど、木の葉に傳ふ風の音が、俄に變つて聞ゆるにつけて、さては、早や、秋が來りしかと驚かるとなり。

うちつけに物そ悲しき木の葉ちる秋のはしめをけふそと思へは。 能宣
出典 後撰集上秋に、「題しらす、讀人しらす」とあり。

○計會の二字、文集に「同會」に作る。

○結句、新編萬葉集上「おどろかれける」に作る。

○結句、菅原木、兼國木、山崎木「けふと

思へば」に作る。又菅原本一書に、作者、素性とあれど、秋山家集、及び類從本素性法師集になし。

釋 ○うちつけに 卒爾にの意。
大意 秋は、草木悉く凋落して、見るかぎり物悲しく、衰れなる時節なるが、今日は、その秋の初めぞと思へば、さしあたりて、何といふこともなければ、自ら物悲しく思はるゝとなり。

早秋

但喜暑隨三伏去、不知秋送二毛來。早秋答蘇六。

出典 白氏文集卷七に、答蘇六と題し、轉結は、「更無別計相寬慰。故遣陽關勸一盃。」とあり。

釋 ○三伏 夏部、納涼の條を看よ。○二毛 髮の黑白半するをいふ。即ち、白髮まじりなり。禮記に見ゆ。

大意 暑月の過ぎ行くに隨ひて、炎熱の去りし事をのみ喜びて、愁思多き秋の廻り來りて、我が頭髮の白からんとするを願みぬことの、はかなさよとなり。

槐花雨濕新秋地、桐葉風涼欲夜天。早秋。

出典 白氏文集卷二に、秘省後廳と題し、下に「晝日後廳無一事。白頭老監枕書眠。」の二句あり。

大意 上句は、槐樹の花の、地に落ちたるを、初秋の雨の、しめやかに潤したる貌、下句は、桐葉を吹く風の、新涼を催し來る夕暮の心をいひ、如何にも物靜に、閑寂なる風情なり。

炎景剩殘衣尙重、晚涼潛到簞先知。立秋後作。

紀納言。

○漢字、詠解、内閣本、東園本、山崎本、金澤本及び白氏文集、「測」に作り、涼字、文集、「測」に作る。

○原注の立秋の下、後作の二字、寛永本

私註になし。内閣本には、早秋と題す。

釋 ○炎景剩殘 剩は剩餘の義。秋いまだ淺くして、炎暑の殘れるをいふ。○衣尙重 殘暑の候にて、夏の薄衣も、尙重く思ゆるなり。○簞 夏の部、納涼の條にあるを見るべし。

大意 立秋の節に入りて、未だ幾程も經ざる頃なれば、日中は、炎暑の氣、全く去らずして、薄き夏衣も、なほ重く思はるれど、さすがに、夕方になれば、簞の冷かを覺ゆる故、人知れず催し來る秋の涼しさは、その簞が、最も先に知るとなり。

秋たちていくかもあらぬとこのねぬるあさけの風は袂涼しも。安貴王

出典 萬葉集卷八に出で、二句、「幾日毛不有者、」五句、「手本寒母」に作る。拾遺集秋にも出づ。

釋 ○このねぬるあさけ 寢て起きた、この朝けといふ意。あさけは朝明の義。○袂涼しも もは歎辭。

大意 秋立ちて後、いまだ何日も經ざる程なれど、さすがに、秋に入りたるしるしには、眠より覺めし、この明方の風の、袂涼しく思はるゝことよと、季節の變ることの速なるに驚けるなり。

七夕

七月七日の夜をいふ。この夜は、牽牛織女の二星、年毎に相逢ふ夜なれば、花瓜、酒炙、筆、硯、針線をつられ、或は、男兒は詩歌を裁し、女兒は巧藝を呈し、香を焚きて列拜す、之を乞巧筵といふ。荆楚歲時記に「七月七日、爲牽牛、織女聚會之夜、云々、是夕人家婦女、結綵練、穿七孔針、或以金銀鑄石爲針、陳瓜果於庭中、以乞巧、有喜子、網於瓜上、則以爲符應」とあり。又公事根源七月に「夜に入りて、乞巧筵あり。御殿の庭に、机四脚を立て、燈籠九本、おのゝ灯あり。机の上に、色々の物すへたり。等のこと、琴柱を立て、是をおく。机の上、火とり、夜すがら、空燒物あり。盥に水を入れて、大空の星を映す。琴柱に、三の様あり。常は盤しき調、半呂半律、あきの調なり云々」と見えたり。

憶得少年長乞巧。竹竿頭上願絲多。七夕。

釋 ○乞巧 題下に註したるが如く、男女の少年、詩歌を捧げ、文筆の達せんことを祈り、絲竹の藝、紡績の業の巧ならん事を乞ふをいふ。○願絲 五色の絲を、竿の先にかけて、針に絲を通し、棍の葉などをつらぬきて、其の葉に、我が願事を書きて、二星に祈るなり。これも乞巧奠の具にて、其の願の心緒を陳ぶる心なり。

大意 この夕、竹竿の頭上に、願絲の多きを見るにつけて、わが少年の時、行く末かけて乞巧したりしことを憶ひ出したりとなり。

二星適逢、未叙別緒依依之恨。五夜將明、頻驚涼風颯颯之聲。代牛女惜曉更

出典 本朝文粹卷八に、七夕代牛女惜曉更、應製と題して、上に、「夫七月七日、靈匹佳期也、云々、今夕詔詩臣曰、伉儷相親、天人惟一、易離難會、今古所傷、宜代牛女深惜曉更、臣奉給侍、敢獻荷韻、原夫、」次に、この數句ありて、下に「時也、香筵散粉、綵纈飄空、宮人懷私之願、似面不同、墨客乞巧之情、隨分應異、臣有一事、非富非貴、家貧親老、庶不擇官云爾。」とあり。

釋 ○二星適逢 二星は、牽牛と織女をいひ、倭名抄天部に「牽牛、爾雅註云、牽牛一名河鼓和名比古保之織女、兼名苑云、織女和名太婆」とあり。和漢三才圖會天部に「牽牛六星、狀似牛云々、在天河岸頭」と見ゆ。さて、この二星の相嫁ぐといふこと、續齊諧記七夕に「桂陽成武丁有仙道、常在」

○原註に七夕。白。とあれども、朗詠考に「千載佳句七夕、引此有詩云、白、日尾氏云、今本白詩無此詩」と云へり。今案するに、白香山詩前後集、補遺、共に此詩なし。或は我に傳はりて、彼に遺したるものか。又は、別人の詩を、白氏に誤れるものか、未考。

○原註の殘更、佐藤本、臨圃本、私註藤解、曉更に作り、菅原本、情、曉更、代牛女、待夜序に作る。

人間、忽謂其弟曰、七月七日、織女當渡河、諸仙悉還宮、吾向已被召不得停、與爾別矣、弟問曰、織女何事渡河去、當何還、答曰、織女暫詣牽牛、吾復三年當還、明日失武、至今云、織女嫁牽牛」と云へるに出でて、我邦にては、天寶勝寶七年に、この事創れるよし、年中行事秘抄に見えたり。○別緒依依之恨 別緒は別離の心緒をいひ、依々は字彙に「詩有依依其士、箋、依之言愛也」と見えて、互に別れ難き風情に云へり。○五夜 夜の五更をいふ。即ち昔の寅の時、今の午前三時より、五時頃までの間なり。委しくは春部、立春の條にあり。

大意 牽牛、織女の二星、今夕、たま／＼相逢ひて、いまだ依々綿々の情をも述べ盡さるるに、夜は早く明けなんとして、曉風颯々の聲に驚くとなり。

露應別、淚珠空落。雲是殘粧、髻未成。代牛女惜曉更

出典 菅家文章五に、七月七日代牛女惜曉更、各分一字應製と題せり。全詩、「年不再秋一夜五更。料知靈配曉來情。恐結橋思傷鵲翅。嫌催駕欲啞鷄聲。相逢相失間分寸。三十六旬一水程。」

釋 ○珠空落 寬永本私註に引く、白氏六帖に曰く、「鮫人出水中寄宿人家、臨去泣而出珠盈盤、以與主人曰、衆客慷慨以泣珠。また逸異紀に見ゆ。これを思ひて、涙の珠をいへるなるべし。○殘粧 粧飾の、未だ調はざるさまなり。○髻 髮の、うなじの邊に束ねたるをいふ。倭名抄形體に、「唐韻云、髻、和名毛髮也、四聲字苑云、云々、屈髮也」と見ゆ。

○佐藤本、淺草本、臨圃本、寬永本私註に、七の後朝詩、同題、菅三品とあり。

大意 彼の二星は、この曉相分れて、一歳の間、復び相逢ふことなきものなれば、その別離の情を形容するに、折から初秋のことにて、降りおける曉の露は、二星の別離を惜む涙の、珠と落ちたるなるべく、朝の雲の、彼處此處に斷續してたなびけるさまは、織女の物思ひに、身の粧をも整へかねて、髪の本取をも取りあへで、うち亂したるが如しといへるなり。

風從昨夜聲彌怨。露及明朝淚不禁。

代牛女情曉。後江相公。

出典 日本詩紀卷二に「延長中題御屏風詩、從小野道風真跡中得之」と云ひ、七夕代牛女と題し、起承は「獨坐青樓漏漸深。支頤想像曉來心。」と見ゆ。

大意 二星相逢うて、嬉しと思ふ間もなく、悲しき別れをする時なれば、昨夜より、風の音さへたゞならず、哀れに聞えしが、いよ／＼、今朝となつては、別れの涙に堪へずやあるらん、この曉方より、置く白露は、いと繁しとなり。

去衣曳浪霞應濕。行燭浸流月欲消。

七夕含霜渡河。橋詩。曹三品。

釋釋 ◎去衣 七夕、即ち織女の歸り去る時の衣なり。◎曳浪 浪は、天の河のなり。◎行燭 道を行く時に携ふるともし火。

大意 七月八日の明け方、空に霞たな引き、月も將に消え去らんとするを見て、彼の織女は、この曉、牛星に別れて、裳を曳いて歸り行けば、其の衣のしぶきに、空の霞も濕り勝なることならん、また、曉の歸路を照す燭火は、天の河の水に浸れば、その光の爲に、月の影も薄るゝならんとなり。

○怨字、淺草本私註「恨」に作り、原註情曉の下、詠解に更字あり。佐藤本、醍醐本、寛永本私註に、七夕代牛女と題し、菅原本に、延喜御屏風七夕代牛女と題せり。

○原註の待夜、佐藤本、淺草本、醍醐本、寛永私註皆、待秋に作る。又、江談抄卷四に、心字を「意」に作る。

○萬葉集、後撰集、よみ人しらすとありて、二三の句「とほき渡りはなけれど」も、下句「君がふなで」に作る。拾遺集、行成本下句之に同じ。歌仙家集には、二三の句「遠きわたりになけれど」もに作る。

詞託微波雖且遣。心期片月欲爲媒。

代牛女待夜。曹輔昭。

釋釋 ◎微波 小き波、即ちさいなみをいふ。◎片月 半月といふに同じ。半月は、合類大節用集に、「かたわれつき」と訓めり。陰曆七日八日頃の月は、圓ならずして、片破月なり。

大意 七月七日、日の未だ暮れざる間に、牽牛、織女に代りて、相逢ふべき夜の早く來らんことを待ち希ふ心にて、その二星は、日の未だ暮れざる程に、天の川の岸まで來りながら、未だ相逢ふべき時至らざれば、空しく天の川の波に言つけて、互に思ふことを云ひかはしながら、心には、片われ月の出づるを待ちて、之を媒となして、相逢はんことを希ふとなり。

あまの川とほきわたりにあらねとも君かつなては年にこそまで。人丸

出典 萬葉集後撰集拾遺集等に見え、つなでを「ふなで」に作る。従ふべし。

釋釋 ◎つなで 船を引く綱なり。

大意 天の川のわたりは、さして遠しといふ程にはあらざれど、彗星の君が船出は、一年ばかりにて、やう／＼に待ち得ることよと、年の内に、一夜の外相逢ふことなきを歎けるなり。

ひととせにひとよと思へと七夕のあひみる秋のかきりなきかな。其之

出典 拾遺集秋に、「右衛門督源清蔭の家の屏風に」と詞書し、歌仙家集には、「天慶三年閏七月右衛門督殿屏風のれう十五首、七月七日」とありて、何れも、四句「あひ見む秋の」に作る。行成本、尊圓本、山崎本之に同じ。

大意 一年に、たゞ一夜逢ふといへば、はかなき星の契りながら、また思へば、年毎の秋の盡きる限は、その逢瀬に、限なければ、その實、頼もしき中ぞとなり。

年ことにあふとはすれと七夕のぬる夜の數そすくなかりける。野恒

出典 古今集上秋に、「なぬかの日の夜よめる」と詞書せり。
大意 明かなり。

秋興

林間煖酒燒紅葉。石上題詩拂綠苔。題仙遊寺。

出典 白氏文集卷十に「送王十八歸山寄題仙遊寺」と題せり。全詩、「曾於太白峯前住。數到仙遊寺裏來。黑水澄時潭底出。白雲破處洞門開。——。惆悵舊遊無復到。菊花時節羨君廻。この句、普通「林間に酒を煖めて云々、石上に詩を題して云々」と訓めれど、義通せず。

大意 仙遊寺裏に、林間に紅葉を燒きて、酒を暖め、石上に綠苔を拂ひ清めて、即興の詩を書すと云り。

楚思淼茫雲水冷。商聲清脆管絃秋。於黃鶴樓。其題。

出典 白氏文集卷十に、盧侍御與崔評事、爲予於黃鶴樓置宴、宴罷同望と題し、全詩は「江邊黃鶴古時樓。勢置華筵待我遊。——。白花浪濺頭陀寺。紅葉林籠鸚鵡洲。憶是平生未

○森字、行成木、藤園木、山崎木、「妙」に作る。
○原注の鶴字曹原本、鶴に作る。

行處。醉來堪賞解堪愁」とありて、白居易、江州へ左遷せられたる時、途中の作なり。

釋釋 ○楚思 楚囚の思の義にて、他郷にて自由を奪はれ、思郷の情切なるにいふ。左傳九年に「晉侯親於軍府、見鍾儀（楚の伶人）問之曰、南冠而縶者誰也、有司對曰、鄭人所獻楚囚也」とあるに本づく。

○淼茫 康熙字典に「淼音渺、大水也」、また、茫は、「茫々廣大貌」とありて、大江の水の遙に續きて、際涯なき貌なり。○雲水冷 際涯なき水の、雲を浸せるやうなるが、しかも、秋の頃なれば、荒涼に見ゆるなり。○商聲 宮、商、角、徵、羽の五音中、商は方角に當つれば西にて、四季に當つれば秋なり。因つて秋聲を商聲といふ。○清脆 脆は康熙字典に、「脆俗作不堅也」と見ゆ。

秋は氣すみて、清らかなるが上に、萬木皆凋みて、脆く落つるが故に云へり。○管絃秋 黃鶴樓の酒宴に、管絃して遊びたるを云へど、なほ秋聲の、物あはれなる心を籠めたり。

大意 白居易、江州へ左遷せらるゝ途中、黃鶴に樓登りて遙に望めば、わが懷郷の情は、水雲の茫々として、際涯なきが如く、見るかぎり、すぐく物あはれなる景色なれば、崔評事等が、我が爲に、酒宴を設け、管絃をなして、心情を慰むれど、なほ慰め難く、愁思を拂ふに由なしとなり。

○黃鶴樓 唐詩解卷十に、九域志に「鄂州有黃鶴樓、齊諧志に、黃鶴山者仙人于安、乘黃鶴過此」と云へり。又輿地紀勝、臨安府に「黃鶴山黃字記云、在仁和縣東北舊有黃鶴樓」と見ゆ。

大底四時心惣苦。就中腸斷是秋天。暮立。

出典 白氏文集卷十に見えたる七絶にて、起承は、「黄昏獨立佛堂前。滿地槐花滿樹蟬。」とあり。
大意 憂多き身は、四時愁べて、苦慮に満さると云へども、中に就いて、尤も斷腸の思ひあるは、秋の天なりとなり。

物色自堪傷客意。宜將愁字作秋心。
客舍秋情。野相公。

大意 秋は萬物の景色、おのづから、旅にある人の心を傷ましむるものなれば、秋心の二字を合せて、愁字を作るは宜なりとなり。

由來感恩在秋天。多被當時節物牽。
秋日感懷。田邊音。

釋 〇由來 春の部、立春の條下に註したり。〇當時節物 當時は秋の時季をさし、節物とは、季節の景物にして、月の光、風の音、紅葉の色、蟲の音などを云ふ。

大意 次の二句と合せて七絶一篇なれば、次に云へり。

第一傷心何處最。竹風鳴葉月明前。同

大意 由來物毎に、哀を感ずるは、秋の習にて、そのかみより、折節ごとの景物に、心の牽かるゝこと多かりき、殊にたぐひなく、心を傷ましむるは、何れの處ぞといふに、澄み渡れる月前に、秋風の、竹葉をうち戦がしたる景氣なりとなり。

蜀茶漸忘浮花味。楚練新傳擣雪聲。
暑往寒來詩。江相公。一云相規。

釋 〇蜀茶 圓機活法に、「蜀州晉原洞口橫原、珠江、青城、其黃芽雀舌鳥嘴、麥顆、蓋取其二嫩芽一茶之最上也」と見ゆ。〇浮花味 浮花は寛永本私註に、「蜀郡茶草、夏日其花浮水、飲之則散熱、商賈人多慕利」とあれど、本據確ならず。且茶花の開くは冬にして、夏にあらざれば、この説信じ難し。盧同が茶歌に「白花浮光凝碗面。一碗喉吻潤。二碗破孤悶。」と云へば、茶の泡だちて、碗面に浮ぶを、浮花と云へるなるべし。〇楚練 楚の國は、練絹の名所にして、淵鑑類函布帛部に「杜甫詩云越羅與楚練、照曜輿臺軀」とあり。〇擣雪聲 擣は字典に、「音倒、敲也、春也」とありて、秋來れば、絹をうちて、衣を被する用意を爲すに、その絹の色白きが故に、擣雪といへり。
大意 炎熱の頃は、蜀茶を味ひて、苦熱を忘れしが、暑氣の去るに従つて、やうやう、その味を忘れ、今は秋の季節に入りて、家々に、防寒の用意に忙しく、雪の如き練絹をうつ聲が、新に聞ゆると、上句は暑往の意にて、下句に、寒來の意を云へり。

うつらなくいはれの野への秋萩をおもふ人とも見つるけふ哉。
丹後國人

〇考異 この歌、萬葉集八に、「故鄉豐浦寺之尼私房宴歌三首」と題して、初めに、「あすか河ゆきの岡の秋はぎは今日ふる雨に散りかすきなむ。右一首、丹比眞人國人」とあり。次に、「うつらなくふりにしさとのおきはぎはをおもふ人どちあひみつるかも」またこの外に、一首の歌を載せて、「右二首沙彌尼等」とある、この中の歌を變へたものなれば、作者は豐浦寺の尼なり。然るに、この集に、作者丹後國人とあるは、第一首の國人の歌と、尼の歌とを誤り、丹比國人を、また丹後國人と誤れり。歌も萬葉集に見えたるは、彼の廢墟とされる豐浦寺の、物さびしきあとに、あはれに、咲きいでたる秋萩を、心合へる人々と共に、心ゆく限り眺めつるかな、といへるなるに、この本文には、その高市郡なる豐浦寺を、十市郡なる磐余野に改め、

〇原註、佐藤本、醍醐本、寛永本私註、及び菅原本に、客舍秋詞と題し、内閣本、及び日本詩紀に、客舍情と題す。〇原註、菅原本、及び内閣本に、早秋感懷と題す。日本詩紀之に同じ。〇天字、讀本「空」に作る。されど、一先の韻の句なれば、行成本、金澤本、原本、貞享本、淺草本私註、及び詩紀に「秋天」とあるに従ひて改む。

〇原註、金澤本には、相規とのみあり。佐藤本、淺草本、醍醐本、寛永本私註、詩紀及び國字抄には江相公の作とす。又内閣本、菅原本には、高相如と見え、日本詩紀卷二にも同人の作とし、此一聯を引き、擣雪を「擣衣」に作れり。

歌の趣も、秋夜を、我が思ふ人に見たて、その姿を、しみじみながめやりて、自ら心を慰めしこととなりて、本の歌の心と大に違へり。また後のものながら、新拾遺集上には「思しらす」として、歌は、この集に同じ。

釋 ○いはれ野 もと大和國十市郡耳成川の邊りを惣稱せる名なり。今磯城郡に屬す。○うづらなく 鶉は數多く群がりて、草むらの中に入り居りて、その鳴くこゑ哀れに聞ゆれば、この一句にて、磐余野に秋風吹きて、物哀れなるさまを知らせたり。

大意 秋風吹きて、もの哀れに見ゆる磐余野に、露を帯びて咲き出でたる萩の、たをやかに見ゆるにつれて、我が思ふ人の美しき姿を思ひ出でて、しみじみと、その花を見入れたるさまなり。

秋はなほ夕まくれこそた、ならねをきのうは風萩のした露。 義季少將

出典 藤原義孝集に、「秋のゆふくれ」と詞書あり。

釋 ○なほ 俗に、「ヤハリ」といふ意。○たいならね 尋常ならぬ心。○をぎ 東雅并に「萩、ヲギ、本朝國經の如きは、莢は重似葦而小、中實、或云之適、即萩也、至秋堅成云々、さらば、莢と萩とは一物にして、葦とは、別にこれ一物なり」と云へり。

大意 萩のあはれは、朝夕の別なきやうなれど、やはり夕暮を、最も寂しとす、その故は、萩の上葉に風のそよぎ、萩の下葉に露の亂るゝなど、とりあつめて、えもいれぬ風情なればとなり。

秋 晩

相思夕上松臺立 葦思蟬聲滿耳秋 類三十一東亭。白

出典 白氏文集三十一に見えて、轉結の二句は、「惆悵東亭風月好。主人今夜在鄜州。」とあり。

釋 ○相思 白居易が李十一と相思なり。○松臺 松などあるほとりの臺榭なるべし。○葦思 葦は倭名抄部 兼名苑云、蟋蟀一名葦和名木里。と見ゆ。さて、きりくすも、思ふことありて、此の如く、物哀げに鳴くならんといふ意にて、葦思と云へり。

大意 鄜州にある李十一を思うて、その東亭の松臺に上りて立ちて眺むるに、時は已に晚景なれば、葦の人を思ふが如き聲、蟬の悲みを含めるが如き聲が、耳に滿ち、秋のあはれを添へて、おもしろき景色なれど、主人家にあらざれば、獨、悵然として、鄜州の方を望みて、愈、其の人を、なつかしく思ふとなり。

望山幽月猶藏影 听砌飛泉轉倍聲 法輪寺口號 菅三品

釋 ○幽月 月の光いまだ微かなるをいふ。○听砌 听は、正字通に、「俗借爲聽字、省文」とあり。砌は、倭名抄部 居處に「兼名苑云、砌一名階、美岐」と見ゆ。家の軒下をいふ。○飛泉 瀧をいふ。大意 其の山の端を望めば、月は、まだかすかに、影をかくして出でやらず、砌に聴けば、瀧つ水音は、次第に音高く聞ゆとなり。

○法輪寺 山城國葛野郡嵯峨渡月橋の南にして、嵐山の東にあり。本尊虚空藏を祀るが故に、また虚空堂ともいふ。貞觀十六年道昌僧都の建立なり。○口號 口ずさみなり。

小倉山ふもとの野邊の花す、さきはのかに見ゆる秋の夕くれ。 貞之

釋 ○小倉山 山城國葛野郡嵯峨の西にあり。桂川を中にして嵐山と相對し、嵐峽の勝景をなす。

○听字、行成本「聽」とあり。
○原註、菅原本、内閣本に、秋夕口號と題し、淺草本私註に嵯峨法輪寺と題す。
○作者、新古今集に、よみ人しらすとあり。歌仙家集

實之集に見えず。

○花すゝき 薄の穂に出でたるを云ひ、其花を「マバナ」といふ。○ほのか 薄の穂の縁語なり。大意 小倉山の麓の野面になびく、薄の花の白きばかりが、かすかに見ゆる秋の夕暮の風情は、いはん方なしとなり。

秋夜

秋夜長。夜長無眠。天不明。耿耿殘燈背壁影。蕭蕭暗雨打窓聲。上陽人。

出典 白氏文集三に上陽白髮人と題し、上に、「紅顏關老白髮新。綠衣監使守宮門。一閉上陽多少春。玄宗末歲初遷入。入時十六今六十。同時采擇百餘人。零落年深殘此身。憶昔香悲別親族。扶入車中不教哭。皆云入内便承恩。險似芙蓉一何似玉。未容君王得見面。已被楊妃遙側目。妬令潛配上陽宮。一生遂向空房宿。」とあり。下に、「春日遲。日遲獨坐天難暮。宮深百轉愁厭聞。梁燕雙栖老休妬。鶯歸燕去長悄然。春往秋來不記年。唯向深宮望明月。云々」と見ゆ。

○秋々 康熙字典に、「音秋、錢氏曰、耿耿小月云々」とありて、燈光の微なるを云へり。○蕭々 寂寞の貌。○背壁影 壁に反する側に、燭をおきて、中間に身を置けば、影の壁に映るをいふ。○暗雨 暗夜の雨。

大意 上陽人、己に幽處に移されて、一生悲歎に沈める身の、特更、秋の夜長の時節に至れば、終夜眠ること能はず、耿耿たる殘燈に對する時は、壁にうつれる影寂しく、はかなく見ゆる折から

○眼字、文集「塵」に、佐藤本、臨園本等「塵」に作り、又燈字、原本その他「燭」に作る。今文集、及び内閣本、金澤本、阪本、貞享本、行成本によりて改む。又文集、上陽白髮人と題す。佐藤本、菅原本、金澤本等之に同じ。

外面には、物さびしき暗夜の雨の、類に窓を打つ聲、いとあはれに聞ゆるさまなり。

○上陽人 唐の玄宗皇帝、天寶五年より以來、楊貴妃を限りなく寵せられ、後宮の容姿あるものは、皆貴妃に妬まれて、別所に遷されたり。上陽人も其一人にて、十六才の時、天下の美人百餘人と共に遷まれて、後宮に榮りしに、一たびも君王に見らるゝこと能はずして、六十歳まで、上陽宮にありし故に、上陽人と云へり。上陽宮は六宮の一にて、皇城西南の東京にありて、最もさびしき所なり。六宮とは、上陽宮、華清宮、蓮華宮、瑞雲宮、芙蓉宮、連理宮是なり。

遲遲鐘漏初長夜。耿耿星河欲曙天。長恨歌。

○遲々鐘漏 鐘漏とは、宮殿の内に鐘をかけて、時刻の移る毎に、鐘を打ち鳴らすをいひ、遅々たるは、夜の長くして、容易に時の鐘を打つ時刻の移らざるをいふ。唐書禮儀に「夜漏未盡、七刻鐘鳴受賀」ともあり。なほ、夏部、扇の條を看よ。○星河 天の河なり。夏部、扇の條を看よ。

大意 玄宗皇帝、楊貴妃在世の頃は、漏刻の時を告ぐるをも忘れて、ひたすら、夜の長からんことを祈りしに、馬嵬坡下に、玉顏泥に塗れしよりこのかた、深き思に沈みて、夜も眠ること能はず、初めて漏刻の移ることの遅々たるを知り、漸く光かすかなる銀漢のあたりより、曙光の見え初めんとする頃、眠に就かんとすれど、孤衾冷にして、なほ眠り難く、憂愁に沈めるありさまを云へり。

○長恨歌は文集第十二に見えて、長恨歌傳に據るに、元和元年十二月、王質夫が、希代の事は、不世出の文章によりて、世に傳へざれば、遂に消没に歸せんと云ひて、勸むるによりて、白樂天が作りしものにて、ただに其の事蹟を傳ふるのみならず、裏面に、人欲の繼にすべからざる事、歡樂の極むべからざることを隱し、一世の巨作と稱せらるゝものなり。左に録す。なほ楊貴妃の傳は、下の八月十五夜の條にあり。

漢王重色思傾國。御宇多年求不得。楊家有女初長成。美在深閨人未識。天生麗質難自棄。一朝選在君王側。回頭一笑百媚生。六宮粉黛無顏色。春寒賜浴華清池。溫泉水滑洗凝脂。侍兒扶起嬌無力。始是新承恩澤時。雲華花顏金步搖。

○佐藤本、淺草本、臨園本、寛永本私註に、玄宗別貴妃と題せり。

芙蓉帳暖度春宵。春宵苦短日高起。從是君王不早朝。承歡侍宴無間歇。春從春遊花專夜。後宮佳麗三千人。三千寵愛在一身。金屋藏嬌嬌侍夜。玉樓宴罷醉和春。姊妹弟兄皆列土。可憐光彩生門戶。遂令天下父母心。不重生男重生女。驪宮高處入青雲。仙樂風飄處處聞。緩歌謔舞凝絲竹。盡日君王看不足。漁陽擊鼓動地來。驚破霓裳羽衣曲。九重城闕煙塵生。千乘萬騎西南行。翠華搖搖行復止。西出都門百餘里。六軍不發無奈何。宛轉蛾眉馬前死。花鈿委地無人收。翠辇金韋玉搔頭。君王掩面救不得。回首血淚相和流。黃埃散漫風蕭索。雲橫慘淡天無日。天旋地轉迴龍馭。到此躊躇不能去。馬嵬坡下泥土中。不見玉顏空死處。君臣相顧淚沾衣。東望都門信馬歸。歸來池苑皆依舊。太液芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉。對此如何不淚垂。春風桃李花開夜。秋雨梧桐葉落時。西宮南苑多秋草。宮葉飄零紅不掃。梨園弟子白髮新。椒房阿監青娥老。夕殿螢飛思悄然。孤燈挑盡未成眠。遲遲鐘鼓初長夜。耿耿星河欲曙天。羅帶束冷澀華重。翡翠衾寒誰與共。悠悠生死別經年。魂魄不曾來入夢。臨邛道士鴻都客。能以精誠致魂魄。為感君王展轉思。遂教方士殷勤覓。排空馭氣奔如電。升天入地求之遍。上窮碧落下黃泉。兩處茫茫皆不見。忽聞海上有仙山。在虛無縹緲間。樓閣玲瓏五雲起。其中綽約多仙子。中有二人字太真。雪膚花貌參差是。金闕西廂叩玉扉。轉教小玉報雙成。聞道漢家天子使。九華帳裡夢魂驚。攬衣推枕起徘徊。珠箔銀屏逕迤邐。雲霧半偏新睡覺。花冠不整下堂來。風吹仙袂飄飄舉。猶似霓裳羽衣舞。玉容寂寞淚瀟瀟。梨花一枝春帶雨。含情凝睇謝君王。一別音容兩渺茫。昭陽殿裡恩愛絕。蓬萊宮中日月長。回頭下望人寰處。不見長安見塵霧。唯將舊物表深情。鈿合金釵寄將去。銀燭秋光冷畫屏。輕羅小扇撲流螢。天階夜色涼如水。坐看牽牛織女星。相見隨別戀戀重寄詞。詞中有誓兩心知。七月七日長生殿。夜半無人私語時。在天願作比翼鳥。在地願爲連理枝。天長地久有時盡。此恨綿綿無絕期。

○原本、及び
詳解内閣本等
に題缺く。佐
藤本、淺草本、
臨園本、寛永
本私註、及び
菅原本により
く補ふ。

燕子樓中霜月夜秋來只爲一人長

燕子樓
白

出典 白氏文集卷十に見えたる、燕子樓と題する三首中の一首にて、起承の二句は、「滿窓明月滿簾霜。被冷燈殘拂臥牀。」とあり。その小序に、「徐州故尙書張有愛妓、曰燕子、善歌舞、雅多風態、予爲校書郎時、遊徐泗間、張尙書宴予、酒酣出兩々以佐歡、歡甚、予因贈詩云、醉嬌

勝不得。風嬌牡丹花。盡歡而去、邇後絕不相聞、追茲僅一紀矣、昨日、司勳員外郎張仲素續之訪予、因吟新詩、有燕子樓三首、詞甚婉麗、詰其由、爲兩々一作也、續之從事武寧軍累年、頗知兩々始末云、尙書既沒、歸葬東洛、而彭城有張氏舊第、第中有小樓、名燕子、兩々念舊愛而不嫁、居其樓十餘年、幽獨塊然、予今尙在、予愛續之新詠、感彭城舊遊、因同其題、作三絕句、一と見えたり。

大意 兩々、その夫を喪うて、久しく獨棲す、然れば、燕子樓中、霜繁く降りて、月明なる夜、衣衾冷にして、終夜眠ること能はず、秋夜の長きは、我れ一人の爲に長きが如き思を爲すとなり。

蔓草露深人定後終宵雲盡月明前

秋夜詠
祖廟詩
野相公

釋 蔓草 長くはびこれる草なり。◎人定後 人の寢静まりて後の意。◎全詩は、日本詩紀一に見えて、「牀嫌短脚葦聲聞。壁厭空心鼠孔穿。」を轉結とす。即ち下の蟲の條に見ゆ。大意 先人の陵墓に参りて、夜深く人靜なる時、露は、處せきまで生ひ蔓れる草の上に繁く、一點の雲なき秋の夜の空に、月は皓々として、四邊を照らし、自ら感慨を催し、低徊すること能はざる體なり。

○祖廟 莖は、敏達天皇の御子、春日皇子の裔なれど、今祖廟と云へるは、何人を指せるか詳ならず。

兼葭洲裏孤舟夢榆柳營頭萬里心

秋夜雨
紀齊名

釋 兼葭 夏部、葦の條に云へり。◎洲 爾雅釋水に、「水中可居者曰洲、小洲曰渚」とあり。水

中に沙の聚りて、島の如くなれる處をいふ。○榆柳 倭名抄草木部に「爾雅注云、榆之皮色白名粉和名夜」と見え、支那の胡國に多き木なり。

大意 秋の夜の雨には、蘆などの生ひ茂りたる河の洲に、たゞ一つ、舟がかりせる船中の人は、さぞや、浪の枕に、故郷を夢みるならん、また、夷狄の侵來を防がんが爲に、邊塞を固むる軍兵等は、榆柳の茂れる軍營のほとりに、思を萬里の外に馳せて、望郷の念に堪へざるならんとなり。

あし引の山鳥のをのめたりをのなか／＼し夜をひとりかもねむ。人丸

出典 拾遺集戀歌仙家集、柿本集類從等に見ゆ。然れど、萬葉集十に、寄物陳思と題して、詠者不詳の歌なり。

釋 ○あしひきの 山の枕詞なり。山の裾の、長々と曳きはへたるより出でたる語。○しだりを 末垂尾なり。○かも 歎辭。

大意 初句に、「足引の」と打出したるより、「山鳥の尾の」、「しだり尾の」といひて、「なが／＼し夜を」と續けたるは、いかにも限りなく、秋の夜の長さを見ゆ。さて、その長き夜を、思ふ人も語らばで、獨り寂しく寝んとすらんと、歎きたるなり。

むつこともまたつきなくに明にけりいつらは秋の長してふよは。野恒

出典 古今集讀に、「題しらす」とあり。

釋 ○むつごと 思ふとち、心の中を語り交はすをいふ。○いつらは いづくにあるぞの意。○て

○四句、万葉に、長き長花なしと訓あり。

○三句、古今集、わけぬりしに作る。結句、行成本「長し」といふよはしに作る

○原本に題缺く。佐藤本、醍醐本、寛永本私註、菅原本等によりて補ふ。又、澄澄の二字、菅原本、「重葦」に作る。

ふ 「といふ」の約言。

大意 意中の人相逢うて、しめやかに、心の内を語り合はし、實に、秋の夜長も、瞬時の間に思はるゝなるべし、然れば、互の睦言も、いまだ語り盡さるるに、この夜は明けてしまひたることよ、秋の長いといふ夜は、何處にあるぞと、心に頼み思へる秋の夜長も、思の外に、早く明けぬるを咎めたるなり。

八月十五夜 付月

日本歳時記、八月十五日、中秋といふ。秋九十日の最中なる故なり。云々。今宵は秋の最中に、殊に、月を賞する故に、月夕とも三五夕ともいふ。歌人詠客の晴を期する夕なり。林羅山野植に、今夜月を玩ぶ事、大かた李唐より盛にして、詩人文人其詠おほしといへども、古樂府に嫦娥怨の曲あり。漢人の、中秋の月なきによりて、此曲を作るとある時は、漢の世よりもある事にや。又しるこしには、今宵餅を製して、いろいろの狀に作り、月餅と號して、相おくり、又月餅西瓜等を食して、看月會をするよし、月令廣義に見えたり」と見ゆ。

秦甸之一千餘里、凜凜氷鋪、漢家之三十六宮、澄澄粉飾。

長安八月十五夜賦。公乘德

釋 ○秦甸 秦は國名、長安は秦の故地にあり。甸は、説文の段玉裁の注に、「禹貢五百里甸服、周語曰、先王之制邦内甸服、韋注云、邦内謂天子畿内千里之地、商頌曰、邦畿千里、惟民所止、王制曰、千里之内曰甸、京邑在中央、故夏書曰、五百里甸服、則古今同矣、甸王田也、服服其職業也」とあり。天子の都近き畿内の地を云ふ。○凜凜 康熙字典に、「凜音廩、寒也、又淒清也」とあり。○漢家之三十六宮 漢は劉氏の國號にて、謂ゆる前漢をいふ。文選西都賦に、「漢之西都在於雍州、寔曰長安、及至大漢、受命而都之也、云々、封畿之内、厥土千里、卓犖諸夏、兼其所有、云々、西郊則有上畝、禁苑、林麓、菽澤、陂池、連乎蜀漢、繞以周墻、四百餘里、離宮別館、三十六

所、神池靈沼、往々而在、云々」と見えて、清涼、宜温、神仙、長年、金華、玉堂、白虎、麒麟等、三十六の宮殿あるをいふ。◎澄澄 康熙字典に「澄音懲、増韻水靜而清也」とあり。

大意 一輪の明月、長安の空にかゝりて、凜々たる清光、一千里の外まで、水を舖きつめたるが如く、三十六の離宮別殿も、その清光を受けて、壁も蔭も、胡粉を以て塗り飾りたるに似たりとなり。

織錦機中、已辨相思之字、擣衣砧上、俄添怨別之聲。 同

釋 砧 康熙字典に、「砧擣衣石也」と見ゆ。これを邦語に、「きぬた」といふは、「きぬいた」の畧言にて、木、又は石を爰として、衣を擣つをいふ。なほ、下の擣衣の條に詳なり。◎相思之字 晉書列女に、「竇滔妻蘇氏始平人也、名蕙、字若蘭、善屬文、滔符堅時、爲秦州刺史、被徙流沙、蘇氏思之綿綿、爲迴旋文圖詩以贈、滔宛轉循環以讀之。詞甚悽惋、凡八百四十字、文多不錄」とあり。即ち蘇若蘭が、夫を思ふ綿々の情を綴りて、錦に織り込みし、迴文の詩をいふ。◎怨別 離別の怨。

大意 かの長安の明月、天地を照らして明なれば、外征の夫を思うて織り成す廻文錦字の詩も、早く、あざやかに、その相思の文字、を機の上に辨へ知ることを得、衣を擣つ婦女は、月光凄凉たるにつれて、その夫と、久しく相別るゝ怨に堪へざる情を起すにやあらん、砧の音に、俄に哀なる聲を添ふとなり。

三五夜中、新月色、二千里外、故人心。 八月十五日夜、兼中獨直對月憶元九。白

出典 白氏文集卷十に見えたる七律なり。全詩は「銀燄金闕夕沉沉。獨直相思在翰林。」。

渚宮東面煙波冷。洛殿西頭鐘漏深。猶恐清光不同見。江陵卑濕足秋陰。」。

釋 三五夜中 十五日の夜中。◎新月 東方より新にさし出でたる月をいふ。江談抄卷四に、「新月人以為微月初生也、齊信、公任、被相觸、以此詩爲證」と見ゆ。◎二千里外 元稹が在る江陵の地の遙なるをいふ。◎故人 白樂天と元稹とは舊友なるが故にいふ。

大意 八月十五日夜、禁中に宿直して、折からの新月の光に對して、二千里外なる江陵に居る故人の心を思ひやるとなり。

嵩山、表裏千重雪、洛水高低兩顆珠。 八月十五日既月。 白

出典 白氏文集卷十二に、八月十五日夜、同諸客觀月と題せる七律なり。全詩は「月好共傳唯此夜。

境間皆道是東都。清景難逢宜愛惜。白頭相勸強歡娛。誠知亦有來年會。保得晴明強健無。」。

釋 嵩山 清國河南省開封府の西にあり。五岳の中岳なり。白虎通卷下巡狩の條に、「尙書大傳曰、五岳謂岱山、恒山、華山、衡山、嵩山」とあり。◎表裏 山の彼方と、こなたとをいふ。◎千重雪 幾重と、數限りなく積れる雪をいふ。◎洛水高低 洛水は清國河南省にあり。水經に、「出京兆上洛縣」とあり。高低とは、天上と水上とをさす。◎顆 春部、花の條を看よ。

大意 東都即ち洛陽にて、月を見たるさまにて、隈なき月の中天に懸り、嵩山の表裏を照らして、銀光を放てるさまは、恰も千重の雪の降り積れるが如く、またその月光の、洛川に映れるを見れば、空

○千萬里外の下、皆字、文轉、「各」に作り、内閣本、山崎本、意圖本、阪本之に同じ。

の月と、水上の月と、恰も、二個の明玉を懸けたるが如しとなり。

十二廻中、無勝於此夕之好。千萬里外、皆爭於吾家之光。

天高秋月明序紀

出典 本朝文粹八に、八月十五夜、同賦天高秋月明、各分一字、應製採得と題する詩序にして、上に、「八月十五夜者、天之秋、月之望也、更闌人定、雲淨月明」とあり。

釋 〇十二廻 月の十二回轉して、一年となる間なり。

大意 一年十二月の中、今夜ほど、月光の勝れて、面白き夜はあらず、されば、千萬里の外までも、各この月の光を、我が家のものとして、争ひ賞すとすなり。

碧浪金波三五初。秋風計會似空虛。

月影滿秋池詩。菅淳茂

出典 本朝文粹八に、八月十五夜侍亭子院、同賦月影滿秋池、應太上法皇製、菅淳茂とあるは、この時の詩序にて、次の、「瑤池便是尋常號。云々」まで、四聯合せて七律一首なり。

釋 〇金波 月光の波に映じて、燦爛たる光を放つをいふ。〇三五初 十五日の暮れ初むる程をいふ。〇計會 月光の波に映れる光と、秋風と、互に計り會してなり。春部、立春の條にもいへり。

〇一首の大意は、次の結句の下に云へり。

自疑荷葉凝霜早。人道蘆花過雨餘。

同題。同人

釋 〇凝霜早 荷葉に、月光の映じたるを、早くも霜の凝れるかと、驚き思ふなり。

〇過字、行成本「過」に作る。また過字、行成本「過」に作る。非。

〇算字、行成本「算」に作る。

岸白還迷松上鶴。潭融可算藻中魚。

同題。同人

釋 〇潭融 融は、字彙に「和也、明之盛也」とあり。潭の解、春の部、柳の條にいへり。澄みたる池の面に、月光輝きて、底まで見透くをいふ。

瑤池便是尋常號。此夜清明玉不如。

同題。同人

釋 〇瑤池 列仙全傳一に、「西王母云々、居崑崙之圃、閭風之苑、玉樓臺九層、左帶瑤池、右環翠水」とありて、西王母の住める仙宮の池を、賞美して云へる名なり。

大意 初句は、八月十五日の初夜の月光が、池の面に満ちて、碧浪金波を生ずるさまは、恰も秋風と明月と計會して、一點の雲翳なき空虛を現すに似たりと、池上の景色をいひ、胸句は、月光の荷葉を照らして、真白く見ゆるは、いまだ秋の央ばといふ程なるに、早く霜の凝りたるにや、また蘆の葉末の露に、月光のやどりて、白く見ゆるも、蘆花の、雨後に残れるにやあらんと疑はるといひ、腰句は、一轉して、月光の爲に、兩岸皆白ければ、却つて松上の白鶴も尋ねわぶるさまなるに、月光、池心を通じて、藻中の魚をも數へつべきさまなれば、彼の唐土に、瑤の池と云ひて、又なきものと稱美する池も、この景色に比べては、尋常の物にて、この明月の、池上に映れる景色は、眞に、珠玉も如かずとなり。

〇史館考話に云ふ、「菅淳茂八月十五夜、陪亭子院賦月影滿秋池詩、白云々、上皇吟詠數回、歎曰、神也、妙也、恨不使先公見之、先公指菅相也」とあり。

○金字、行成
本「今」に作る
は誤。

金膏一滴秋風露。玉匣三更冷漢雲。

滿月明知鏡。 菅三品

釋 ○金膏 膏は、康熙字典に「膏凝者曰脂」とありて、鏡を磨くかぶらなり、水銀をいふ。○玉匣 匣は康熙字典に、「廣韻箱匣也」と見えて、はこをいふ。玉は美稱。○三更 時を數ふるに、初更より五更にいたること、春の部、立春の條に云へるが如し。三更は、今の夜の十二時前後なり。○冷漢 漢は河漢の漢と同じく、空をいふ。秋は空澄みて、清く冷なるが故にいへり。○大意 滿月の明なること、誠に鏡の如くなるが、此の鏡を磨ける膏は、即ち秋風に滴り落つる露にして、この鏡の匣は、夜深き空にたなびく雲なりとなり。

楊貴妃歸唐帝思。李夫人去漢皇情。

對雨戀月。 源順

釋 ○楊貴妃歸 新唐書后妃に、「玄宗貴妃楊氏、云々、幼孤、養叔父家、始爲壽王妃、開元二十四年、武惠妃薨、後延無當帝意者、或言、妃資質天挺、宜充掖廷、遂召內、禁中異之、云々、天寶初進冊貴妃、云々、初安祿山有邊功、帝寵之、云々、祿山反、以誅國忠爲名、且指言妃及諸嬖罪、云々、及西幸至馬嵬、陳玄禮等、以天下計誅國忠、已死軍不解、帝遣力士問故、曰、本尙在、帝不得己、與妃訣引而去、經路祠下、裏尸以紫茵、瘞道側、年三十八、帝至自蜀、道過其所、使祭之、云々、密遣中使者、具棺槨它葬焉、啓瘞故香囊猶在中、人以獻、帝視之悽感流涕、命工貌妃於別殿、朝夕往必爲饌款云々」とあり。なほ上に云へる長恨歌をも參照すべし。歸は、下の去と同じく、死するをいふ。○唐帝思 玄宗皇帝の、楊貴妃を慕

ひたる情思にて、長恨歌に歌へるが如し。○李夫人去 李夫人は漢書外戚に、「孝武李夫人、本以倡進、云々、延年有女弟、上乃召見之、實妙麗善舞、由是得幸生一男、是爲昌邑哀王、李夫人少而蚤卒、上憐憫焉、圖畫其形於甘泉宮、云々、初李夫人病篤、上自臨候之、夫人蒙被謝曰、妾久寢病形貌毀壞、不可見帝、願以王及兄弟爲託云々、及夫人卒、上以禮葬焉、云々、上思念李夫人不已、方士齊人少翁言、能致其神、迺夜張燈燭、設帷帳、陳酒肉而上、令上居他帳遙望見、好女如李夫人之貌、還幄坐而步、又不得就視、上愈益相思悲感、爲作詩曰、是邪非邪、立而望之、偏何姍姍其來遲、令樂府諸音家絃歌之、上文自爲作賦、以傷悼夫人云々」とあるが如し。

大意 此の全篇、類聚句題抄に見えて、起承は「雲稠尙望清光透。水暗難忘素影生。」とあり。其の大意は、題の「對雨戀月」といふ意を、楊貴妃と、李夫人との故事によせて、彼の玄宗及び武帝が、寵妃を失うて、戀々の情に堪へざりしは、誠に悲哀の極なりしが、今宵、わが雨に對して、月の光を戀ふるも、それに異ならずとの意なり。

○史館舊話に曰く、「源順曾得一聯曰、楊貴妃歸云々、乃欲足成之、未得其題、數年之後、八月十五夜、陪其平親王于六條宮、賦對雨戀月詩、作律詩、以被句爲頸聯、翌日都下傳誦曰、願得引題之妙、願聞而吟曰、是腹葉也」と見ゆ。

水のおもにてる月なみを數ふればこよひそ秋のものなかなりける。 順

出典 拾遺集秋に、「屏風に、八月十五夜、池ある家に、人あそびしたる所」と詞書せり。

釋 ○月なみ 月次の義。あとの月、この月、又そのさきの月とやうに、次々に、月のならぶをい

ひて、月の光の映れる波といふことを通したり。◎もなか 大陰曆の七八九月は秋の節なるが故に、八月は秋の仲月にて、十五日は又その中間なれば、真に秋の最中なり。大意 常よりは殊にさやかに、月の光の、水の面に輝けるを見るにつけて、月次を数ふれば、實に今宵は、八月の十五夜にして、秋の真中なりけるよ、さては、月の光の尋常ならぬも、道理なりとなり。

月

誰人隴外久征戍。何處庭前新別離。白 秋月。

○戌字、讀本、「或」に作る、文集及び、行成本によりて改む。

出典 白氏文集卷十に見ゆ。全詩「萬里清光不可思。添愁益恨遠天涯。——。失寵故

姬婦院夜。没蕃老將上樓時。照他幾許人傷斷。玉兔銀蟾遠不知。」

釋 隴外 今の清國陝西省鳳翔府隴州治。漢書地理に「隴西郡、註に、應劭曰有隴坻、在其西也、師古曰、隴坻曰隴阪、即今之隴山也、此郡在隴之西、故曰隴西」と見ゆ。即ち支那の本國と、胡國との境にして、此處に城を構へて、胡人の侵略に備ふ。その外部を隴外といふ。

大意 月は、多く、憂愁を添ふるものなるに、如何なる人か、隴外萬里の地に、久しく征戍して、この月に對して、故郷を思ふらん、又如何なる處にか、庭前に、今宵別を惜みて、この月に袖を絞るらんとなり。

秋水漲來船去速。夜雲收盡月行遲。白 汴水東歸即事。

○作者、行成本、野原邸とあり。臨瀛本は、野原、或白氏とあり。

然れど、白香山集、この詩所見無し。

釋 月行遲 天に雲ある時は、月の運行の標點となれども、天明に、雲收り盡したる空は、いつも同じ處にあるが如く見ゆるをいふ。大意 明かなり。

不醉黔中爭去得。磨圍山月正蒼蒼。白 送蕭處士遊黔中。

出典 白氏文集卷十に見えたる七律にして起聯は、「能文好飲老蕭郎。身侶浮雲髮似霜」とあり。承聯は「生計拋來詩是業。家園忘却酒爲鄉」にして、本集雜部、酒條に見ゆ。次に、轉聯は「江從巴峽初成字。猿過巫陽始斷腸。」とありて、また雜部、猿條に見ゆ。尾聯は、即ち、この二句なり。

釋 黔中 輿地紀勝卷七十五に「黔中故城、元和郡縣志云、秦、在沅陵縣西三里」と見ゆ。◎蒼蒼 康熙字典に「臨川註蒼深青色」とあり。月光の清く、すさまじき氣色をいふ。

大意 今蕭處士の、黔中の地に遊ばんとするに、彼地は、巴峽の流も、始めて巴字を爲す處といひ、また巫陽の猿聲の物あはれなるなど、何れか、詩人を感傷せしむる景趣ならざらん、されば、處士も、大に酔うてあらずば、その地を去ること能はざるべし、その折から、麻圍山の月光は、蒼々として、愈、遊客の心を傷しむるならんとなり。

○古今著聞集卷四に「天曆の御時、朝綱、文時に仰せて、文集第一の詩選びて奉るべきよし、勅定ありければ、送蕭處士遊黔中云々、この四韻を、ともに選び奉りたりけり。一句優れたるは多けれど、四句體ことなるによりて、有難きことなや。兩人同心のほど、興ある事也」と見えたり。

○唐字、諺解、集註等「麻」に、内閣本、山崎本、阪本、真字本、「摩」に作り、去得の二字、菅原本、「得去」に作る。又淺草本、寛永本私註、及び内閣本に、尋「黔南蕭處士不達時」と題せり。

天山不辨何年雪合浦應迷舊日珠

禁庭詠月。三統理平

釋 ○天山 今の清國新疆省内の天山なり。初學記に、「天山在隴右道伊川内」と見え、後漢書班超に、「西域有白山、通歲有雪、匈奴謂天山」とあり。○合浦 今の廣東廉州府合浦縣なり。○舊日珠 後漢書孟嘗に、「孟嘗字伯周、會稽上虞人也、略遷合浦大守、郡不產穀實、而海出珠寶、與交趾比境、常通商販、貿糴糧食、先時宰守並多貪穢、詭人探求、不知紀極、珠遂漸徙於交趾郡界、於是行旅不至、人物無資、貧者死餓於道、嘗到官革易前弊、求民病刑、人所稱善、及會末踰歲、去珠復還、百姓皆反其業、商貨流通、稱爲神明、云々」とある故事にて、舊日珠とは、昔貧吏の在りし時、交趾の境に去りし珠玉をいふ。

大意 禁中の月は、光殊にして、雪の如く珠の如くなれば、流石の天山にても、遂にかやうの淨き雪は降らざれば、何れの年の雪ぞと辨へ難く、又合浦にては、昔去りしことある珠に紛れて、いづれをそれとも見分ち難からんとなり。

欲和豐嶺鐘聲否其奈華亭鶴警何

夜月似秋霜。前中書王

釋 ○豐嶺鐘聲 山海經卷五經訓に「又東南三百里、曰豐山、浼曰、山在今河南南陽府治東北元和郡縣志云、有九鐘焉、是知霜鳴、霜降則鐘鳴、故言知也、物」とあり。○華亭鶴警 列仙全傳卷二に「丁令威本遼東人、學道於靈虛山、後化鶴歸、集華表而吟曰、有鳥有鳥丁令威。去家千年今來歸。城郭如故人民非。何不學仙塚棠々。」とあり。又寬永本私註に引く百詠註に、「千年鶴、霜降則飲聲不鳴、故

○原注の夜月、内閣本、月夜に作り、秋霜の下、佐藤本、淺草本私註に、詩字あり。

曰警」とあり。

大意 月光、地に敷きて、霜の降るに似たるは、彼の豐嶺の九鐘をして、その鳴を發せしめんとするにや、されど、彼の華亭千年の鶴は、却つて警めて、その聲を發せざるを如何にせんとなり。

鄉淚數行征戍客棹歌一曲釣漁翁

山川千里月。保胤

釋 ○鄉淚 古郷を戀ふる涙。○數行 涙の、繁くつらなりながら、貌。○棹歌 舟歌なり。大意 月、山川千里の間に亘りて明なれば、遠く故郷を離れて、胡塞を守る人は、望郷の涙留め難く、又孤舟に棹さす漁翁は、漁歌の一節を誦へりと、同一の月に向ひても、處を殊にし境を殊にする時は、悲歡その情を別つ趣を云へり。

あまのはらふりさけ見れば春日なるみかさの山に出てし月かも。仲滿

出典 古今集卷三に、「もろこしにて、月を見てよみける」と詞書せり。

釋 ○あまのはら 大そらのことなり。原とは、何處にても、廣く平にて、目に遮るものなき所をいふ。○ふりさけ ぶり仰ぎて遠くを見る意。○春日なる三笠山 春日は倭名抄國郡に、「大和國添上郡春日郷」とある地にして、今の奈良市是なり。元明天皇より桓武天皇に至る、八代八十餘年間の都なり。三笠山は、春日山の一峯にて、又若草山とも云ひ、その北に手向山あり。こゝには、春日の里にある三笠山といふ意なり。

大意 この歌は、安倍仲麿が、日本へ歸らんとして、明州の津に舟がかりせし時、詠めるものなるこ

○土佐日記、初句「あなうなばら」に作り、四句、藤本木「みかさの山を」に作る。

と、土佐日記の文の如し。意は、萬里の外まで澄み渡りたる月をふり仰ぎ見れば、昔日、わが故國なる奈良の都の三笠山にて見なれし月と、少しも異ならぬに、今のこの月も、やはり、故郷の春日の三笠山よりいでし月なるかと、故郷をなつかしみたるなり。

しら雲にはねうちかはし飛雁のかすさへ見ゆるあきのよの月。 躬恒

出典 古今集上巻に、「題しらす、よみ人しらす」とあり。

釋 〇しら雲にはねうちかはし、古今集の古き註ともに、「雲井遙に飛ぶ雁が、その羽を、白雲と重ねて見ゆる」意に釋けるを、横井千秋は、雁と雁とが、その羽を打ちかはすなりといひ、香川景樹は、白雲は、たゞ空のことなりといへり。

大意 月明にして、風の音も常ならぬ秋の夜半、雲井遙に打ち見やれば、白雲の居るあなたの空に、羽うち重ねて鳴き行く雁の姿も、ありくと見えて、一つ二つと、その数さへ數へらるゝとなり。

よにふれは物思ふとしはなけれども月に幾度なかめしつらむ。 後中書王

出典 拾遺集上巻に、「月を見侍て、中務卿具平親王」と詞書せり。

釋 〇物思ふとしも、しは、物を、これと取り出でて、強く云はん爲の助辭。もは歎辭なり。〇ながめ、心に思ふことありて、つくづく、その物に見はるゝをいふ。

大意 世にあればとて、必ず物思ふと定りたるにはあらず、即ち手が如きは、物思なき身なれど、限なき月の影ゆるには、料らず、感慨の情を催して、幾度、秋の夜長をながめ明したることならんとなり。

〇作者、躬恒とあれど、その家集に見えず。古今集は、よみ人知らずとあり。新撰萬葉集、及古今集願昭本には、結句、「かげさへ見ゆる秋の月かな」とあり。行成本も「影さへ」とあり。〇二句、拾遺集に「世にふるにもおもふとしも」に作る。

なり。

九月九日 付菊

續齊諧記に、「九日登高、汝南桓景、隨費長房遊學累年、長房謂曰、九月九日、汝家中當有災、宜急去、令家人各作絳囊盛茱萸以繫臂、登高飲菊花酒、此禍可除、果如其言、齊家登山、夕還。見雞犬、牛羊一時暴死、長房問之曰、此可代也、今世九日、登高飲酒、婦人帶茱萸囊、並始於此」とあり。

燕知社日 辭巢去 菊爲重陽 冒雨開

秋日東郊作。鳥南丹

出典 三體詩七言に見ゆ。全詩「閑看秋水心無事。臥對寒松手自栽。塵嶽高僧留偈別。茅山道士寄書來。」。淺薄將何稱獻納。臨岐終日自徘徊。

釋 〇社日 白虎通上卷社稷の條に、「王者所必有社稷何、爲天下求福報功、人非土不立、非穀不食、土地廣博不可徧敬也、五穀衆多不可一一而祭也、故封土立社、示有土尊」と見え、日本歲時記二「もろこしには、社日とて春秋に二度、土の神を祭る事あり。土はよく萬物を養ひ、五穀を生ず、故に祭る。春は農事の下からん事を祈り、秋はその恩徳を報する意となん。その日は立春の後、第五の戌の日を春社とし、立秋の後、第五の戌の日を秋社とす。十千の中戌日は土なり。故に春秋と云へり。とも戊の日に用るとぞ。」〇重陽 公事根源九月に「九月九日は、節日にて侍れば、菊花の宴行はるゝなり。是を重陽宴と申す。九月九日は、月と日と、九陽の數に叶ふが故に、重陽とはいふ也」と云へり。

大意 燕は温暖を好む鳥なれば、春の社日の頃來りて、巢を構へて棲めども、秋の社日に至れば、寒冷を恐れて退去すると共に、菊は重陽の佳節に會はんとして、雨を冒して咲き初むるを見るに、その一進一退、よく節にあたりて、毫も誤ることなしとなり。

〇行成本、佐藤本、淺草本、寛永本私註、金澤本作者手摺に作り、内閣本、保胤の作と爲す。

探故事於漢武則赤黃插宮人之衣尋舊跡於魏文亦黃花助彭祖之術

出典 本朝文粹卷十一、九日侍宴、親賜群臣菊花、應製と題して、上に、「臣聞、季秋初九者、日月並應、陽數相并之候也、時節如舊、星霜斯新、往古來今、良譚嘉會、莫不籍野而曠其遊、登山以遠其望、即謂之避惡、亦宜於延年、况亦探故事於漢武云々、今之觀古、不其然乎、云々」とあり。

釋 探故事於漢武 故事は、先代の遺事といはんが如し。淵鑑類函部に引く西京雜記に曰く、「漢武帝宮人賈佩蘭、九月九日佩茱萸、食蓬餌、飲菊花酒、云令人長壽、相傳自古莫不知其由、本此の文無」と見ゆ。○赤萸 茱萸、又胡頹子に作る。「ぐみ」といふものなり。西京雜記に「九月九日佩茱萸、食蓬餌、飲菊花酒、令人長壽、菊華舒時、并採莖葉、雜黍米釀之、至來年九月九日始熟、就飲焉、故謂之菊花酒」と云へり。○尋舊跡於魏文 淵鑑類函部に云ふ、「魏文帝與鍾繇書曰、歲往月來、忽復九月九日、九爲陽數、而日月並應、俗嘉其名、以爲宜於長久、故以享宴高會、是月律中無射、言群木庶草無有射而生、至於芳菊、紛然獨榮、非夫合乾坤之純和、體芬芳之淑氣、孰能如此、故屈平悲冉冉之將老、思餐秋菊之落英、輔體延年、莫斯之貴、謹奉一束、以助彭祖之術」と云へり。○黃花 黃菊の花なり。○彭祖之術 列仙全傳一にいふ、「彭祖錢鏗、帝顓頊玄孫也、至殷之末世、年已七百餘歲而不衰、好恬靜、惟以養

○等字、藤園本、山崎本、「漢」に作る。藤園本、山崎本に作る。

神治生爲事、穆王聞之以爲大夫、稱疾不與政事、善於補導之術、並服水晶、雲母粉、鹿角、常有少容」と見ゆ。

大意 今日、重陽の宴に、群臣に、菊花を賜ふ故事を尋ぬるに、漢の武帝の時、宮人の、赤萸を衣に挿みて、邪氣を拂ひ、魏の文帝の、菊花を鍾繇に賜ひしが如く、この花を酒に和して、彼の彭祖が長壽を得んことを希ひさせ給ふ、厚き御仁心なるべしとなり。

先三遲兮吹其花、如曉星之轉河漢、引十分兮蕩其彩、疑秋雪之迴洛川。

出典 本朝文粹に出で、上に引ける「不其然乎」の次に、「聖上之取天下也、德高遠古、化叶休明、擊土承凱樂之風、生民荷仁壽之賜、於是在此令節、縱以宴遊、便賜禁園之菊花、以和仙厨之竹葉、思深於一束、歎洽於群臣、先三遲云々」とあり。

釋 三遲 宴席に遲参したるものに對し、罰杯を負することにて、江談抄、玄惠の朗詠抄、塵添塔囊抄等に、數説あれど、皆適切ならず。西宮記臨時に、後到と題し、「五巡後到着者三盃、七巡後到着者五盃、十巡以上到着者七盃、一遲不得通風、二遲酒間架勻、三遲修之云々」と見ゆるを正しとす。即ち酒の巡ること五回の後に到れるものには三盃、七回の後のものには五盃、十回以後のものには七盃の罰酒を飲まするをいふ。○引十分 酒を杯に満たす意にて、引満などいふに同じ。されば、菅原本に、「ひかへて」と訓めるに従へり。○蕩其彩 滿を引いて、盃中の花を動すなり。○洛川 上の八月十五夜の條に見ゆ。

大意 彼の菊花酒を、盃に注ぎたるまゝ、その花を吹き、或は濁す時は、白菊の盃中に廻るは、曉星の、空に轉するが如く、秋雪の、洛川のほとりに舞ふが如しとなり。

谷水洗花、汲下流而得上壽者三十餘家。地脉和味、食日精而駐年顏者五百箇歲。同

出典 この一節も、上文の次に、「芬芳染唇、然後知中腸之已飽、氣力補性、然後期天年之難終、凡菊之爲功、其驗大矣、賦屬於百藥之首、誇張五穀之精、食落英者養其生、飲滋液者却其老、故谷水云々」とあり。

釋 ○谷水洗花云々 抱朴子抱朴子集注に、「南陽鄧縣山中有甘谷水、所以甘者、谷上左右皆生甘菊、菊花墮其中、歷世彌久、水味爲變、居民皆不穿井、悉食甘谷水、食者無不長壽、高者百四五十歲、下者不失八九十、無天年人得此菊力也、故司空王暢、太尉劉寬、太傅袁隗、皆爲南陽太守、每到官、常使鄧縣月送甘谷水四十斛以爲飲食、云々、僊方所謂、日精、更生、周盈、皆一菊而根、莖、花、實、異名、其說美而、近來服之者略無効、正由不得真菊也、云々」とあり。○上壽 集注に、「上壽とは百二十歳を云なり。中壽は八十歳也。下壽は四十歳をいふ」といへり。○地脈和味 抱朴子抱朴子金丹に、「劉生丹法用菊花汁、地精汁、柯汁、和丹蒸之三十日、研合服一年、得五百歲齡、老翁服更少不可議、少年服亦不老」とあり。○日精 倭名抄倭名抄草木菊の條に、日精草也とあり。又上に引く抱朴子にも見ゆ。○駐年顏 年の積ると共に、顔色の衰ふる

を駐めて、いつまでも若やかなる顔色容貌ならしむるをいふ。

大意 彼の鄧縣の人民は、甘谷の水を呑みて、百歳の壽を得たるもの、二十餘家に及び、劉生は、日精を食うて、五百歳の壽を保つことを得たる、皆是菊花の徳なり、故に今日、重陽の佳節に、この花を酒に和して用ゐるに、何ぞその奇特なからんとなり。

○行成木、作者中務とあり

わかやとの菊のしら露けふことにくよ積りて淵となるらむ。元輔

出典 拾遺集拾遺集秋に、「三條の宮の裳着侍る屏風に、九月九日の所」と詞書したり。

大意 前條に云へる菊花の故事を承けて、わが宿の菊の露は、この重陽の節毎に、いく代の間積り重りて、遂には、かの甘谷の水のごとく、淵となることならんといひて、裏には、今日この姫君は、始めて、裳着の祝をせらるることなるが、是より後も、幾千代かけて、益す、健かにあらせられて、遂には仙宮の人の如く、百歳の長壽を得給ふならんとなり。

菊

霜蓬老鬢三分白、露菊新花一半黃。九月八日朝皇雨。十見。白

○老字、文集「舊」に作る。

出典 白氏文集白氏文集十四に見ゆ。全詩「君方對酒綴詩章。我正持齋坐道場。處處追遊雖不去。時時吟詠亦無妨。惆悵東離不同醉。陶家明日是重陽。」

釋 ○霜蓬老鬢 老人の鬢髪を、霜がれの蓬にたとへたるなり。蓬は「詩の集傳に、其華柳絮の如くにして、聚而飛如亂髮」といふもの、即此也」と、東雅に云へるが如し。○三分白 十中の三は、

白くなれるをいふ。◎露菊新花 露をおびて新に咲きたる菊花をいふ。◎一半黄 黄菊の花、盡くは開かねど、半分だけは咲きたりとなり。九月九日は、黄花の節句なれども、八日なればかくいへり。

大意 明かなり。
不是花中偏愛菊。此花開後更無花。十日菊花。元稹。

出典 全唐詩十六に、菊花と題し、起承二句は「秋叢繞合似陶家。遍繞籬邊日漸斜。」とありて、開後を「開盡」に作る。

大意 明かなり。

嵐陰欲暮契松柏之後凋。秋景早移嘲芝蘭之先敗。紀 駱賓王。

釋 嵐陰 嵐は、我邦にいふ「もや」のことにて、康熙字典に、「山氣蒸潤也」とあり。陰は、くもりなり。さて嵐氣は、秋晴に能く起るものなれば、嵐陰と云ひて、下の秋景と相對したるなり。

◎松柏之後凋 論語子に、「子曰、歲寒然後、知松柏之後凋也」とあり。◎秋景 秋の日影なり。◎芝蘭 芝は説文に「神草也」、本草の註に「芝爲瑞草、服之神仙」。また、孔子家語四に、「與善人居、如入芝蘭之室、久而不聞其香、與之化矣」と見ゆ。

大意 秋已に暮れんとして、萬木凋落する中に、ひとり菊花のみは、松柏と共に、諸木の後に凋まんと、菊花の長く榮ゆることを賞美せるなり。

○行成木、作者相公と書けり。

鄺縣村閭皆潤屋。陶家兒子不垂堂。菊故一叢金。三善清行。

釋 ◎鄺縣村閭 鄺縣は南陽の鄺縣にして、上に見えたり。閭は説文に、「里門」とあれど、こゝは村閭にて、村落といはむが如し。◎潤屋 富人の家なり。禮記大學に、「曾子曰云々、富潤屋、德潤身云々」と見ゆ。◎陶家兒子 陶家は、陶淵明をいふ。此の人、東籬に、多く菊を植ゑて愛せしこと、人の知るところなり。而して、この人に、五子ありて、古文眞寶前集上責子詩明に、「雖有五男兒。總不好紙筆。」とありて、註に「淵明有五子五人、長曰舒、次曰宣、三曰雍、四曰端、五曰通」と云へり。◎不垂堂 文選十三に、「家累千金、坐不垂堂云々」とありて、垂堂とは、堂屋の端を云へば、富貴の者は、危を避けて、家の端近に出でざるをいふ。

大意 黄菊の、叢を爲して咲き亂れたるを、黄金を散じたるに譬へて、彼の鄺縣は、もと菊の多き所ゆゑ、一村悉く富み榮えて、貧きものなからん、また、菊花を愛賞して、多く東籬に栽ゑたりといふ陶潜が家には、萬金の富を累ねたれば、其の子弟は、深く屋内に坐して、家の軒近に出でて、危きに近よるが如き所業はせざるならんとなり。

○江表抄四に、「昔相公初作鄺縣村閭皆富貴云々、心存可有垂堂之由、而管家、只美紀納言廉士路畫句、不被感此詩、豈能退出時、相公不散辭結於建春門、見尋管家、仰云、富貴字恨不作潤屋、相公乃改作、云々」とあり。

蘭苑自慙爲俗骨。槿籬不信有長生。菊是草中仙。保胤。

釋 ◎蘭苑 苑は、周禮官の園人の疏に「古謂之園、漢謂之苑」と云へり。即ち蘭の園をいふ。

◎俗骨 世の常の風俗骨がらの義。◎極 俗に「ムクゲ」といふ。多く籬に栽ゑて、その花は、朝に開きて、暮に萎むものなり。下の極の條に詳なり。

大意 菊を草中の仙者と爲す意なれば、彼の蘭は、古來、草中の名花と爲す所なれど、その花久しからず、又、極は、菊と共に、籬に植うるものなれど、その花は、朝に開きて、夕に萎む程なれば、菊の風霜に逢ひて、久しくその色を變へざるに比して、一は、自ら、尋常普通のものなるを慙ぢ、一は、世に菊花の如き長生の花あることを信せざるならんとなり。

蘭蕙苑嵐摧紫後蓬萊洞月照霜中。

花寒菊點露。蓬三品。

出典 全詩、江談抄卷四に、「蘭蕙苑嵐摧紫後。蓬萊洞月照霜中。香依德暖爐烟散、影摧思深口砌融」とあり。

釋 ◎蘭蕙 爾雅翼に、「一幹一花而、香有餘者蘭、一幹數花而香不足者蕙」と見ゆ。◎摧紫 蘭蕙の花は、其の色、何れも紫(古代の)なり。◎蓬萊洞 仙宮をいふ。菊は仙宮にありて、長生不老の徳ありといふこと、前條に云へるが如し。

大意 題に花寒云々とあるより、上句に花の意を、下句に寒の意を點出したり。その大意は、蘭蕙の花、早く秋氣の爲に摧かれて、見る影も無くなりたる後、寒氣ますます加りて、月は霜を照らす中に、菊はひとり、その色香を失はで、處々に咲き残りたりとなり。蓬萊の二字を用ひて、頌の義をいたせり。

○十訓抄七に「文時卿、菊是草中仙と云題を給て、作さざりければ、衣を引かづき寝たりけるに、保胤來て、今度如何と云ければ、不及力、不得の度なればと答けるに、彼草案を見ければ、蘭蕙苑嵐摧紫後、蓬萊洞月照霜中と云詩あり、是已に秀句也、何歎給べきと云問、三品此詩を出す所に、世以秀逸とす。自作の事、いみじき人も計ひえぬなり。かやうの事、最可思慮歎」とあり。

ひさかたの雲の上にて見るさくはあまつ星とそあやまたれける。 敏行

出典 古今集下秋に、「寛平御時、菊の花をよませ給うける」と詞書して、左註に「此歌は、また殿上許されざりける時に、めしあげられて、仕うまつるとなん」とあり。

釋 ◎ひさかた 瓢形の約にて、天はまろく、うつろなれば、その形によりて、天の枕詞に用ひたりといひ、又、日刺方の約にて、日のさす天とかけたるなりともいふ。さて、あめにいひかけたるより、後には、すべて、空の物にいふ枕詞となりて、こゝは、雲の枕詞に用ひたり。◎雲の上 禁中をいふ。

大意 凡人の來通ふべからざる禁中の御庭に、白菊の此處かしこに咲き亂れたるは、恰も大空に、無数の星の輝けるが如く、是を眺むる吾々も、この世の外の雲の上に上れる心ちするとなり。古今集の左註は、たいこの歌を、特に興がらしめんとて、後人のさかしらせしなるべし。その故は、作者敏行は、この歌を作れる寛平の時に先ちて、光孝天皇の仁和二年十一月に、廢人に補せられて、夙く昇殿を許されたること、古今集目錄、三十六人歌仙傳に見えたればなり。

心あてにをらはやをらむ初霜のおきまとはせるしらさくの花。 朝恒
出典 古今集下秋に「白菊の花をよめる」と詞書せり。

釋 ○心あて 推量の義。○をらばやをらむ をらば折られもせうかとなり。○おさまとはせる 置くは、霜の降れるをいひて、その霜の、白菊の色にまがふなり。

大意 白菊の咲きたる上に、初霜の置きたるを、霜をいまだ見馴れねば、花が霜か、いづれとも見わけ難けれど、若し強ひて、是を花と推量して、折らば折られもせうかとなり。

九月盡

大陰曆にては、七八九月の三月を秋とするが故に、九月晦日に、秋の己に盡きて、この季節に別るゝことな惜むなり。

縦以^ヒ靖^シ函^ヲ爲^ス固^ク難^ク留^ム蕭瑟^ヲ於^テ雲衢^ニ縱^ニ令^シ孟賁^ヲ而^{シテ}追^ハ何^レ遮^ル爽籟^ヲ於^テ風境^ニ

山寺惜秋序

出典 本朝文粹卷八に、「九月盡日、於佛性院「惜秋」と題し、菅原本之に同じ。さて上に、「佛性院者、蓋藤納言、擇勝地、發私願、所建立也。云云、主客納言相談曰、今日非九月盡、雖誠玉燭寶典金谷園記、不載其文、不傳其美、然猶清風朗月之興、潘子宋生之詞、盡於今宵矣、何不^レ相惜哉。武衛、尙書兩源相公、然諾其言、吟詠其意。即命滿座、獻惜秋詞。僕竊以、秋者天時也。惜者人事也」と見え、下に、「豈如惜半日之殘暉、期千秋之後會云爾」とあり。

釋 ○靖函 文選^{西京}に「漢氏初都、在渭之涘、秦里其朔、寔爲咸陽、左在嶓冢、桃林之塞、西有隴關、東有函谷關」とあり。○蕭瑟 楚辭に、「蕭瑟兮草木搖落」とありて、秋風の蕭條寂寥たるさまをいふ。○雲衢 雲路と云はんが如し。○孟賁 說苑に「勇士孟賁、水行不避蛟龍、陸行不避狼虎」と見ゆ。古の勇士なり。又呂氏春秋に、「孟賁齊人、能生拔牛角、秦武王好力士、

賁往歸之」とあり。○爽籟 さはやかなる秋聲をいふ。爽は廣韻に、「烈也」、説文に、「明也」とあり。籟は説文に「籟三孔也、大者謂之笙、中者謂之箏、小者謂之竽」とあり。また「凡孔竽箏括皆曰籟」とあり。轉じて風の音にいふ。莊子^{齊物}に、「子游曰、地籟則衆竅是已、人籟則比竹是已、敢問天籟」とあり。○風境 風の吹き交ふ境をいふ。

大意 今日、最早、九月の晦にして、秋に別るゝ日なれど、秋は天空を過ぎ行くものなれば、假令、嶓冢の如き、嚴しき關の固あり、また孟賁の如き勇士ありとも、その、過ぎ行くを追ひ留め難からんとなり。

頭目縱隨禪客乞^ハ以^テ秋施^ハ與^テ太應^ニ難^ク

山寺九月盡

釋 ○頭目云々 法華經^{提婆達多品}に、「爾時佛告諸菩薩及天人四衆、吾於過去無量劫中、求法華經、無有懈倦、於多劫中、常作國王、發願求於無上菩提、心不退轉、爲欲滿足六波羅密、勤行布施、心無憍惜、象馬、七珍、國城、妻子、奴婢、僕從、頭目、髓腦、身肉、手足、不惜軀命、云々」とあり。○禪客 佛道を修する僧。

大意 秋は今日一日の事なれば、我が頭目は、たとひ、禪客の乞ふに任すとも、この秋を施し與ふるに忍びざるべしとなり。

文峰按^ニ善^ク白駒^ノ景^ヲ詞海^ニ鱗^ノ舟^ノ紅葉^ノ聲^ヲ

秋未出詩境

釋 ○文峰 下の詞海と相對して、作文などする場所をいふ。詞峰といはんが如し。○白駒 莊子

○此歌、行成
本音原本、及
び内閣本に、

○秋去出時境 秋景のいまだ時境を去らずして、農分の影を止むるをいふ。○江談抄四に、「以音初作駒過影、葉聲聲云々、六條宮見草、被香白字所安之由、仍改作云々、以音與齊名被相試日、承作云々、齊名常以爲愁、常曰、書手片題何謀計云々、齊名臨終、宮被訪、報命「恩旨恐懷于題、但白字事不忘却云々、」又大府編談日、件題、齊名作、「霜花後發詞林曉、風聲前驅飛驒程、至于七字、風之近葉、涉前庭之義尤有興、霜花後發蓋以無由、彼口齊名云、以音詩、白駒之白字、六條宮不令直者、劣於我詩、而件詩、雖不直紅白二字、案續兩字、古風意未出之心、備此義之中、然則可謂齊名霜花之句歟云々、或人問曰、但不直字者、駒過景、葉聲聲二字、讀甚以碎歟、答云、無白字者、非讀碎、上句無秋心、白駒者秋也、白字直千金也」とあり。又十訓抄、史館若話にも出づ。

山さひし秋もくれぬとつくるかも槇の葉ことにおけるはつ霜。千里

八東の作とせ
るは誤なるべ
し。風雅和歌集上
に、暮秋のこ
ころなど詞書
じ、作者、本集
に同じ、初
句「山寒じ、
結句「おける
初霜に作る。
行成本、原本
之に同じ。二
句行成本、秋
もすきぬ」と
あり。

八東の作とせ
るは誤なるべ
し。風雅和歌集上
に、暮秋のこ
ころなど詞書
じ、作者、本集
に同じ、初
句「山寒じ、
結句「おける
初霜に作る。
行成本、原本
之に同じ。二
句行成本、秋
もすきぬ」と
あり。

出典 ○槇 倭訓栞に、「神代紀に、被をよめり。倭名抄に、杉の一種とす。真木の義、眞は衰めていへり。俗に槇に書くは、二合したるなり。一説に、此まきは、木の皮を卷たるが如くなるをもて、名とす云々」とあり。

大意 今まで賑かなりし紅葉も散り果て、遠にさびしく思はる、山中の槇の葉毎に、初霜のおける気色は、秋の盡さぬることを告ぐるなりけりとなり。

くれてゆく秋のかたみにおく物はわかもとゆひの霜にそありける。兼盛

出典 拾遺集秋に、「暮の秋、重之が消息して侍ける返事に」と詞書せり。

出典 ○もとゆひ 倭名抄調度に「孫情切韻云、登和名毛。以組束髪也」と見えたと、こゝには、我が頭髮をさせり。

大意 秋の暮れ行かんとするころ、重之が方より、安否を問ひ越せる返りごとに、暮れゆく秋の、記念として遣し置くものは、外面に降りしく霜の如く、我が頭に置ける白髪となりと、歳毎に、老の數添ふなけきを云ひやれるなり。

女郎花

花色如蒸栗、俗呼爲女郎。聞名戲欲契借老恐惡衰翁首似霜。 順 詠女郎花。

出典 本朝文粹一に見えて、戲字を「試」に作れり。

釋 〇如蒸栗 江談抄四に、「花色如蒸栗、俗呼爲女郎、或云、近日以栗爲栗可恠之、檢三文

選、注木名也云々」と見え、文選九卷魏文帝與鍾大理の詞にいはいく、「美玉白如截肪、黑髣純漆、赤擬三、黃伴三、蒸栗」とある、六臣註に「栗木實蒸之、其色鮮黃也云々」と見ゆ。されば栗は、栗の誤なるべし。されど、女郎花の色は、誠に栗を蒸せるが如くなれば、順の作意は、もとより蒸栗にて、栗の誤にはあらざるべきか。◎借老 詩經鄘風に「君子偕老」、註に「君子夫也、借老言三借生而偕死也云々」とあり。夫婦の契の深きをいふ。◎衰翁 老翁といふが如し。◎恐似霜 女郎花の、霜に萎むを恐るゝと、頭髮の白き老翁を恐れ嫌ふ意とを兼ねたり。

大意 をみなへしの花の色は、蒸したる栗の如く美しく見えて、その名も、俗に女郎花といふが故に、その名稱によりて、借老同穴の契を結ばんと欲へども、恐くは、花の方にて、我が年老いて、頭の霜の如く見ゆるを厭うて、わが望を承け引かぬなるべしとなり。

をみなへし多かるのへにやとりせはあやなくあたの名をやた、まし。 美材
出典 古今集上に「題しらす」とあり。

釋 詞の玉緒に「やすめ辭におくを」といひて、古今集卷十の「人はいさわれはなきなのをしければ昔も今もしらすとをいはむ」など例證に引けるが如し。やは疑の辭にて、あた名が立たうか知れぬといふ意なり。

大意 をみなへしの、多く咲ける野べは美しけれど、もし、これに見とれて、この野べに宿を假らば、この花は、女郎花といふ名あれば、世間に、わが好き心にて、この處に宿りたるやうに、無實の事

○借老、古今集、及び金澤本「名をやたすなむ」行成木「名をやたすなむ」に二句、新撰萬葉「はへるのへに」作る。

に、益ない評判が立つならんとなり。

をみなへし見るに心はなくさまていと、むかしの秋を戀しき。 清慎公

出典 新古今集上に「廉義公の母なくなりて後、女郎花を見て」と詞書せり。

大意 清慎公は、小野宮關白實頼といひ、廉義公は、その子三條關白頼忠なれば、母といへるは、即ち清慎公の北の方にて、その身退れるを歎きて、よみ給へるなり。さて、女郎花の、その名といひ、花の姿といひ、優にやさしきありさま、見るから、心慰むべきはすなれど、最愛の婦人に先き立たれたる不幸の身には、毫も心慰まで、却つて、昔、その人の世にありし時、互にあひ愛し、馴れ睦びし折を思ひ出でて、追慕の情に堪へずとなり。

萩 倭訓栞に「はぎ、日本紀には、榛字、葉字などを用て、はりとも、はぎとも訓せり、云々」。木立と草立とあり。

曉露鹿鳴花始發。百般攀折一時情。

出典 新撰萬葉集秋に見えて、起承は「商飈颯々葉輕々。壁葦流音數處鳴。」とありて、一時情を「一枝情」に作れり。

釋 曉露鹿鳴花始發 萩は和名抄に、一名鹿鳴草ともいふこと見えたり。さるは、鹿の妻戀して鳴く頃、萩は始めて、その花を開くものなればなり。されば、この意は、曉の露に鹿鳴きて、花始めて開くといふことなれど、なほ、その訓點は、曉の露に鹿鳴花始めて發くと訓むべし。◎百般しばしばの義。◎攀折 攀字の意輕く、たい苦心して折り取る意。

○伊勢集上に見えて、女郎花折りて、萩のものとあける男」と訓書したり。

大意 滿庭の萩に、驚しげく置きて、鹿の來鳴くと共に、花の咲けるが、一時の清興に任せて、そのまゝ見るに忍びずして、しばしも、その枝を折り取るとなり。

秋の野に萩かるをのこなはをなみねるやねりその碎けてそ思ふ。人丸

出典 拾遺集三に、「題しらず、みつね」とありて、初句「かの岡に」に作る。

釋 ◎なはをなみ 繩を無みにて、みは形狀言の語根に接して、その形狀言を、名詞、または副詞とする接尾語なり。名詞となれるものは「高み」「深み」などの如く、副詞となれるものは、今いふ「無み」又は「速み」「速み」などいふが如し。◎ねるやねりその ねるとは、麻又は、絹の類を、いくたびもさらして、白く柔にするをいふ。さて、ねりそは、練麻の義にて、薪などを束ねる料に、木の細き枝などをおし枉げたるものを、かくいへり。◎くだけてぞ思ふ 心をくだきて、戀ひ慕ふなり。

大意 四の句までは、「くだけてぞ思ふ」といはむ爲の序詞にて、秋の野に、枯れたる萩を折り取る男の、それを束ねむとするに、繩のなければ、木の若枝などを押しまげて束ねんとするが如く、心を碎きて、思ひ焦がる、我が戀ぞとなり。

うつろはむことたにをしき秋萩を折れるはかりにおける露かな。伊勢

出典 拾遺集秋に「亭子院御屏風に」と詞書し、伊勢集木には、「萩の花見たる所」と詞書したり。

釋 ◎うつろふ 「うつろ」の延言にて、こゝにては、花の散りがたに、色の變りゆくをいふ。◎を

○三四句、拾遺集、行成本、金澤本、「秋萩に折れぬばかりに作り、伊勢集、結句「おける白露」に作る。

れるばかりに 詞とゝのはず。拾遺集、行成本、金澤本に「をれぬばかりも」とあるに従ふべし。折れるほどにもといふ意なり。さらば、三句も、「秋萩に」とあるに従ふべし。

大意 その時の來りて、花の色が變り行くことさへ、いたく惜しまるゝ萩の枝を、折れんとするまで、滋くも露の置きたることとなり。

秋の野の萩のにしきをふるさとに鹿の音なからうつしてしかな。元輔

出典 歌仙家集に「小野宮のおとゝ萩さが野にいでて侍りしに」と詞書あり。

釋 ◎ふるさと 住み舊したる郷の義より、轉じては、我が生れし處をいひ、又、旅路にある人などよりは、現に我が住める處などをいへり。◎てしがな がなは希望の意の助辭。

大意 名にし負ふ嵯峨野の秋の景色、錦を織り成せるかと思はるゝ萩の下蔭に、鹿戀ふる鹿の鳴けるさま、えもいはれぬを見るにつけて、この景色を、そつくり、我が住む里に移して、心のどかに眺めたしと望みたるなり。

蘭

東雅齊に「蘭フサバカマ、倭名抄に、和名本草を引て、蘭はフサバカマ、新撰萬葉集、別用藤袴字と註せり。漢にして、古時、蘭といひしものは、即、此にして、フサバカマといふものなり。今俗に、蘭の字の音をも呼び、ランといふ者、漢にして、蘭花といひて、蘭草とは異なる物也。其説の如きは、李東璧本草に、詳に見えたり。フサバカマといふ義、不詳。其他、淡紫色、此に藤といふ色に似て、其辭の簡をなせしが、袴に似たる所あれば、藤袴とはいひしなるべし云々」とあり。

前頭更有蕭條物。老菊衰蘭三兩叢。秋萩獨夜。

出典 文集卷三に見えたる律詩の尾聯にして、上に「無限少年非我伴。可憐清夜與誰同。歡娛牢落中心少。親故凋零四面空。紅葉樹飄風起後。白鬚人立月明中。」と。

釋 〇前頭 頭はホトリの意、我が前、數歩の處をいふ。

大意 老後の秋は、物思ふこと多きに、前裁には、更に物寂しげに、哀を催す物あり。そは外ならず、霜に老い衰へたる蘭菊などの、二もと三もと残りたる叢のさまぞとなり。

〇抄秋 佩文韻府引く梁元帝集要に「九月曰暮秋、亦曰末秋、亦曰杪秋」と見ゆ。なほ、雜部、酒條參看すべし。

扶桑豈無影乎、浮雲掩而忽昏。叢蘭豈不芳乎、秋風吹而先敗。

莧裘賦。前中書王

出典 本朝文粹卷一に、莧裘賦、并序、前中書王明とありて、「余、龜山之下、聊卜幽居、欲辭官休、身、終老於此、逮草堂之漸成、爲執政者、枉被陷矣、君昏臣諛、無處于愬、命矣天矣、後代俗士、必罪吾以不遂其宿志、然魯隱欲營兔裘之地而老、爲公子重被害、春秋之義、贊成其志、以爲賢君、後來君子、若有知吾者、無隱之焉、因擬賈生鵬鳥賦、作莧裘賦、以自廣其詞曰、赤奮若歲、清和之月、陟彼西山、言探其巖、吟鵬賦而夕惕、願莧裘而朝發、昔隱公之逢害也、誠在天之棄魯、今我之不肖也、何遭世之顛越、天其何言乎、云々、夫世有治亂、時有通塞、迹有顯晦」とありて、次にこの「扶桑豈無影乎云々」の句に接し、下に「已矣、已矣、命之衰也、吾將入龜緒之巖隈、歸莧裘而去來」とあり。

釋 〇扶桑 文選西京賦に「日月於是乎出入、象扶桑與濛汜」、註に「善曰、言池廣大、日日出入其中」。また、神皇正統記卷一に「大日本は神國なり云々、また扶桑國といふものあるか。東海の中

に、扶桑の木あり、日の出づる所と見えたり。日本も東にあれば、よそへていへるか。此國に、かの木ありといふことときこえねば、確なる名には非ざるべし。云々」と見ゆ。但し、此處には、單に日の光の意にいへり。

大意 この莧裘賦は、圓融天皇の御世に、關白藤原兼通專恣にして、威福を專にし、己が從兄右大臣賴忠を左大臣たらしめんが爲に、兼明親王に惡疾ありと誣奏して、貞元二年四月廿一日、その左大臣を罷めて、右兵衛督源昭平と共に、親王に復し、二品を授け、中務卿に任せしを以て、親王、心甚平ならず。また、別莊を嵯峨の小倉の里に營みて、雄藏殿と稱し、こゝに退居せんと爲し給ひしに、また兼通の爲に沮まれて、その志を遂ぐることを得ざりしかば、彼の魯の隱公の故事によりて、この賦を作りて、滿腔の不平を述べ給ひしものなり。然れば、この數句の意も、天日を以て、帝の聖明に比し、浮雲を以て、兼通に譬へ、自ら叢蘭に比して、天日光なきにあらざれど、浮雲の之を掩ふことあるが如く、天皇の英明も、兼通が便佞の爲に掩はれて、その光を放つこと能はず、蘭はその香芳しからざるに非れども、秋風の爲に摧き敗らるることあるが如く、我が赤誠の忠も、佞臣の爲に遮られて、遂に達するに由なしとなり。さて、この對句は、文子に「日月欲明浮雲蓋之、叢蘭修發秋風敗之」とあるより出でたり。

〇莧裘 隱居所の義に用ふる。春秋左氏傳隱公十に「公曰云々、使營莧裘吾將老焉。註に、莧裘魯邑、在泰山梁父縣南、不欲復居魯朝、故別營外邑」と見ゆ。十訓抄十に、「中納言右衛門督伊藤卿は、二品中務卿兼明親王の御子なり、村上の御時、迅く召仕る間、主上仰せられて云、故宮は、常に何事をかせられし、伊藤、うまさのかはこるもとかや申物をこそ、常はもてあそばれ侍りしかと申されければ、定めて傳へられたるならん、一見せばやと仰事あり。やすく候とて、後日に封付たる

文を一巻もて参られたり。主上皮などにやと思召しけるに、文也。開きて御覽しけるに、君昏臣瞶、無所于懸」といふ句あり。文官の間、之を知らず、取出給へりけり。さる才藝の人の子にも、かゝる人おはしましけり。菟裘賦と云名をだにも、知給ざりけるにや」とあり。村上の御時とあるは誤なり。

凝如漢女顔施粉滴似鮫人眼泣珠

紅蘭受露。都夏香。

鮫人 夏部、七夕の條を見るべし。

大意 紅蘭に露の凝る時は、漢王宮中の美女が、紅粉を施したるが如く、その露の滴り落つる時は、鮫人の珠に泣くが如しとなり。

曲驚楚客秋絃馥夢斷燕姬曉枕薰

蘭氣入輕風。

出典 天徳開詩に見えたる七律なり。全詩「香蘭衆草種相分。況入輕風氣不群。臨水襲來魚底浪。落阜吹染鶴間雲。移植若逢新雨露。每秋猶欲播清芬。」

曲驚楚客 曲は文選註に「楚謠以幽蘭之儷曲、李善註に「宋玉賦曰、臣嘗行至、主人獨有一女、置蘭房之中、臣授琴而鼓之、爲幽蘭白雪之曲」と見ゆる幽蘭の曲をいふ。楚客は、楚人とおなじ。誰と、その人を斥せるにあらず。○秋絃馥 幽蘭曲を彈すといふより、琴の絃を、秋絃とも、馥しとも云へるなり。○燕姬 春秋左氏傳三年に、「初鄭文公有賤妾、曰燕姑、燕姬、燕姬夢天使與己蘭曰、余爲伯儻、余而祖也、以是爲而子、以蘭爲國香、人服之如是、既而文公見之、與之蘭而御之、辭曰、妾不才、幸而有子、將不信、敢徵蘭乎、公曰諾、生穆公、名之曰蘭、云々、穆公有疾曰、蘭死、吾其死乎、吾所以生也、刈蘭而卒」とあり。

○佐藤木、隱蘭木、寛永木私註に、蘭氣入輕風詩と見す。

○漢字、行成木、風に作る。可なるが如し。風女は、弄玉の故事が。鍾部雲の鐘、風去棄蓋云々の解を見よ。

大意 蘭氣の馥郁たるもの、そよ吹く風と共に、かの幽蘭の曲を彈する楚客を襲ひては、琴の絃も香はんとし、燕姬が夢を驚しては、覺めての後も、餘香枕上に薰すとなり。さて、幽蘭曲、燕姬夢にて、題の蘭氣をいひ、秋絃馥、曉枕薰にて、入輕風といふ意をいへり。

ぬししらぬ香はにほひつ、秋の野に誰かぬきかけしふち袴そも。素性

出典 古今集上の詞書に「藤袴をよめる」とありて、二句「香こそ句へれ」に作る、従ふべし。

藤袴 〇そも もは歎辭。

大意 この藤ばかりは、誰がこの秋の野に脱ぎかけし袴かは知らざれど、何にとも知れぬ好い香がして、そらに、その主の慕はることとなり。

槿

東雅花に「牽牛子、アサガホ、倭名鈔に、牽牛子は、アサガホといふと註せり。アサガホとは、朝に咲く花也といふ。即ち是也。云々。又俗に、ケコシと云ひしは、牽牛子の音を轉じ呼びしなり。云々。槿また讀てアサガホと云ひしは、是も一名にして、其物は異なるなり。即、今、ムクゲとも、ヤマナスともいふもの此也。ムクゲとは、木槿の字の音を轉じて呼ぶなり。ヤマナスとは、其花の、木芙蓉に似たればなり」と見ゆ。

松樹千年終是朽槿花一日自爲榮

放言詩。

出典 白氏文集十に見えたる放言五首の一にして、全詩は「泰山不要欺毫末。顔子無心美老彭。何須戀世常憂死。亦莫嫌身漫厭生。生去死來都是幻。幻人哀樂繫何情。」とあり。

大意 松は千年の壽を保つと雖も、また朽つる期あり、槿花は、朝に開きて、夕に枯ると雖も、是また

○歌仙家集、行成木、昔以本も、古今集に同じ。

一日の榮の、おのづから足れるありといひて、されば、人も、妄に死を憂へ、生を羨むに足らず、畢竟、世事は悉く夢幻の如く、この身もまた、幻の如きものなれば、何ぞ幻世の哀樂に依つて、悲喜を爲すに足らんとなり。

來而不留、薤藪有拂晨之露。去而不返、槿籬無投暮之花。

願文。前中書王

出典 本朝文粹三卷十に、「供養自筆法華經願文、前中書王」とあり。

釋 薤藪 薤は、東雅藪に「薤オホミラ、神武天皇御製の來目歌の中に、カミラといふ事の見えしを、同紀釋には、大薤といふ也と註したり。後俗呼で、ニラといふものは是也云々」と見ゆ。藪は、康熙字典に「田中高處、史記陳涉世家、輟耕而之盟上」とあり。又薤露の事は、蒙求上田橫が記事に「爲薤露蒿里歌以送終」薤露歌に、「薤上朝露何易晞。露晞明朝更復落。人死一去何時歸。」と。又、史記田橫の註に「崔豹古今註云、薤露蒿里送哀歌也。出田橫門人、橫自殺、門人傷之作悲歌、言人命如薤上露易晞滅、至李延年乃分爲二曲、薤露送王公賢人、蒿里送士大夫庶人、使挽柩者歌之、俗呼爲挽歌」とあるをいふ。◎投暮 投は字典に「與返同、止也」とあり。

大意 此世に生れ來る人、一人として、永久に留ることを得ざるは、岡の上の薤における露の、忽に乾くが如く、また一たび、身まかれる人の還り來らざることは、槿の籬に、夕べまでたもつ花なきにひとしとなり。白氏文集にも、「薤藪有朝露。槿枝無宿花。」と見ゆ。

おほつかなたれとかしらむ秋霧のたえまに見ゆる朝かほの花。 道信

出典 新勅撰集上に「題しらず、よみ人しらず」とあり。

大意 朝顔といふにつきて、それを人の顔にとりなして、ほのぼのと明けゆく空に、たなびける秋霧の絶間より、ほのかに見ゆる彼の朝顔は、おほつかななくて、誰とも見分け難しとなり。

朝かほをなにはかなしと思ふらむ人をも花はさこそ見るらめ。 同

出典 拾遺集の詞書に「あさがほの花を、人のもとにつかはすと」とありて、三句「思ひけむ」に作る。

大意 朝顔の花の、夕を待たぬを、人は、はかなき物と思ふならん、されど、人のこの世にあるも、同じく、朝夕を待たぬ習なれば、花の方より見る時は、是もはかなき物の一つと見るらんものを、我が身の上を思ひ計らずして、徒に、花を哀と思ふは愚なりとなり。

前栽 倭訓栞「庭前のうゑ木をいふ。後園にむかへたる名なり」とあり。

多見栽花悦目儔先時豫養待開遊。

栽花。儔三品。

釋 儔は、康熙字典に「音酬、衆也、等類也、楚辭王逸註、二人爲匹、四人爲儔」とあり。

◎先時豫養 時節に先ちて、兼てより培養するをいふ。

大意 次の二句と併せて、七言絶句一首なれば、次に云へり。

自吾閑寂家僮倦春樹春栽秋草秋。

同

○行成本、三句、拾遺集に同じく、結句「いかにみるらむ」に作る。

釋 閑寂 閑散寂寥の意。◎家僮 漢書書の註に「僮者婢妾之總稱」と見ゆ。
大意 多く世上の花を愛翫する人を見るに、其の時々に先だちて、懇に培養して、花の開くを待ちて遊ぶと雖も、吾は閑散逸樂を事として、之に仕うる僮僕も、事に懶ければ、その花の咲くべき折々、即ち春の樹は春、秋の草は秋移し植ゑて翫ぶのみなりとなり。

閑思看汝花紅日正是當吾鬢白時初種花樹詩

○日本詩紀に引けるには、白時を、「白年」に作る。菅原本、終裁編樹と題す。

大意 今日、この樹を植うるにつけて、つくぐと、その行く末を思へば、盛に、紅の花を開く頃は、吾が鬢毛の白くなる頃なるべしと、前途の甚だ遠遠なるをいへり。

曾非種處思元亮爲是花時供世尊栽種菊

釋 ◎種處 陶潛が菊花を愛して、その東籬の下に植ゑたるが如く、晉公も、亦同じ東籬の下に、菊花を栽培せられしなり。◎元亮 陶潛、字は元亮、或は淵明といふ。◎世尊 梵語に、路迦那他といひ、佛十號の一とし、或は、十號總括の稱と云へり。衆徳を備へ、世の爲に欽重せられ、天上人間共に尊ぶ所の義とす。翻譯名義集に「成論云、具上九號、爲物欽重、故曰世尊、天上人間、所共尊故、乃至具茲十徳一名世間尊」と見えたり。

大意 今、此の菊花を植うるは、かの元亮が風流を思つて、徒に愛翫せんとはあらず、此の花の咲く時、採りて佛に奉らむが爲なりとなり。

塵をたにするしとそ思ふうゑしよりいとわかぬるとこ夏の花。野恒

出典 古今集夏に「隣より、床夏の花を乞ひにおこせたりければ、惜みて、この歌をよみて遣しける」と詞書して、三句「ささしより」に作る。

釋 ◎とこ夏の花 瞿麥、なでしこの一名なり。この花、夏の花なれど、春より秋にかけて、常に、夏の如くなるをいふ。さて、花の名を常夏といふより、臥す床をいひかけて、拂ひ清めて、塵をも据ゑじといへるなり。床に塵の据うるは、夫妻の契の稀なるにいふ。

大意 この花は、名をも、とこなつといへば、我が妻と共に臥す床の如く、この花を植ゑて以來、塵さへもするじと秘藏する花なれば、折角の御所望なれども、折りて參らせ難しといひながら、折りて遣せるなりとなり。

花により物をそおもふ白露のおくにもいかゝあらむとすらむ。

大意 花を大切に思つて、はかなき露の置くにも、うつろひやせん、如何あらんと思へば、花故に、さまざまの心遣ひせらるとなり。

紅葉 附落葉

不堪紅葉青苔地又是涼風暮雨天秋雨中華元九

出典 白氏文集卷十に見えて、轉結の二句は、「莫怪獨吟秋思苦、此君校近二毛年」とあり。
大意 青き苔生せる地上に、紅葉の散りつもれるさま物哀なるに、又、冷かなる風吹き荒びて、暮れ行く空に、雨さへ降り添へたるが、わりなく慰めがたしとなり。

○諸本、原註を缺く。作者未考。又前句、行成本、ならむとすらむに作る。

○風字、「塵」に作る本、まあり。非なり。

黄纈纈林寒有葉。碧瑠璃水淨無風。

泛太湖香荷。微之。白。

出典 白氏文集卷二に、泛太湖書事寄微之と題し、上に「煙渚雲帆處處通。飄然舟似入虛空。玉杯淺酌巡初匝。金管徐吹典未終。」。避旗飛鷺翻々白。驚鼓跳魚拔刺紅。洞雪

壓多松偃蹇。巖泉滴久石玲瓏。書爲故事留湖上。吟作新詩寄浙東。軍府威容從道盛。江山氣色定知同。報君一事君應羨。五宿澄波皓月中。

釋 ○黄纈纈林 纈纈は、東雅器に「夾纈、カウケチ、倭名鈔に、布帛部に、東宮切韻に、纈は、結帛爲文綵也、孫愐曰、縉之有夾花也、此間に、カウケチといふと註したり。今世の、しばり、鹿子染などいふものなり」と見ゆ。さて、今いふ、黄纈纈林とは、木々の梢の紅葉して、青紅黄、さまざまの色の混りたるが、纈染に似たるをいふ。○碧瑠璃水 瑠璃は、倭訓栞に「瑠璃也。るりの色にさける朝がほなど見えたり。源氏に、紺るりと見ゆ。碧色をいふ」とあり。かく瑠璃は、もと、珠の名なるを、其の色の碧を假りて、湖水などの透徹して、清らかなるを形容したり。

大意 太湖の四面の紅葉は、恰も纈纈染の林の如くなりしが、おひく、冬に向ふ頃とて、やうく散り失せたと、なほ多少の紅葉を残し、湖上の水は、恰も、瑠璃の如き色をなして、清淨にして風も立たずと、陸上の紅葉、湖上の水、雨々相對して、景色えもいはれざるさまなり。

○太湖・大明一統志十四「湖州府太湖在府城北二十八里烏程長尺之間。禹貢曰：震澤。」

洞中清淺瑠璃水。庭上蕭條錦繡林。

既池頭紅葉。保胤。

○錦字、菅原本、内閣本、及び尊則本、

釋 ○洞中 洞は、説文に「疾流也、又空也、幽也」。康熙字典に「幽壑曰洞」と見ゆ。○錦繡林

紅葉の林の、錦やぬひものに似たるをいふ。

大意 幽溪より出づる水は、淺く清らかにして、恰も、瑠璃の如く、庭前の紅葉は、蕭條として秋色を帯びたれど、その色の艶なるは、錦繡にも似たりとなり。

外物獨醒松澗色。餘波合力錦江聲。

山水唯紅葉。以首。

釋 ○外物 紅葉以外の草木をいふ。○獨醒 楚の屈原が「衆人皆醉、我獨醒」の言をかりて、衆

木の皆紅なるは、衆人の醉へるが如く、松樹の獨り醒なるは、原が獨り醒めたるに似たりといへるなり。○松澗色 松樹に圍まれたる澗の水の色は、紅葉の時節に至るも、なほ、綠なるをいふ。○餘波合力 紅葉を散らまじ風のなごりが、波を起して、紅葉の落ち散る音と、互に、力を合すなり。

○錦江聲 廖氏輿地書泗州府に「錦江、城南一名二江、汝江、流江、此水濯錦鮮明」と見ゆ。蜀の成都は、錦の産地を以て名に負へる地なり。さて、彼の澗中に散り落ちたる紅葉の流るさま、錦を濯ぐが如くなるに、風の吹き來る毎に、波に音あれば、恰も蜀人の、錦江の流に錦を濯ぐ聲かと思はるゝとなり。

大意 明かなり。

しら露も時雨もいたくもる山は下葉のこらす紅葉しにけり。其之

出典 歌仙家集實之集の詞書に「竹生島にまうづるに、もる山といふ所にて」と見ゆ。

貞享本、阪本、「塵」に作る。日本詩紀卷二十九に引く所、之に同じ。

○結句、古今集、實之集、行成本、金澤本、「色づきにけり」とある僅れり。

○もる山 近江國野洲郡もり山、森山、杜山とも書き、今、守山といふ。もりに、雨の漏るといふことをいひかけたり。

大意 紅葉は、露や時雨の爲に色づくものなれば、もる山といふ名を負へる、この處の木立は、今まで通り來れる山々とは異りて、梢ばかりか、下葉に至るまで、悉皆色付きたりとなり。

むらむらの錦とそ見るさほ山のは、その紅葉きりた、ぬまは。清正

○むらむら むらとは、端、匹などいふ字を訓みて、紅葉の盛なる色が、何匹、幾端とも知れぬ錦を晒すと見ゆる由なり。◎さほ山 大和國添上郡佐保山をいふ。◎は、そ 柞の木をいふ。

東雅竹に「柞、ユレ、倭名鈔に、云々、ユレの義不詳、今俗に、クシノ木といふ是也、漢語抄には、ハ、ンといひ、漢語草に、コナラカシハといふと見えし是也」とあり。◎さりた、ぬまは 霧起たぬに、切り裁ぬをかよはして、錦の縁語となせり。

大意 佐保山の柞の森の、見ゆる限り紅葉したるを、いまだ、秋霧の立ちかくさぬ間に見渡せば、恰も、裁ち切らぬ錦の織物を、幾反となく晒したるが如しとなり。下句を上へまはして見るべし。

三秋而宮漏正長空階雨滴萬里而鄉園何在落葉窓深

釋 三秋、淵鑑類函に「陰陽五行曆曰、一時爲三月、一月爲一秋、三月爲三秋、又一月爲三秋、故三月有九秋之名也」と見ゆ。この三秋は、秋になりての三月目、即ち暮秋（九月）の稱なるが如し。◎宮漏 宮中の漏刻にして、夏部、扇の條に見えたり。◎空階 階は、玉階に「登

○掃字、諸本「拂」に作る。文集及び行成本によりて改む。

ノ堂道也、級也」と見ゆ。即ち、人影もなき寂しき階段なり。◎郷園 古郷なり。大意秋更けて、宮漏時の移るを示せども、夜は明けやらで、獨つくと物思ふ折しも、空階に、しめやかなる雨の滴る音す、また、萬里の他郷に客となりては、首を回して、故郷を望めども、其處とも見えす、空しく落葉の、窓に訪ふ聲を聞く時、實に憂愁に堪へずと、上句は宮女の怨情をいひ、下句は游子の懷郷の情を叙べたり。

秋庭不掃携藤杖閑踏梧桐黃葉行

出典 白氏文集三に見えたる七絶にして、起承は「地僻門深少送迎。披衣閑坐養幽情。」とあり。大意 明かなり。

城柳宮槐漫搖落秋悲不到貴人心

出典 白氏文集三に見えて、漫を「謾」に、秋悲を「悲秋」に作り、起承の二句は「津橋殘月曉沉沉。風露淒涼禁暑深」とあり。

釋 搖落 秋風に、木葉の揺られ落つる意。

大意 早旦、洛陽城に入りて、留守王僕射に贈れる詩にて、いふ心は、秋風蕭條として、城牆の柳宮掖の槐など、亂りがはしく散り落つれども、閣下の如く、今を盛に時めける貴人の心には、何等の感傷も起らざるべしとなり。

○留守 書言故事九に「守舊京者曰留守。」○僕射 唐の制、尚書、中書、門下の三者あり。其の尚書者は、我が邦の太政官

に當り、其の長官、次官を、尙書令、左僕射、右僕射といふ。本朝の三公の任なり。然れども、唐の時の尙書令は、上の三公の長官にて、宰相の任なれども、三公の員數にあらず。宰相は、必ず僕射を兼ねれども、僕射は、宰相の官にあらず。宋の時の三公も、略、唐の時に同じ。

梧楸影中、一聲之雨空灑。鷓鴣背上、數片之紅纒殘。

葉落風枝疎序。

出典 本朝文粹十卷に、冬日於神泉苑、同賦葉下風枝疎と題し、神泉苑者、禁苑之其一也、紅林地廣、香楚夢於胷中、綠池水高、縮吳江於眼下、戶部省侍郎以下、偷取暇豫于其間、蓋亦禁漁釣、不禁吟詠也、觀夫葉隨風下、枝逐日疎、梧楸影中云々、蕭々然、颯々然、誠足以感耳目者也、云々」とあり。

釋 梧楸 楸は、本草綱目啓蒙木之に「秘傳花鏡に、梓ノ形狀ヲ書スルモ楸ノコトナリ。故ニ大和本草ニ梓ヲキサ、ギトス、皆非ナリト云フハ大ナル誤ナリ。己ニ時珍ノ説ニ、木理白者爲梓、赤者爲楸ト云フ。ソノ白者爲梓ト云フハ即キサ、ギニシテ、和名鈔ノアツサ是ナリ。又赤者爲楸ト云ハ、即アカガシハニシテ、和名鈔ノヒサギ是ナリ」と見ゆ。又、梧は、同書に「木直聳シテ、梢上ニ枝條分レ、樹皮綠色ニシテ、膚美ハシ云々ト云ヒ、俗ニアヲキリといふものなり」とあり。なほ、上の早春の條を合せ見るべし。◎一聲之雨 梧楸の葉の落つる音の、雨の如くなるをいふ。◎空灑 雨の如き音はすれど、眞の雨ならねば、空しく灑ぐといへり。◎鷓鴣 本草綱目啓蒙禽之に「和産ナシ。嶺南ノ産ニシテ、北方ニ産セズ。稀ニ舶來アリ。大サ矮雞ノ雌ニ似タリ。云々」。廣東新語ニ、「飛數必隨月、正月一飛而止、十二月則十二飛而止、山中人輒以其飛而計月、人間何月一矣、則云、鷓鴣幾飛矣、

早暮有霜露、則不飛、飛必啣木葉以自蔽、霜露微霑、其背聲爲之墜、故性絕畏霜露」と見ゆ。大意 青桐や楸などの、風に散る影の閃々と共に、その音は、恰も一村雨の降るが如く聞え、木々の木葉も残りなく散り落ちて、彼の鷓鴣といふ鳥の、背に載せたる數片の木葉の紅ばかり、纒に残れりとなり。

樵蘇往反杖穿朱買臣之衣、隱逸優遊履踏葛稚仙之藥。

落葉滿山中路序。高相如。

出典 本朝文粹十卷に、初冬於長樂寺、同賦落葉山中路と題して、「夫長樂寺者、形勝之其一也、云云、于時、樹間葉落、山中路幽、晚霞影輕、漫埋出峽之猿叫、曉雨聲冷、暗洗在林之鹿鳴、度澗口以繽紛、拂岩腹以蕭颯、至彼錦繡而辭蜀機、丹丸碎而謝仙窟、樵蘇往反、云々」とあり。釋 ◎樵蘇 康熙字典に「采薪曰樵、取草曰蘇」とあり、即ち、木を伐り、草を刈る賤の男をいふ。◎朱買臣之衣 漢書朱買臣傳に「朱買臣、字翁子、會稽人也、好讀書不治產業、云々、買臣隨上計吏爲卒、將重車至長安、詣闕上書、云々、帝甚說之、拜買臣爲中大夫、與嚴助俱侍中、云々、上拜買臣會稽太守、上謂買臣曰、富貴不還故鄉、如衣繡夜行、今子如何、買臣頓首辭謝、云々」とあり。是によりて、錦繡を朱買臣の衣といふ。◎隱逸 世を遁れて、山谷に隠るる人をいふ。◎葛稚仙之藥 列仙全傳四卷に云ふ「葛洪、字稚川、句容人、少好學、云々、晉成帝咸和初、司徒王導、召補主簿、後選爲散騎常侍、領大著作、俱不就、辭以年老、欲煉丹以期遐壽、聞交趾出丹砂、求爲勾漏令、云々、遂止羅浮山、煉丹在山七年、優游閑養、著述不輟」と見ゆ。その煉るところの丹藥は、色赤ければ、紅葉によそへていへり。

大意 落葉の散り積める山中の路は、滿目紅了して、木樵草刈の往反にも、人の譽とする錦の衣を、杖の先に穿ちて往き來し、また、世の逸人が心まかせの遊行には、流石に得難き丹藥の上を踏みあ

るくとなり。
隨風落葉含蕭瑟。澗石飛泉弄雅琴。秋色變山水。

出典 天徳關詩に、秋光變山水と題せり。曹原本、全詩「秋光變處望中尋。山水蒼々景氣深。烟暗半殘鐘袖黛。月明斜入鏡湖心。」。欲愛風流新趣去。君恩未報不抽簪。

釋 風 山氣なること、上の菊の條にいへるが如し。然るに、源順、その著、倭名抄天部に、孫愔が切韻を引いて「山下出風也」と註し、和名阿良之と訓めるより、一般に暴風をいふことゝなれり。但し、玉篇に「嵐大風也」と註し、文選謝靈運出の註、及び、一切經音義に「嵐山風也」といへるによれば、和名抄の説、また棄て難きに似たり。こゝには、山風をいへり。委しきは、箋注倭名類聚抄天地に見ゆ。◎蕭瑟 秋風の急なる聲なり。雅琴に對するは、たゞ字對ばかりなり。

大意 秋來れば、山水の景氣も、悉く、その趣を改めて、山風のまゝに散る紅葉の葉は、秋のさびしさを含み、石に流れ瀾ぐ瀧の音は、琴を弄ぶに似たりとなり。

逐夜光多吳苑月。每朝聲少漢林風。秋葉隨日落。

釋 ◎吳苑 吳國の園苑なり。この吳は戰國時代の吳なり。王夫差が、西施を寵して豪華を窮めしより、多く詩材に采れり。◎漢林 漢の上林苑をいふ。上林苑のことは春部、花の條に出でたり。

○嵐註、隱日の二字、内閣本、逐日に作り、又曹原本には、蕭瑟隨日盡と題す。

大意 秋風吹き來りて、さすがに繁かりし吳苑の梢も、まばらになり行けば、月の光も、夜を追うて、地上に映ること多く、上林苑の木葉も、散るに従つて、風のそよぐこと少ければ、朝毎に、風の音を聞くことも稀になり行くとなり。

江漢抄四に、此詩をあげて、「漢林亭、人々伊齡曰、若漢上林苑、離合任意也、云々、宮以詞林、被爲證、人々歎伏、以音云、此句雖佳句、於中書王御詩、不如八葉風聲承三祖業、一枝月桂作孫謀句云々」とあり。

あすか川もみちはなかるかつらぎの山の秋風ふきそしぬらし。人丸

出典 古今集下秋及び、大和物語下に「龍田川もみぢ葉ながるかみなびのみむろの山に時雨ふるらし」といふ歌あり。なほ、萬葉集十卷に「あすか川もみぢ葉ながる葛木の山の木葉は今し散るかも」とありと、何れも同意なれば、萬葉の歌を本にて、種々に作りかへて、各の集に入れたるなるべし。

釋 ◎あすか川 大和國高市郡飛鳥川をいふ。◎かつらぎ山 飛鳥川の川上にある山にて、大和河内の境に跨る。◎らし 物の結果を見て、その起を推察する意の助辭なり。

大意 飛鳥川の岩のはさまなどに、紅葉の溜れるが、水に押し流され來るを見て、この紅葉の夥しく流れ來ることよ、是は、この河上なる葛城山に、秋風が強吹きたる結果ならんと思ひやれるなり。

神無月しくれとともにかみなひの森の木葉はふりにこそふれ。實之
出典 後撰集冬には、「題しらす、よみ人しらす」と見ゆ。

○結句、行成本「ふきぞし」に作る。

○歌仙家集、及び、類從本紅葉之集には見えず。